

南原遺跡 XI

埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

埼玉県戸田市教育委員会



1 調査区遠景（北方上空から）



2 調査区全景（上方が北）

はじめに

埼玉県南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口13万人を超える都市に成長しています。

まちの景観の変化とともに社会的、文化的な環境も変わってきておりますが、古来より受け継がれてきた伝統や歴史を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護が現在求められています。

そのような状況下において、今回報告いたします南原遺跡第11次発掘調査は、共同住宅建設に伴い、平成24年に緊急発掘調査が行われたものです。この発掘調査によって弥生時代から中世に生活を営んだ人々が遺した貴重な痕跡を多数検出し、当時の人々の生活や社会を知るための良好な資料を確認することができました。本書が、戸田市をより深く知るための一助となることができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、ご尽力、ご協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成25年12月

戸田市教育委員会
教育長 羽富 正晃

例 言

1. 本書は、埼玉県戸田市南町 2369 - 1 所在の南原遺跡第 11 次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は伊藤忠都市開発株式会社による共同住宅建設に伴う緊急調査として、戸田市教育委員会（担当：岩井聖吾）が大成エンジニアリング株式会社の支援を受けて実施した。また、整理作業、報告書作成は、戸田市教育委員会が大成エンジニアリング株式会社から支援を受けて実施した。
3. 発掘調査は平成 24 年 9 月 3 日から平成 24 年 10 月 31 日まで行い、整理作業・報告書作成は平成 24 年 11 月 1 日から平成 25 年 12 月 25 日まで大成エンジニアリング府中事務所で実施した。
4. 発掘調査から報告書作成までの調査事業費は、伊藤忠都市開発株式会社の全額負担による。
5. 本書は、埼玉県戸田市教育委員会が刊行した。
6. 本書は、岩井聖吾が監修した。編集は、坂上直嗣指導の下、山寄裕子が行った。執筆は、第 1 章第 1 節、第 7 章を岩井聖吾、第 1 章第 2 節、第 2 ～ 5 章を坂上直嗣が担当した。
7. 以下の項目において、多大なるご指導とご協力をいただき、玉稿を賜った。
第 6 章 鈴木伸哉（首都大学東京）氏
8. 動物遺体は、植月 学（山梨県立博物館）氏に同定していただいた。
9. 調査および本書を作成するにあたり、次の方々・機関にご指導、ご協力を賜った。
鬼塚知典 小池 聡 小坂延仁 小島清一 長澤有史 服部敬史 原 廣志 福田 聖 山田琴子
吉田幸一 若松良一
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
戸田市立郷土博物館 戸田市遺跡調査協力会 （敬称略 五十音順）
10. 調査において、以下の項目の一部を委託した。
土工事（表土・攪乱掘削）：有限会社久松興業
基準点測量：中央航業株式会社
ラジコンヘリ空撮：有限会社 K E L E K
11. 本書の写真図版は、遺構を坂上直嗣・土本 医が、遺物を山寄裕子が撮影した。
12. 本遺跡の出土遺物・実測図・写真は、すべて戸田市教育委員会で保管している。
13. 調査組織は以下の通りである。

【埼玉県戸田市教育委員会】

調 査 主 体 者 戸田市教育委員会

教 育 長 羽富正晃

教 育 部 長 奥墨 章（平成 25 年 3 月 31 日まで）

山本義幸（平成 25 年 4 月 1 日から）

次 長 江添信城

生 涯 学 習 課 長 頓所博行

生 涯 学 習 課 主 幹 津田孝一

生 涯 学 習 課 主 事 池上裕康

生 涯 学 習 課 主 事 補 岩井聖吾

【大成エンジニアリング株式会社 埋蔵文化財調査部門】

顧問 早川 泉 工務課長代理 浅見克己
安孫子昭二 主任調査員 坂上直嗣
部門長 河野一也 調査員 土本 医
調査課長 小宮山友康 山寄裕子







発掘作業参加者

新木邦義 池上ななみ 石井加代 稲川伸子 榎本 昇 梶原順子 木下浩史 佐久間正崇
鈴木勝広 瀬戸宏征 高橋慶多 竹田久美子 田原 浩 富下伸一 永瀬洋美 中村 歩
永吉峰子 並木智子 福江貴浩 細田大士 前沢由香 柳瀬忠彦 吉岡秀雄

整理作業参加者

青池紀子 安部滋子 池上ななみ 小室峯子 末松 宏 菅鉢康弘 早田利宏 高橋慶多
中村君江 西川 純 藤瀬和枝 松島 淳 柳田美須穂

凡 例

1. 本書で使用した地図は、下記地形図・地図を基に作成した。
 - ・ゼンリン電子地図帳「Zi 12 DVD 関東・東海・関西版」2009（許諾番号 Z13BD 第 150 号）
2. 本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則しており、平面図の方位は真北を示す。
3. 挿図の縮尺は各挿図に示した。
4. 本調査では世界測地系に準拠した経緯上に、 $X = -21764.000$ 、 $Y = -14340.000$ の国家座標を基点にして 4 m 四方のグリッドを設定した。グリッドの呼称については北西隅を基点に、東西方向に大文字アルファベット、南北方向にアラビア数字を振り「A-1」のように表記する。
5. 標高は、T. P.（東京湾中等潮位）を基準とした。
6. 遺構平面図と遺物実測図中のトーンおよび記号は以下の通りである。
 - ・地山：
 - ・焼土範囲：
 - ・須恵器（断面）：
 - ・赤色塗彩の土器（赤彩部分）：
 - ・柱痕跡：
 - ・土器、石器摩擦痕部：上記以外は各図にその内容を示す。
7. 遺物の種別のうち、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器はすべて弥生土器、中世の陶器類はすべて中世陶器とした。また、中世陶器の器種のうち、片口の痕跡が確認できない鉢はすべて「鉢」と記載した。
8. 遺物実測図のうち、整形や器面の摩耗により調整痕が不明瞭なものについては破線で示した。
9. 遺物観察表中の胎土及び焼成の項の表記は、緻密>密、良好>良である。
10. 遺物拓影図は、向かって左に内面を、右に外面を示した。ただし、外面のみの場合には、向かって左に外面を示した。底面は下に示した。
11. 遺構覆土・土器などの遺物の色調は『新版標準土色帖』2008 年度版（小山正忠・竹原秀雄編・著者、農林水産省農林水産技術会議事務所監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、日本色研事業株式会社発行）を参考にした。
12. 写真図版の縮尺は、遺構は不同、遺物は実測図に準拠した。また、写真図版のみ掲載している遺物の縮尺は 1/3 である。
13. 遺物の註記は、「MHXI」と頭に冠した。
14. 遺構の略記号は以下のとおりである。
 - S A = 柵列跡 S B = 掘立柱建物跡 S D = 溝跡 S E = 井戸跡 S K = 土坑
 - S X = 周溝状遺構 P = ピット
15. 引用・参考文献は、第 1～5 章を第 5 章末に、第 6・7 章は各章末に掲載した。

目 次

巻頭図版

はじめに

例 言／凡 例

目次／挿図目次／挿表目次／図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 調査の経過 1

第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第1節 地理的環境 3

第2節 歴史的環境 5

第3節 遺跡・調査の概要 8

第4節 基本土層 8

第3章 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構と遺物

第1節 周溝状遺構 10

第2節 溝跡 18

第3節 遺構外出土遺物 18

第4章 平安時代～中世の遺構と遺物

第1節 掘立柱建物跡 19

第2節 柵列跡 26

第3節 井戸跡 29

第4節 溝跡 40

第5節 土坑 46

第6節 ピット 58

第7節 遺構外出土遺物 63

第5章 その他の時期の遺構と遺物

第1節 溝跡 64

第2節 遺構外出土遺物 66

第6章 南原遺跡第11次調査地点から出土した木製品の樹種

1. 資料と方法 67

2. 結果と考察 67

3. 考察 67

第7章 まとめ

1. 弥生時代後期から古墳時代初頭 69

2. 平安時代から中世 74

結語 74

巻末図版

報告書抄録／奥付

挿図目次

第 1 図 地形模式図 …………… 3	第 27 図 第 2 号井戸跡実測図 …………… 33
第 2 図 南原遺跡及び周辺の遺跡位置図 … 4	第 28 図 第 2 号井戸跡出土遺物実測図 …… 34
第 3 図 南原遺跡調査地位置図 …………… 5	第 29 図 第 3 号井戸跡実測図 …………… 36
第 4 図 全体図 …………… 6	第 30 図 第 3 号井戸跡出土遺物実測図 …… 36
第 5 図 調査区等高線図 …………… 7	第 31 図 第 4 号井戸跡実測図 …………… 37
第 6 図 基本土層図 …………… 9	第 32 図 第 4 号井戸跡出土遺物実測図 …… 38
第 7 図 第 1 号周溝状遺構実測図 …………… 10	第 33 図 第 5 号井戸跡実測図 …………… 38
第 8 図 第 1 号周溝状遺構遺物分布・微細図 …………… 11	第 34 図 第 6 号井戸跡実測図 …………… 39
第 9 図 第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図 …………… 11	第 35 図 第 7 号井戸跡実測図 …………… 40
第 10 図 第 2 号周溝状遺構実測図 …………… 13	第 36 図 第 8 号井戸跡実測図 …………… 40
第 11 図 第 2 号周溝状遺構出土遺物実測図 …………… 13	第 37 図 第 1・2・3 号溝跡実測図 (1) …………… 42
第 12 図 第 3 号周溝状遺構・第 9 号溝跡実測図 …………… 14	第 38 図 第 1・2・3 号溝跡実測図 (2) …………… 43
第 13 図 第 3 号周溝状遺構遺物分布・微細図 …………… 15	第 39 図 第 3 号溝跡出土遺物実測図 …… 43
第 14 図 第 3 号周溝状遺構出土遺物実測図 …………… 16	第 40 図 第 4 号溝跡実測図 …………… 44
第 15 図 遺構外出土遺物実測図 …………… 18	第 41 図 第 5・6 号溝跡実測図 …………… 45
第 16 図 第 1 号掘立柱建物跡実測図 …… 20	第 42 図 第 1～8 号土坑実測図 …………… 49
第 17 図 第 2 号掘立柱建物跡実測図 …… 21	第 43 図 第 9～16 号土坑実測図 …… 52
第 18 図 第 3 号掘立柱建物跡実測図 …… 22	第 44 図 第 17～24 号土坑実測図 …… 55
第 19 図 第 4 号掘立柱建物跡実測図 …… 23	第 45 図 第 25～31 号土坑実測図 …… 58
第 20 図 第 5 号掘立柱建物跡実測図 …… 24	第 46 図 ピット全体図 …………… 59
第 21 図 第 6 号掘立柱建物跡実測図 …… 25	第 47 図 ピット番号図 …………… 60
第 22 図 第 1 号柵列跡実測図 …………… 26	第 48 図 P 52 実測図 …………… 62
第 23 図 第 2 号柵列跡実測図 …………… 27	第 49 図 P 320 出土遺物実測図 …… 62
第 24 図 第 3・4 号柵列跡実測図 …… 28	第 50 図 遺構外出土遺物実測図 …… 63
第 25 図 第 1 号井戸跡実測図 …………… 30	第 51 図 第 7・8 号溝跡実測図 …… 65
第 26 図 第 1 号井戸跡出土遺物実測図 …… 31	第 52 図 戸田市域における周溝状遺構の分類 …………… 69
	第 53 図 周溝状遺構の開口部方位 …… 73
	第 54 図 周溝状遺構類型と規模の関係 …… 73

挿表目次

第 1 表	南原遺跡周辺の遺跡の概要	4	第 9 表	第 4 号井戸跡出土遺物観察表	38
第 2 表	第 1 号周溝状遺構出土遺物観察表	11	第 10 表	第 6 号井戸跡出土遺物観察表	39
第 3 表	第 2 号周溝状遺構出土遺物観察表	13	第 11 表	第 3 号溝跡出土遺物観察表	43
第 4 表	第 3 号周溝状遺構出土遺物観察表	17	第 12 表	第 6 号溝跡出土遺物観察表	46
第 5 表	遺構外出土遺物観察表	18	第 13 表	ピット計測表 (1)	61
第 6 表	第 1 号井戸跡出土遺物観察表	32	第 14 表	ピット計測表 (2)	62
第 7 表	第 2 号井戸跡出土遺物観察表	35	第 15 表	P 320 出土遺物観察表	62
第 8 表	第 3 号井戸跡出土遺物観察表	37	第 16 表	遺構外出土遺物観察表	63
			第 17 表	戸田市域における周溝状遺構一覧表	70

図版目次

巻頭図版 1

- 1 調査区遠景 (北方上空から)
- 2 調査区全景 (上方が北)

図版 1

- 1 第 1 号周溝状遺構完掘 (南西から)
- 2 第 1 号周溝状遺構完掘 (北西から)
- 3 第 1 号周溝状遺構遺物出土状況① (南西から)
- 4 第 1 号周溝状遺構遺物出土状況② (北から)
- 5 第 1 号周溝状遺構 BB' 断面 (南東から)

図版 2

- 1 第 2 号周溝状遺構完掘 (南東から)
- 2 第 3 号周溝状遺構完掘 (南東から)

図版 3

- 1 第 3 号周溝状遺構遺物出土状況① (北西から)
- 2 第 3 号周溝状遺構遺物出土状況② (西から)
- 3 第 3 号周溝状遺構遺物出土状況③ (南東から)
- 4 第 3 号周溝状遺構遺物出土状況④ (南東から)
- 5 第 9 号溝跡完掘 (南東から)

図版 4

- 1 第 1～6 号掘立柱建物跡・第 1～4 号柵列跡完掘
- 2 第 1 号掘立柱建物跡 P11 断面 (南から)
- 3 第 6 号掘立柱建物跡 P306 断面 (南から)
- 4 第 2 号柵列跡 P60 断面 (南から)
- 5 第 2 号柵列跡 P143 断面 (南から)

図版 5

- 1 第 1 号井戸跡完掘 (南から)
- 2 第 2 号井戸跡完掘 (南から)

図版 6

- 1 第1号井戸跡上部断面（南東から）
- 2 第1号井戸跡下部断面（南東から）
- 3 第2号井戸跡上部断面（南東から）
- 4 第2号井戸跡下部断面（南東から）
- 5 第1～5号井戸跡完掘（南東から）

図版 7

- 1 第3号井戸跡完掘（南から）
- 2 第4号井戸跡完掘（南から）
- 3 第5号井戸跡完掘（南から）
- 4 第6号井戸跡完掘（南から）
- 5 第7号井戸跡完掘（南から）
- 6 第8号井戸跡完掘（南から）
- 7 第1号溝跡完掘（南東から）
- 8 第1・2号溝跡完掘（南西から）

図版 8

- 1 第3・4・7・8号溝跡完掘（北西から）
- 2 第5・6号溝跡完掘（北東から）
- 3 第8号土坑完掘（南から）
- 4 第8号土坑断面（南から）
- 5 第13号土坑完掘（南から）
- 6 第20号土坑完掘（南から）
- 7 第24号土坑完掘（南から）
- 8 第27~30号土坑完掘（南西から）

図版 9

- 第1号周溝状遺構出土遺物
- 第2号周溝状遺構出土遺物
- 第3号周溝状遺構出土遺物

図版 10

- 弥生時代後期～古墳時代初頭遺構外出土遺物
- 第1号井戸跡出土遺物

図版 11

- 第2号井戸跡出土遺物
- 第3号井戸跡出土遺物

図版 12

- 第4号井戸跡出土遺物
 - 第6号井戸跡出土遺物
 - 第3号溝跡出土遺物
 - 第6号溝跡出土遺物
- P320 出土遺物
- 平安時代～中世遺構外出土遺物

図版 13

- 南原遺跡第11次調査地点から出土した木製品の顕微鏡写真

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成23年9月、事業者である伊藤忠都市開発株式会社（以下「事業者」と略す）から戸田市教育委員会（以下「市教育委員会」と略す）に対し、戸田市南町2369-1（地番）における、4,234㎡の集合住宅建設事業計画と埋蔵文化財の取扱いについて相談があった。

市教育委員会では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地（南原遺跡）に隣接しており、開発工事に埋蔵文化財が発見される可能性が高いため、事業者に対し工事着手前に試掘確認調査を実施するよう指導した。

これを受け、平成24年5月23日に事業者から市教育委員会に対し依頼書が提出され、試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は、市教育委員会が平成24年7月30日～8月1日に実施し、古墳時代～中世の周溝状遺構、溝状遺構、土師器、須恵器、陶器、その他時期不明の土坑やピット、溝を確認した。

この調査結果に基づき、平成24年8月10日付で周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を行い、平成24年8月13日付戸教生第486号にて埼玉県教育委員会（以下「県教育委員会」と略す）宛に報告した。

その後、事業者、市教育委員会間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、事業計画の変更は困難であるため、事前調査で埋蔵文化財が検出され、工事による破壊を免れない箇所については記録保存のための緊急発掘調査を実施することで合意した。

平成24年8月29日、事業者から文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、平成24年8月31日付戸教生第550号にて県教育委員会教育長あてに進達した。これを受けて、県教育委員会教育長から事業者に対し、平成24年9月11日付教生文第5-584号で、申請地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

事業者は市教育委員会に対し、平成24年8月29日付で発掘調査の依頼書を提出し、また同日付戸教生第537号にて、2者による「共同住宅建設事業予定地にかかる埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。

そして、市教育委員会から県教育委員会教育長宛に、文化財保護法第99条の規定に基づき、平成24年8月31日付戸教生第549号により埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、南原遺跡第11次発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

調査区は、埼玉県戸田市南町2369-1に所在する敷地内の共同住宅建設計画部分であり、且つ事前調査により遺構が確認された箇所で、調査対象面積は1,847㎡である。調査区外となる敷地に表土や二次発生土を場内で保管することが可能であったため、本調査では調査区全域を一度に調査する方法を採用

した。

平成 24 年 9 月 3 日、発掘機材・重機・仮設トイレ等を搬入後、調査区の設定を行い、午後には調査区北東側から表土掘削を開始した。翌 4 日には仮設ハウスを搬入したが、前日の降雨などで設置に多くの時間を要したため、調査は開始できなかった。5 日から本格的に調査を開始し、2 台の重機を用いて、まず調査区全体を 0.5 m ほど掘削した。6 日からは 1 台の重機で遺構確認面まで掘削するとともに、人力による遺構確認及び遺構検出状況の写真撮影を並行して進めた。18 日には検出した順に遺構の調査を開始した。翌 19 日、調査区南西側の表土を掘削したところ、溝跡を調査区外に続くように検出し、敷地内の建物建設部分で遺構がないと判断していた部分に続いていることが判明した。その区域にはすでに表土掘削土等を積み上げていたため対応を検討し、当初の計画通りの調査区で調査を進め、埋戻しの際に調査区を拡張し、出来る限りの調査を実施することとした。

9 月 24 日には表土掘削がすべて終了し、遺構調査に全力を注ぐことになった。その後、建設工事の都合から、調査が完了した部分から順次引き渡してほしいとの要望があったため、10 月 13 日に遺構調査が完了していた部分の空撮を実施し、15 日から埋め戻しと調査区の一部拡張および拡張部の溝跡の調査を実施した。25 日には再度空撮を行い、基本層序を確認して遺構の調査をすべて完了した。最終的に調査した面積は 1,956.11m²である。26 日から発掘機材や図面、遺物類を順次撤収し、10 月 31 日に仮設ハウスや重機を搬出し、現地調査をすべて完了した。

整理作業は 11 月 1 日から本格的に開始した。まず、記録図面と写真の整理・修正、遺物の洗浄・註記・接合作業等の基礎整理を実施した。次に、遺構のデジタルトレース作業及び遺物の実測・デジタルトレース作業、写真撮影を、平成 25 年 7 月下旬まで行った。報告書作成のための資料が整った後は、遺構図・遺物図・写真図版の作成、本文の執筆、編集作業を行い、平成 25 年 12 月 25 日に報告書を刊行し、すべての業務が完了した。

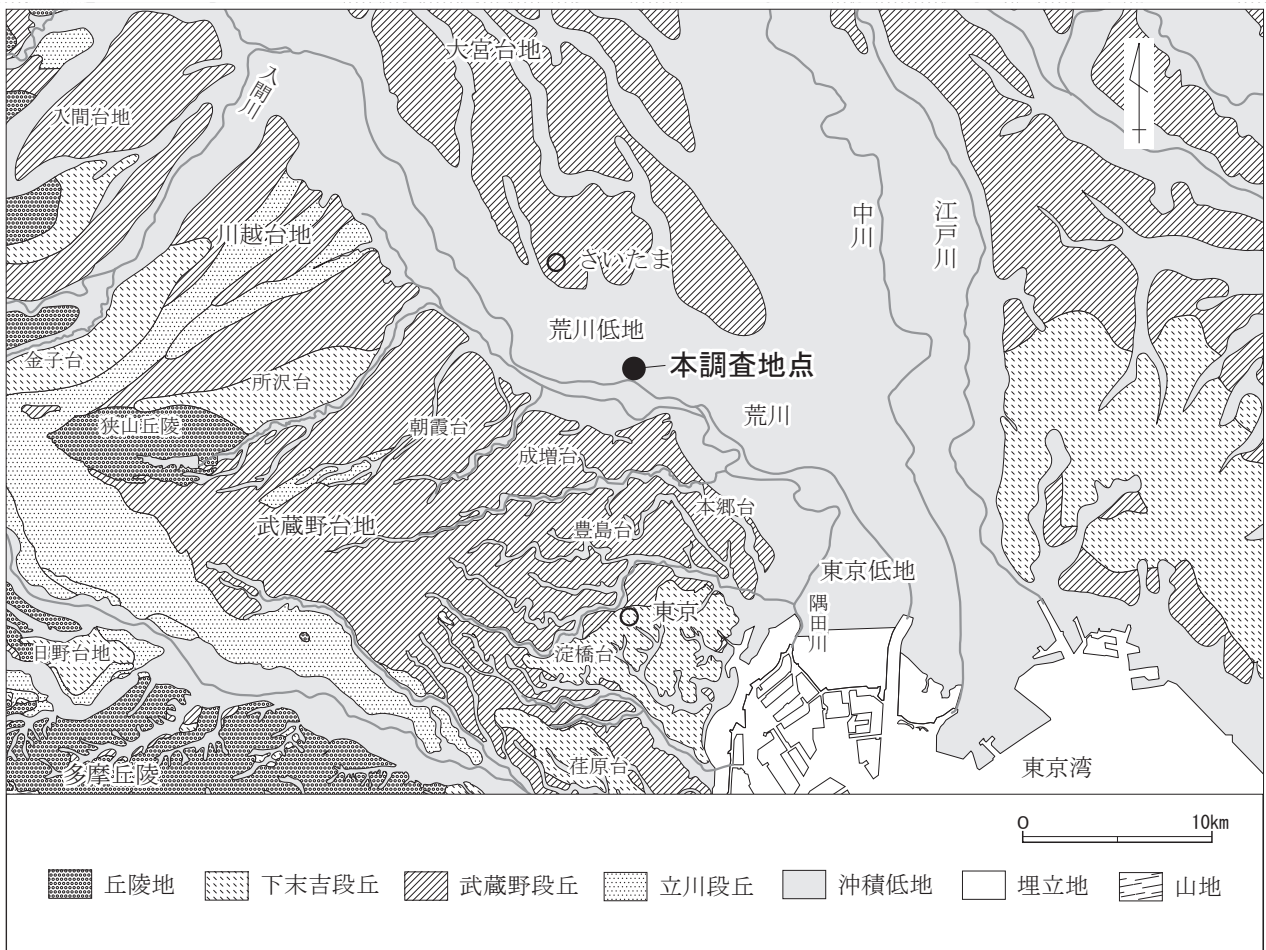
第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第1節 地理的環境(第1図)

戸田市は、埼玉県南東部に位置し、東西約6.0km、南北約3.0km、面積18.17km²の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市と川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市と和光市、南の東京都板橋区と北区には荒川を隔てて接している。市域には国道17号線(中山道)や新大宮バイパスが南北に走り、首都高速5号線や東京外郭環状道路、JR埼京線の開通により交通の利便性が高まり、急激な市街地化が進んでいる。また、都心に近い立地のため、工場や流通センターなども数多く所在する。

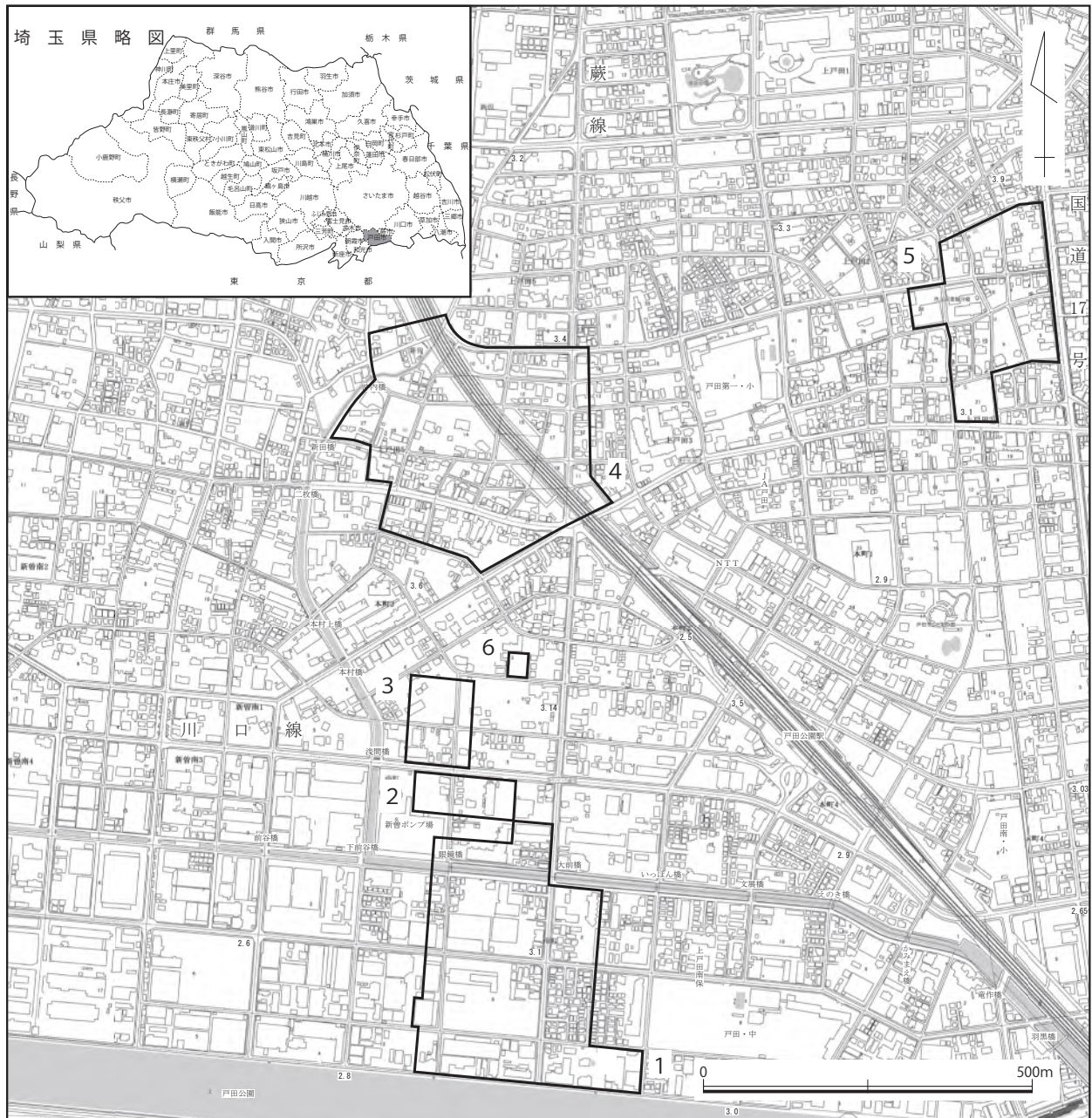
戸田市の地形は、関東北西部の山地から端を発す荒川によって形成された平坦な沖積低地(荒川低地)が全域を占める。荒川は氾濫や流路変更によって市域の中央部を西から美女木、上戸田を通り、東は川口市にかけて微高地(自然堤防)を形成している。この微高地の南北に低地が裾のように広がる。

南原遺跡は、荒川左岸に発達した標高3m前後の微高地上に立地しており、戸田市域を横断する



第1図 地形模式図 (S=1/400,000)

微高地の南東部に位置する。本遺跡のすぐ南側には戸田漕艇場が所在し、その500m南には荒川が東流している。また、遺跡内の南東部には南西-北東方向に旧河道が確認されており、微高地を分



第2図 南原遺跡及び周辺の遺跡位置図 (S=1/10,000)

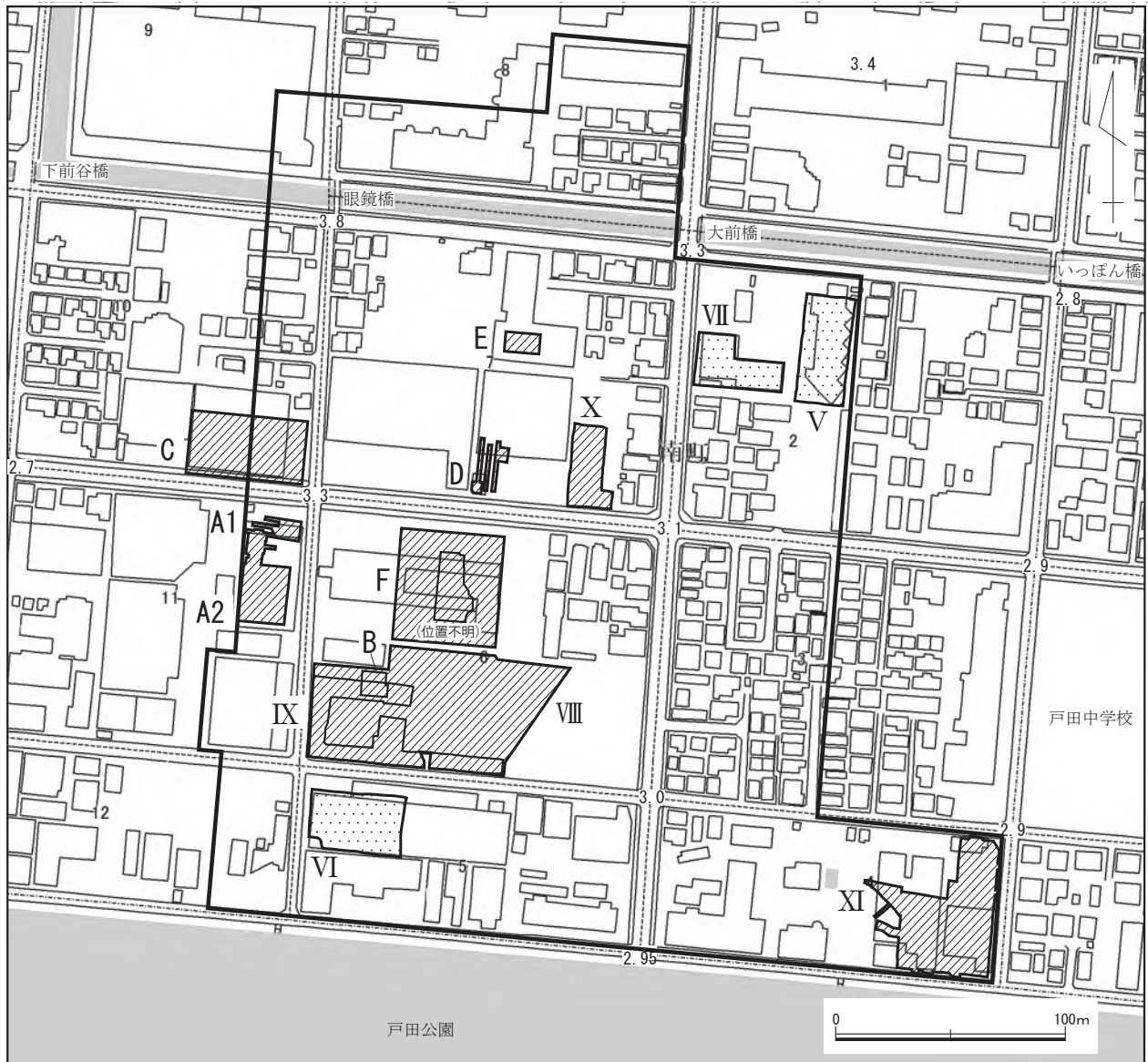
第1表 南原遺跡周辺の遺跡の概要

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	立地	遺構概要
1	南原遺跡	戸田市南町	集落跡 古墳 城館跡	弥生後期 古墳前期 古墳後期 奈良 平安	微高地	住居跡、方形周溝墓、円形周溝墓、円墳、館跡(空堀・土坑他)
2	南町遺跡	戸田市南町	集落跡	古墳前期	微高地	住居跡、方形周溝墓
3	上戸田本村遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡 古墳	弥生後期 古墳後期 戦国	微高地	住居跡、方形周溝墓
4	鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市新曾、上戸田3丁目、上戸田5丁目、本町3丁目	集落跡	弥生後期 古墳前期	微高地	住居跡、方形周溝墓、円形周溝墓
5	前谷遺跡	戸田市上戸田2丁目	集落跡 城館跡	弥生後期 古墳前期 平安 戦国	微高地	方形周溝墓、井戸、溝、堀
6	大前遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡	古墳前期 鎌倉 南北町 室町	微高地	掘立柱建物跡、溝

断している。これまで発掘調査を実施した地点は南原遺跡の西部に集中しており、南東部における遺構・遺物の確認および発掘調査は今回が初めてである。

第2節 歴史的環境(第2図 第1表)

戸田市では旧石器時代の遺跡は確認されていない。縄文時代では前期末、中期中葉～後葉、後期中葉の土器が採集されているが、これらは遺構に伴うものではなく、縄文時代に帰属する遺跡は未



▨ 戸田市教育委員会調査

A1 第1次調査(1969)

A2・B 第2次調査(1970)

C 分布調査のみ

D・E 第3次調査(1972)

F 第4次調査(1972)

VIII 第8次調査(2008)

IX 第9次調査(2009)

X 第10次調査(2011)

XI 第11次調査(2012)

⋯ 戸田市遺跡調査会調査

V 第5次調査(1989)

VI 第6次調査(1992)

VII 第7次調査(2003)

第3図 南原遺跡調査地位置図 (S=1/3,000)



- | | | | | |
|----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1 : 第1号周溝状遺構 | 14 : 第1号溝跡 | 27 : 第5号井戸跡 | 40 : 第10号土坑 | 53 : 第23号土坑 |
| 2 : 第2号周溝状遺構 | 15 : 第2号溝跡 | 28 : 第6号井戸跡 | 41 : 第11号土坑 | 54 : 第24号土坑 |
| 3 : 第3号周溝状遺構 | 16 : 第3号溝跡 | 29 : 第7号井戸跡 | 42 : 第12号土坑 | 55 : 第25号土坑 |
| 4 : 第1号柵列跡 | 17 : 第4号溝跡 | 30 : 第8号井戸跡 | 43 : 第13号土坑 | 56 : 第26号土坑 |
| 5 : 第2号柵列跡 | 18 : 第5号溝跡 | 31 : 第1号土坑 | 44 : 第14号土坑 | 57 : 第27号土坑 |
| 6 : 第3号柵列跡 | 19 : 第6号溝跡 | 32 : 第2号土坑 | 45 : 第15号土坑 | 58 : 第28号土坑 |
| 7 : 第4号柵列跡 | 20 : 第7号溝跡 | 33 : 第3号土坑 | 46 : 第16号土坑 | 59 : 第29号土坑 |
| 8 : 第1号掘立柱建物跡 | 21 : 第8号溝跡 | 34 : 第4号土坑 | 47 : 第17号土坑 | 60 : 第30号土坑 |
| 9 : 第2号掘立柱建物跡 | 22 : 第9号溝跡 | 35 : 第5号土坑 | 48 : 第18号土坑 | 61 : 第31号土坑 |
| 10 : 第3号掘立柱建物跡 | 23 : 第1号井戸跡 | 36 : 第6号土坑 | 49 : 第19号土坑 | |
| 11 : 第4号掘立柱建物跡 | 24 : 第2号井戸跡 | 37 : 第7号土坑 | 50 : 第20号土坑 | |
| 12 : 第5号掘立柱建物跡 | 25 : 第3号井戸跡 | 38 : 第8号土坑 | 51 : 第21号土坑 | |
| 13 : 第6号掘立柱建物跡 | 26 : 第4号井戸跡 | 39 : 第9号土坑 | 52 : 第22号土坑 | |

第4図 全体図 (S=1/2,000・1/400)



第5図 調査区等高線図 (S=1/400)

だ確認されていない。弥生時代前期から中期の遺跡についても未確認だが、大宮台地、荒川右岸の武蔵野台地上では当該期の遺跡が確認されている。

弥生時代後期から古墳時代前期になると、戸田市内でも遺跡が多く確認されるようになり、本遺跡をはじめ、南町遺跡、上戸田本村遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡などが微高地上に密集して形成される。特に本遺跡の約 500 m 北に位置する鍛冶谷・新田口遺跡は、昭和 51 年に県選定重要遺跡に指定されており、竪穴住居跡や方形周溝墓、周溝状遺構が多数検出されている（西口 1986・小島 1990 ほか）。戸田市に隣接する川口市の芝峰町遺跡では、古墳時代前期から中期にかけての集落跡が発見されている。また、蕨市の金山遺跡からも弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が出土している。

古墳時代中期は南原遺跡で竪穴住居跡が 4 軒確認されている。

古墳時代後期では、南原遺跡で竪穴住居跡が確認されており、本遺跡より約 100 m 北の上戸田本

村遺跡には「くまん塚」と呼ばれた古墳が所在した。「くまん塚」は円墳で墳丘の盛土が僅かに残存しており、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀2振が出土している。この他、さいたま市の側ヶ谷戸貝塚遺跡、原遺跡、白幡本宿遺跡などが近隣の当該期に属する遺跡である。

平安時代は上戸田本村遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、本遺跡で竪穴住居跡・井戸跡・溝跡が検出されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部の地域がかつての佐々目郷に該当し、鶴岡八幡宮の社領であったことが文献史料からわかっている。当該期では、大前遺跡や前谷遺跡、上戸田本村遺跡、本遺跡で遺構や遺物が確認され、断面V字形の「堀」と思われる溝跡が検出されている。前谷遺跡周辺には桃井氏の居城であったとされる蕨城が所在した可能性も指摘されているが（岡田 1968）、未だその明確な位置や検出された遺構との関連性については明らかになっていない。

第3節 遺跡・調査の概要(第3～5図)

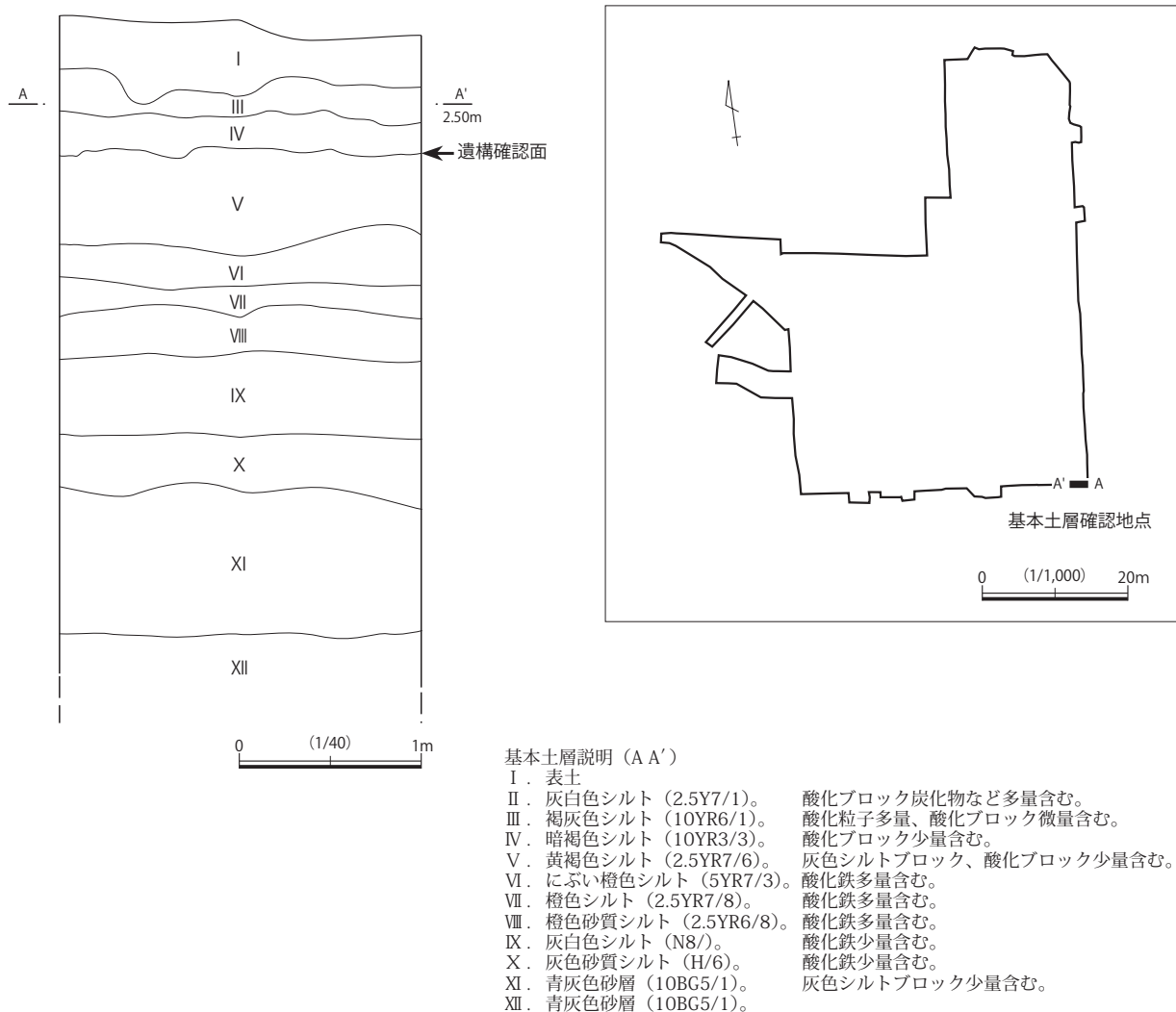
南原遺跡は、J R埼京線戸田公園駅から南西約 500 mの戸田市南町を中心とした地域に所在する。本遺跡は昭和 44 年の第 1 次調査からこれまでに 10 次にわたる調査が実施されており、弥生時代後期から古墳時代前期の集落跡・墓域、古墳時代中期から後期の集落跡・古墳、平安時代の集落跡、中世の城館もしくは寺院跡が確認される複合遺跡であることが判明している。なかでも中心となる時期は弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落と、荒川左岸流域としては県内最南端に形成された古墳時代後期の群集墳である。

本調査区は、南原遺跡の中でも南東端部に位置し、すぐ北西側にある旧河道によって分断された僅かな微高地上に位置する。遺構確認面の標高は 1.7 ～ 2.3 m で、南東から北西に向かって緩やかに傾斜している。本調査区で確認した各時代の遺構や遺物は、弥生時代後期から古墳時代初頭では周溝状遺構 3 基、溝跡 1 条、弥生土器である。平安時代から中世では掘立柱建物跡 6 棟、柵列跡 4 列、井戸跡 8 基、溝跡 6 条、土坑 31 基、ピット 273 基、須恵器、磁器、陶器、木製品、金属製品である。その他の時期としては、縄文時代中期と考えられる土器や近世以降の溝跡を 2 条検出し、遺構外からは近世のカワラケなどが出土している。

第4節 基本土層(第6図)

本調査区の基本土層は、M・N－16 グリッドで観察した。地表面の標高は概ね 3.0 m 前後である。表土掘削後の遺構確認面は第 V 層上面で、概ね標高 1.7 ～ 2.3 m である。土層は、表土面から約 3.4 m 下までの堆積層を I ～ X II 層に分層した。I 層は、表土で旧建物解体時に攪乱された層である。碎石・コンクリートガラなどを多量に含む。II 層は、基本土層確認地点には存在しないが、調査区南西壁にて確認された層である。灰白色シルト層で酸化ブロック、炭化物などを多量に含む。僅かにガラス片や陶磁器類が確認されており、灰白色シルトブロックが主体を占める層であるため、近代以降の耕作土の可能性が高い。III 層は、褐灰色シルト層で酸化粒子を多量、酸化ブロックを微量

含む。ブロック状の含有物があまり見られないため自然堆積層と考えられる。時期は下部のIV層の状況から近世以降と考えられる。IV層は、暗褐色シルト層で酸化ブロックを少量含む。III層同様ブロック状の含有物をあまり含まないため自然堆積層と考えられる。弥生時代から中世までの遺物を包含しているため、中世までの遺物包含層と考えられる。V層は、黄褐色シルトからなる氾濫土特有の粒の細かい砂混じりの粘質シルト層であり、自然堤防表層の河川性堆積土であると考えられる。この層の上面が遺構確認面である。V層以下は、河川の氾濫によって繰り返し堆積した、自然堤防を形成する河川性堆積土である。VI層は、にぶい橙色シルト層で酸化鉄を多量含む。VII層は、橙色シルト層で酸化鉄を多量含む。VIII層は、橙色砂質シルト層で酸化鉄を多量含む。IX層は、灰白色シルト層で酸化鉄粒を少量含む。X層は、灰色砂質シルト層で酸化鉄を少量含む。XI層は、青灰色砂層で灰色シルトブロックを少量含む。XII層は、青灰色砂層である。



第6図 基本土層図 (S=1/40 · 1/1,000)

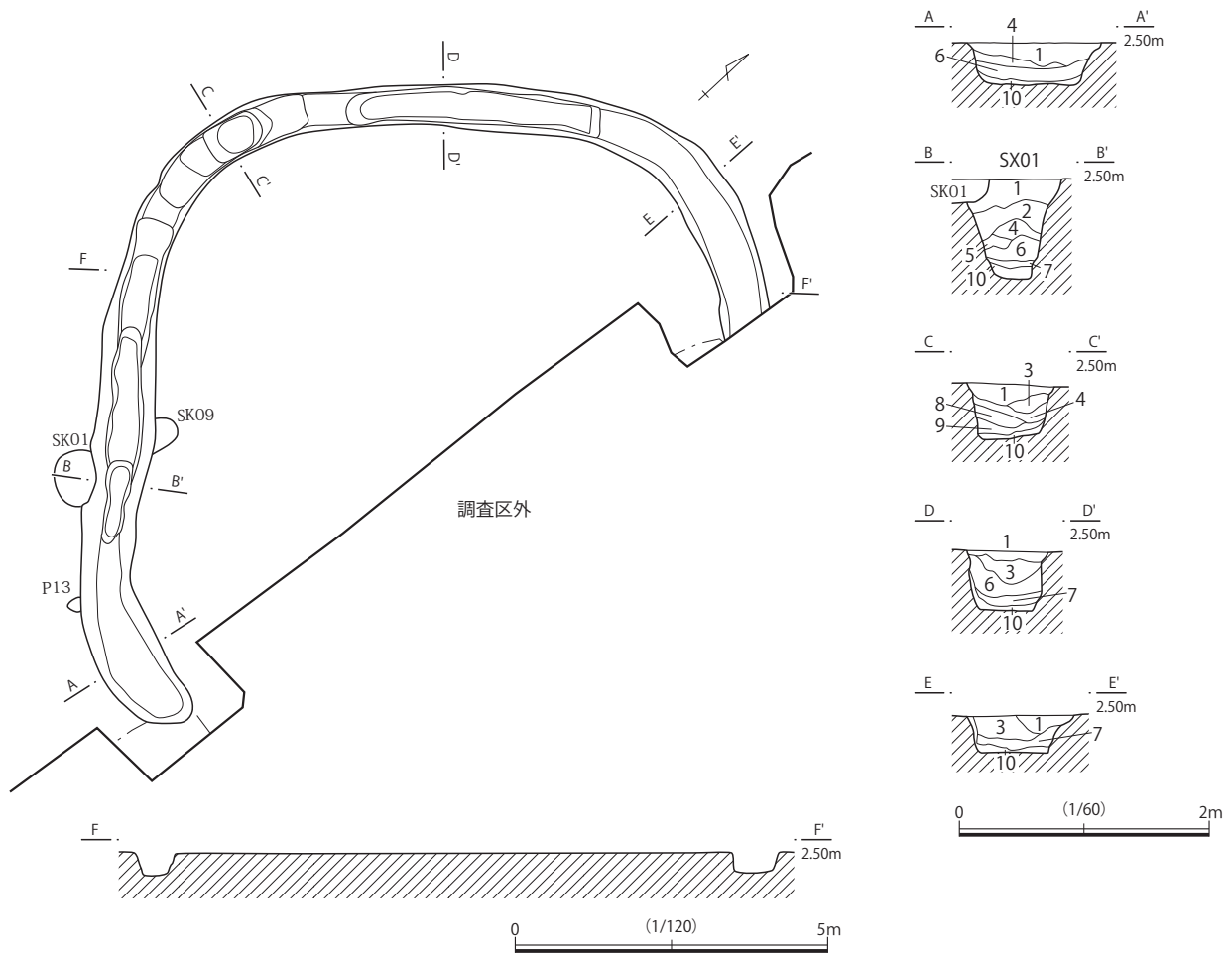
第3章 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構と遺物

第1節 周溝状遺構

第1号周溝状遺構

遺構（第7・8図 図版1）

位置：M～O-4～7グリッド。重複関係：第1・9号土坑、P13に切られる。平面形・規模：東側が調査区外に続くため推測を含むが、やや胴が張る隅丸方形で南東辺の中央が途切れ中央陸橋状になるものと推測される。全長は北西-南東軸方向が10.60m、北東-南西軸方向が10.80m、方台部は北西-南東軸方向が8.70m、北東-南西軸方向が9.30mと推測される。主軸方位：N-45°-W。周溝：



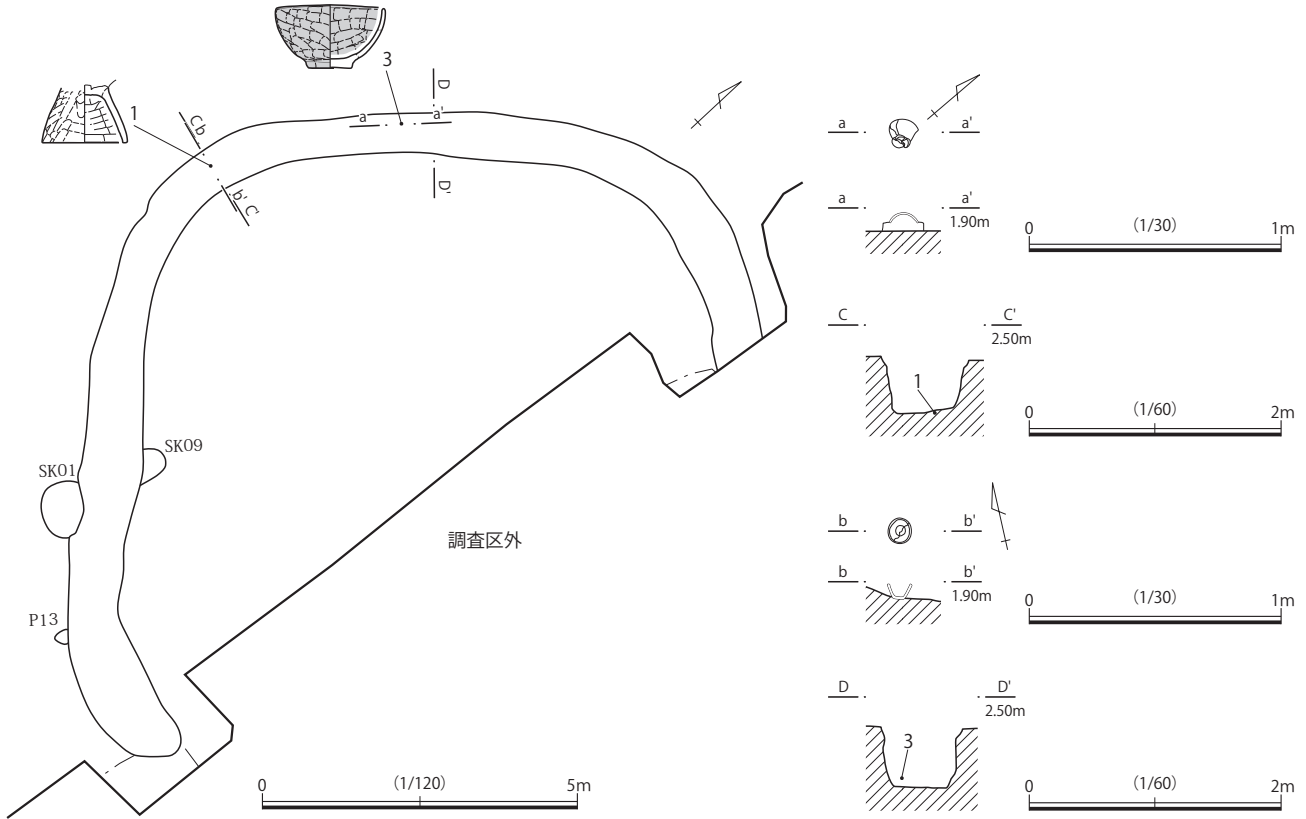
SX01

土層説明 (A A'・B B'・C C'・D D'・E E')

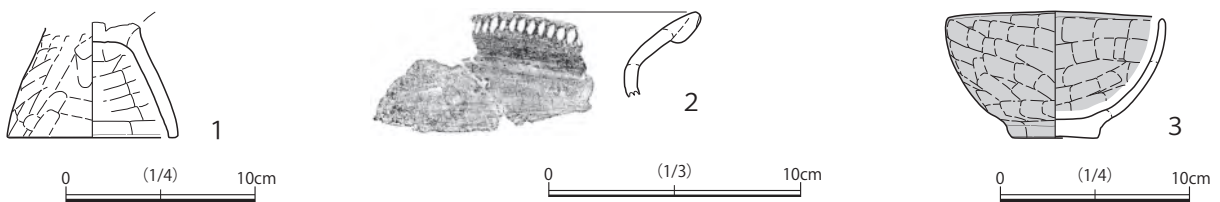
1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子中量、酸化粒子少量、灰色シルトブロック微量含む。
2. 明黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルトブロック主体層、黒褐色シルトブロック少量含む。
3. 黒褐色シルト (10YR3/1)。粘性あり、縮まりやや強。酸化粒子少量含む。
4. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子、ブロック少量含む。
5. 灰色シルト (5Y5/1)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルトブロック少量含む。
6. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子中量、明黄褐色シルトブロック、酸化鉄ブロック少量含む。
7. 橙色シルト (5YR6/8)。粘性あり、縮まりやや強。酸化粒子ブロック主体層、酸化鉄少量含む。
8. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子中量、灰色シルトブロック、酸化鉄ブロック少量含む。
9. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子、酸化鉄ブロック中量、灰色シルトブロック少量含む。
10. 明黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性あり、縮まりやや強。黒褐色シルトブロック中量含む。

第7図 第1号周溝状遺構実測図 (S = 1/120・1/60)

南東辺の中央が途切れる。断面形は逆台形で、壁は急斜度で立ち上がり、底面は平坦である。南西溝は上端幅 0.71 ~ 1.01 m、下端幅 0.56 ~ 0.71 m、確認面からの深さ 0.57 m 前後で、底面はほぼ水平である。北西・北東溝は上端幅 0.77 m 前後、下端幅 0.49 m 前後、確認面からの深さ 0.39 m で、底面はほぼ水平である。覆土：全部で 10 層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積によるものと考えられ



第 8 図 第 1 号周溝状遺構遺物分布・微細図 (S = 1/120・1/60・1/30)



第 9 図 第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図 (1/4・1/3)

第 2 表 第 1 号周溝状遺構出土遺物観察表

法量の () は推定、[] は現存、— は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9-1 9-1	SX01	弥生土器 台付甕形	— [6.1] 8.8	直線的に「ハ」の字状に開く台部。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面縦位ハケメ後縦位・斜位ヘラナデ。内面横位ヘラナデ。	褐色粒多量、砂粒少量 密	良	外—にぶい黄橙色 (10YR6/3)、 橙色 (2.5YR6/6) 内—橙色 (2.5YR6/6)、にぶい橙 色 (7.5YR7/3)	台部 100% 残存。
9-2 9-2	SX01	弥生土器 壺形	— [3.4] —	広口壺。口縁部は折り返しによる幅狭の複合口縁で、頸部は緩やかに屈曲する。外面横位ヘラナデ後口唇部にヘラ状工具によるキザミ。内面ナデ。	褐色粒多量、砂粒少量 密	良	外—にぶい褐色 (7.5YR5/4) 内—褐色 (7.5YR4/1)	口頸部 破片資料。
9-3 9-3	SX01	弥生土器 小形土器	(11.3) 6.7 4.5	平底の底部から緩やかに内湾しながら立ち上がる。内外面ともに丁寧なヘラナデ後、赤彩。	白色粒・砂粒少量、 橙色粒微量 密	良	外—にぶい黄橙色 (10YR6/3)、 黒褐色 (10YR3/1) 内—にぶい黄橙色 (10YR6/4)、 黒褐色 (10YR3/1)、赤褐色 (2.5YR4/6)	40% 残存。

る。上層は黒褐色シルト主体、最下層は明黄褐色シルト主体である。土坑：北西辺中央付近で 0.30 m、西コーナーで 0.25 m、南西辺で 0.10～0.22 m 周溝底面より低い部分があるが、断面や掘り方の状況から土坑として構築されたものとは考えにくい。

遺物（第 9 図 第 2 表 図版 9）

出土状況：本遺構からは全部で 13 点の遺物が出土した。壺形土器 7 点、（台付）甕形土器 5 点、小形土器 1 点である。このうち図示したものは 3 点である。遺物は、平面・垂直分布ともに特に纏まりをもつことなく散在的に出土している。1・3 は周溝北西辺と西コーナーの底面付近から出土している。

土器：1 は台付甕形土器の台部である。台部が完存しており、外面はヘラナデ調整されている。2 は広口壺形土器の口縁部である。複合口縁口唇部にキザミが施されている。3 は小形土器である。内外面ともに赤彩されている。

時期

底面付近から出土した遺物から、弥生時代後期～終末。

第 2 号周溝状遺構

遺構（第 10 図 図版 2）

位置：G～I－10～13 グリッド。重複関係：P 77・100 に切られる。平面形・規模：南東辺が途切れる「コ」の字形。南西辺のほぼ中央付近が括れ、北コーナー部は半円形状に張り出す。全長は北西－南東軸方向が 8.18 m、北東－南西軸方向が 8.33 m、方台部は北西－南東軸方向が 7.08 m、北東－南西軸方向が 6.98 m と推測される。主軸方位：N－61°－W。周溝：南東辺が途切れる。断面形は箱形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。南西溝は上端幅 0.50～0.92 m、下端幅 0.42～0.71 m、確認面からの深さ 0.14 m 前後で、底面はほぼ水平だが、先端部は 0.10 m ほど高くなる。北西溝は上端幅 1.11 m 前後、下端幅 0.89 m 前後、確認面からの深さ 0.16 m で、底面はほぼ水平である。北コーナーには直径 1.97 m の半円形状の張り出し部を持つ。北東溝は上端幅 0.48～1.05 m、下端幅 0.25～0.73 m、確認面からの深さ 0.12 m で、底面はほぼ水平だが、先端部は 0.05 m 程高くなる。覆土：全部で 5 層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積によるものと考えられる。上層は黒褐色シルト主体、最下層は明黄褐色シルト主体である。土坑：南西溝南側で 0.05 m 周溝底面より低い部分があるが、断面や掘り方の状況から土坑として構築されたものとは考えにくい。

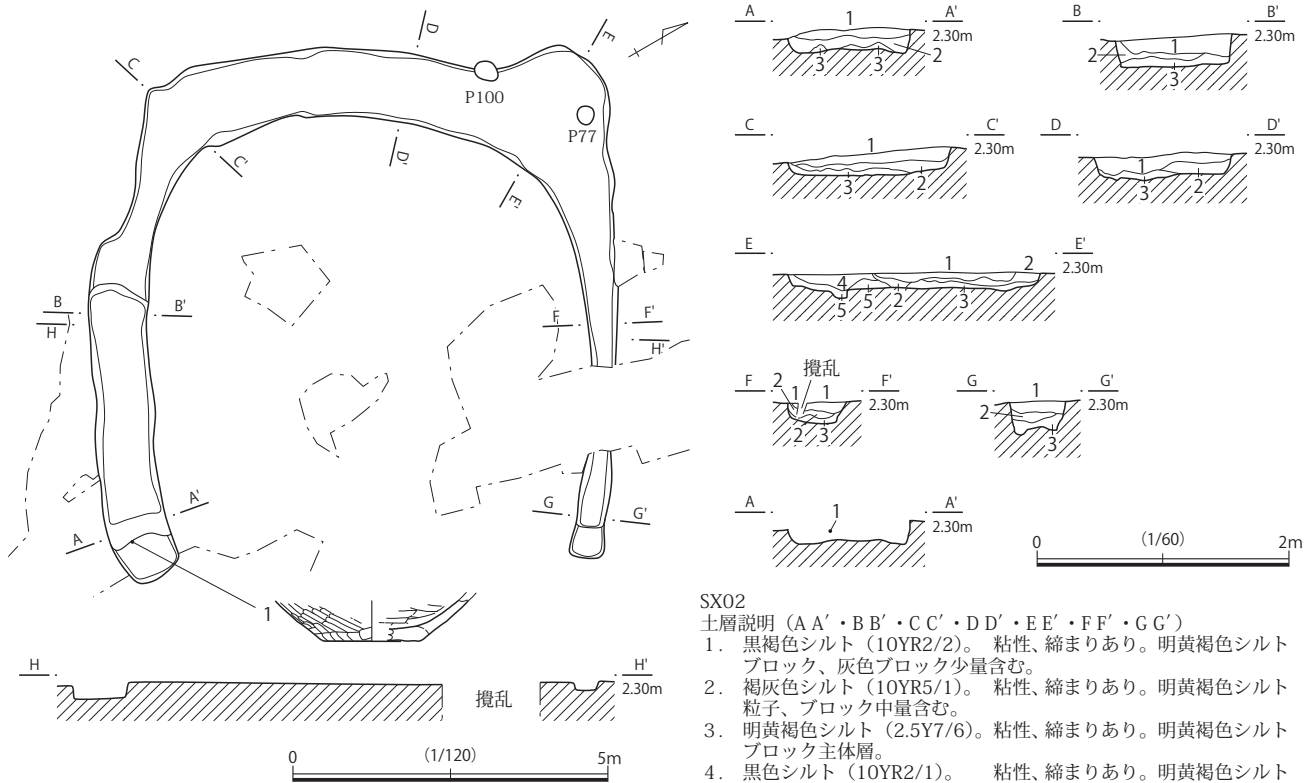
遺物（第 11 図 第 3 表 図版 9）

出土状況：本遺構からは全部で 11 点の遺物が出土した。壺形土器 5 点、器種不明の土器細片 5 点、板状の金属製品が 1 点である。このうち 1 点を図示した。遺物は、平面・垂直分布ともに特に纏まりをもつことなく散在的に出土している。1 は南西溝先端の底面付近からの出土である。

土器：1 は壺形土器の底部である。

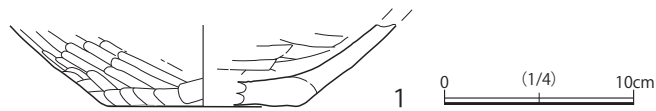
時期

出土遺物が乏しいため、時期は幅を持たせて弥生時代後期～古墳時代初頭としたい。



- SX02
土層説明 (AA'・BB'・CC'・DD'・EE'・FF'・GG')
1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック、灰色ブロック少量含む。
 2. 褐灰色シルト (10YR5/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック中量含む。
 3. 明黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック主体層。
 4. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック少量含む。
 5. 明黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック主体層。

第10図 第2号周溝状遺構実測図 (S = 1/120・1/60)



第11図 第2号周溝状遺構出土遺物実測図 (S = 1/4)

第3表 第2号周溝状遺構出土遺物観察表

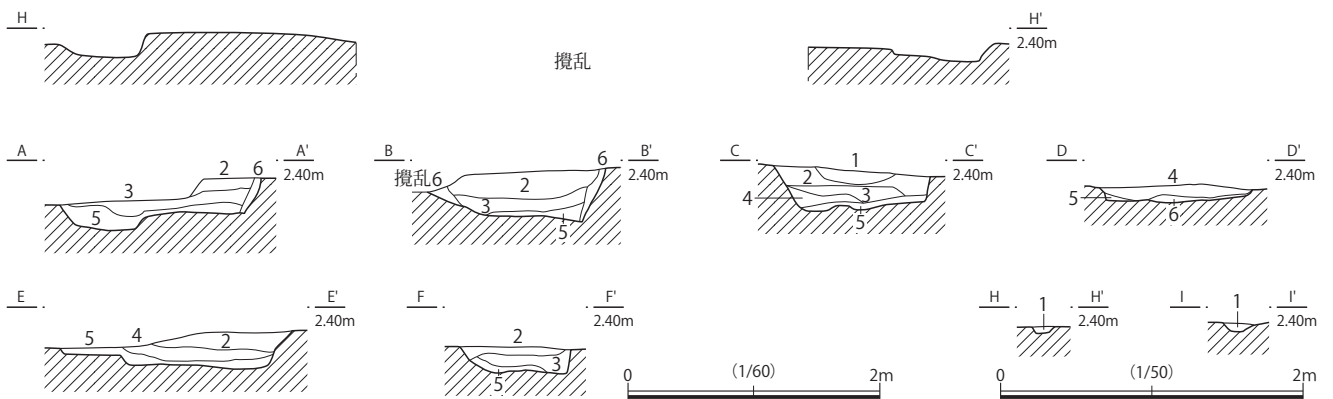
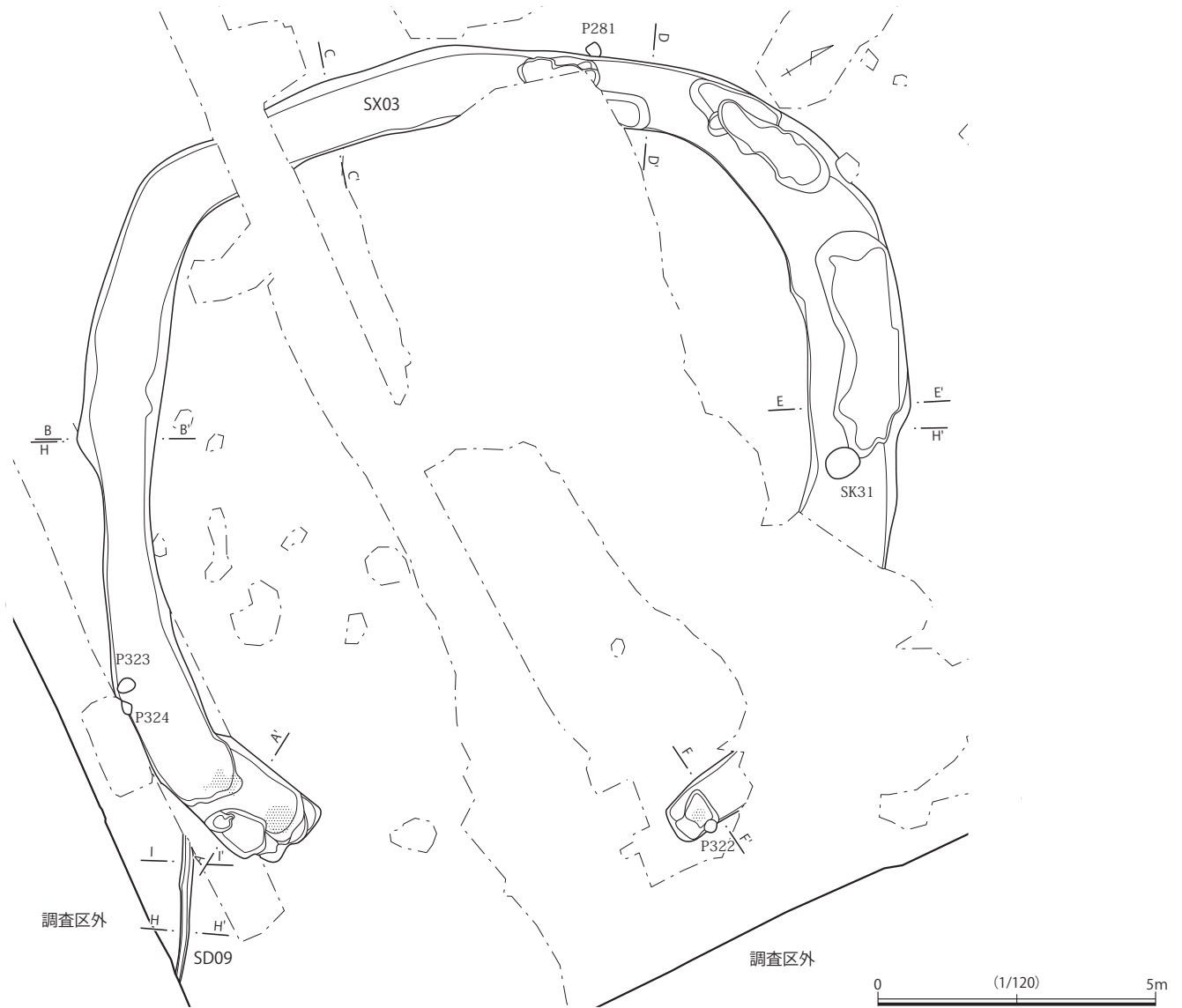
法量の () は推定、[] は現存、一は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
11-1 9-4	SX02	弥生土器 壺形	- [4.3] (10.0)	平底の底部から胴部に向かって胴下部が外傾しながら立ち上がる。外面胴下部斜位・横位、底部横位の丁寧なヘラナデ。内面斜位・横位ヘラナデ。	白色粒多量、橙色粒・砂粒少量 密	良好	外-褐灰色 (10YR4/1) 内-灰褐色 (7.5YR4/2)	胴下部～底部 30%残存。

第3号周溝状遺構

遺構 (第12・13図 図版2・3)

位置：J～N-12～16 グリッド。重複関係：第31号土坑、P 281・322～324 に切られる。平面形・規模：胴張隅丸方形で南東辺の中央が途切れ中央陸橋状を呈する。全長は北西-南東軸方向が 14.58 m、北東-南西軸方向が 14.78 m、方台部は北西-南東軸方向が 11.94 m、北東-南西軸方向が 11.67 m。主軸方位：N-59°-W。周溝：南東辺の中央が途切れる。断面形は逆台形で、壁は急斜度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。南西溝は上端幅 1.41 m 前後、下端幅 1.04 m 前後、確認面からの深さ



SX03

土層説明 (A A'・B B'・C C'・D D'・E E'・F F')

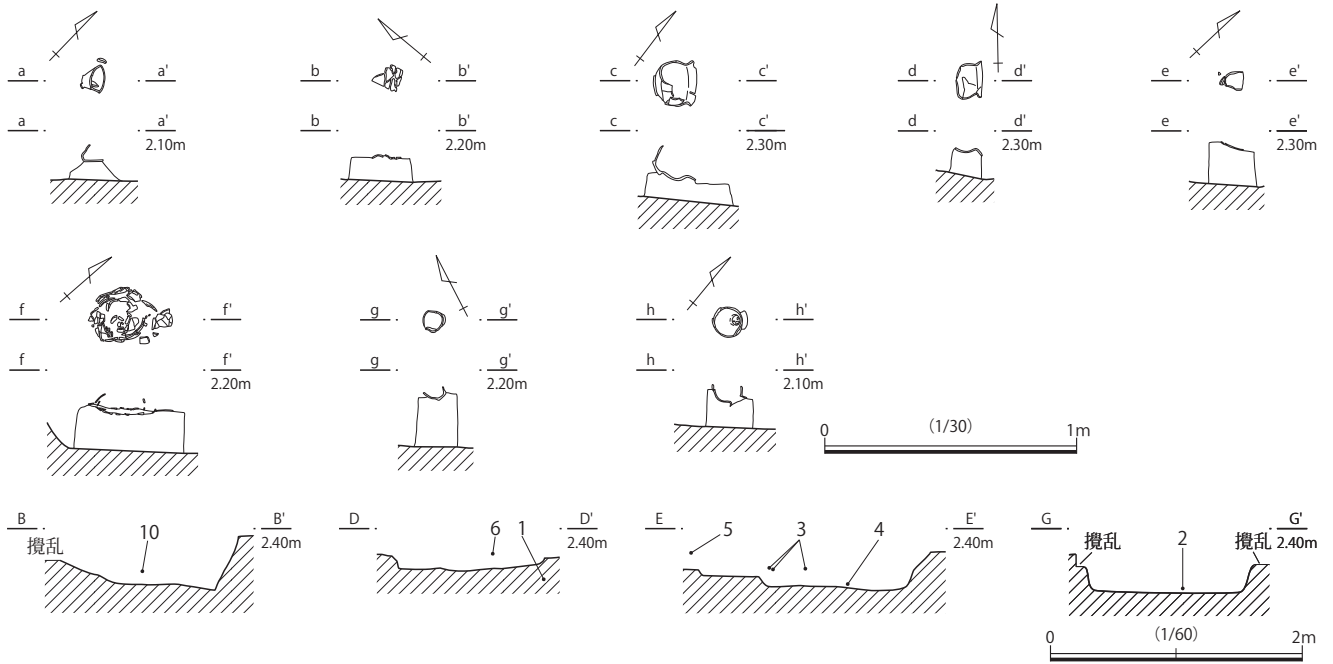
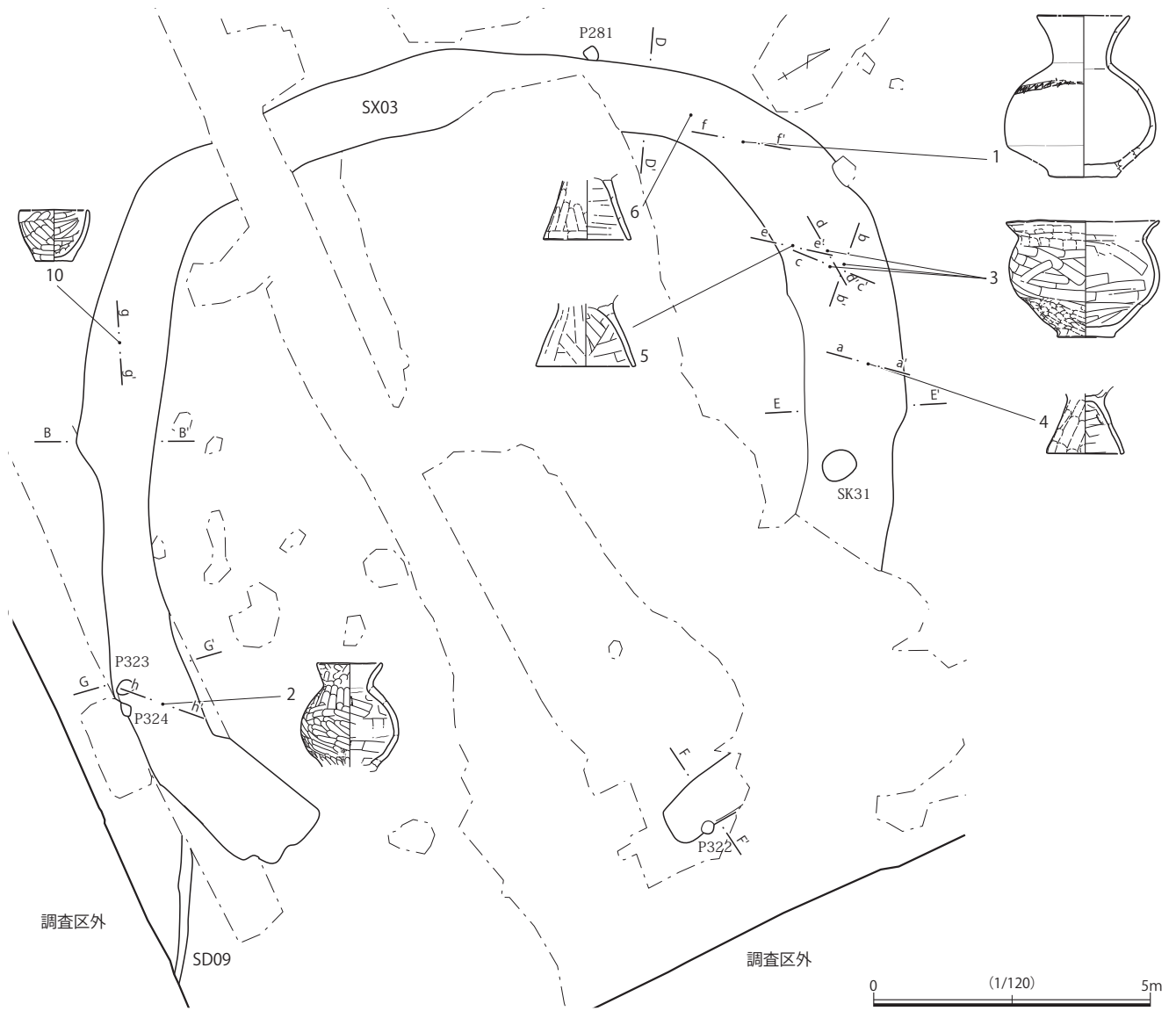
1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、酸化粒子中量含む。
2. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、酸化粒子少量含む。
3. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子多量、シルトブロック、酸化ブロック少量含む。
4. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子ブロック少量含む。
5. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック主体層、酸化ブロック多量含む。
6. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック主体層、黒褐色シルトブロック少量含む。

SD09

土層説明 (H H'・I I')

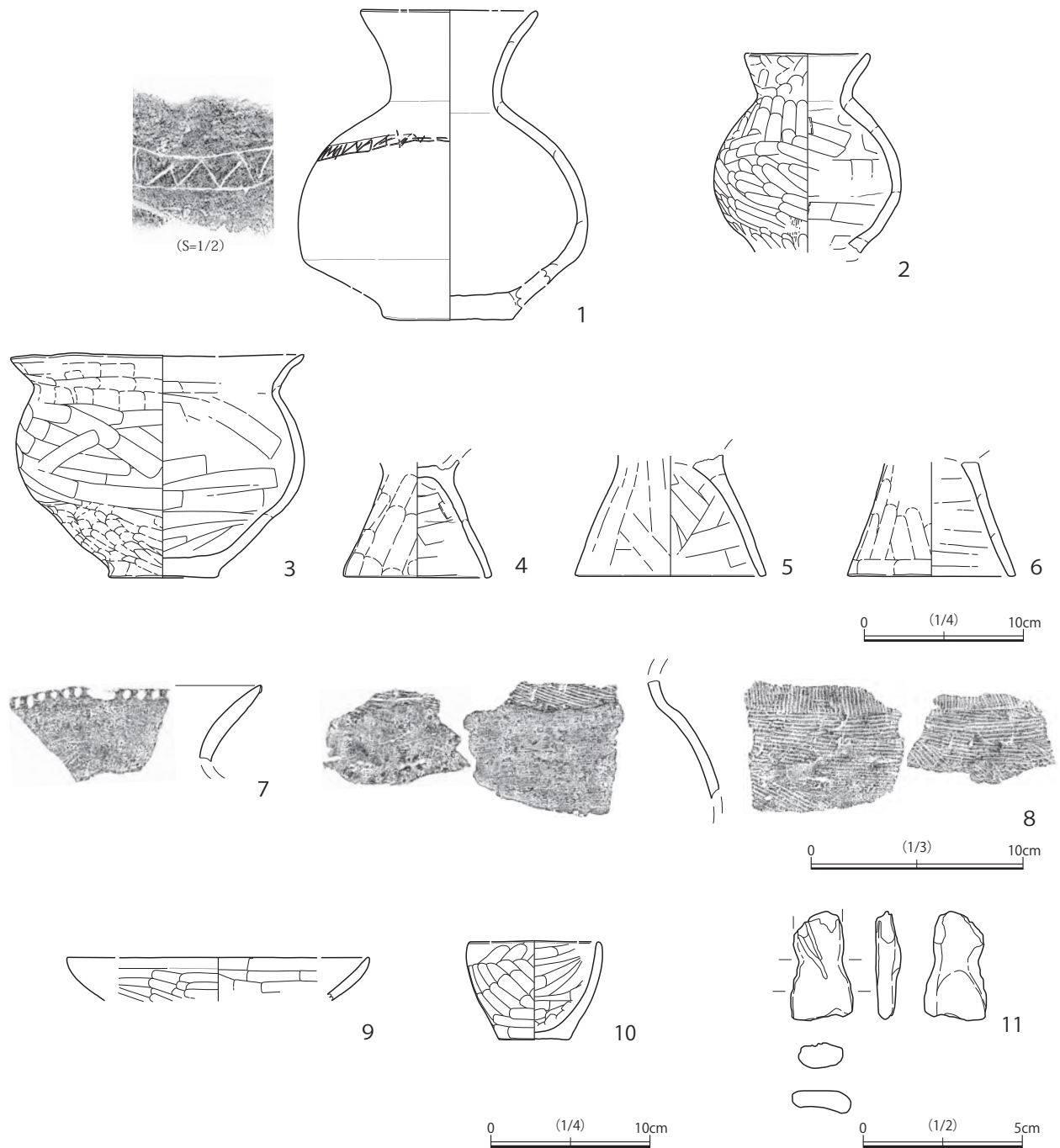
1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量含む。

第 12 図 第 3 号周溝状遺構・第 9 号溝跡実測図 (S = 1/120・1/60・1/50)



第 13 図 第 3 号周溝状遺構遺物分布・微細図 (S = 1/120 · 1/60 · 1/30)

0.47～0.58 m前後で、底面は西コーナーから南東に向かって緩やかに下り、先端部は0.13 mほど高くなる。北西溝は上端幅1.39 m前後、下端幅1.07 m前後、確認面からの深さ0.18～0.37 mで、底面は北コーナーから南西に向かって緩やかに下る。北東溝は上端幅0.94～1.73 m、下端幅0.77～1.41 m、確認面からの深さ0.26 m前後で、底面は北コーナーから南東に向かって緩やかに下る。覆土：全部で6層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積によるものと考えられる。上層は黒褐色シルト主体、最下層は褐灰色シルト主体である。周溝の先端部からは周溝底面より0.10 m程上から焼土がまとまって検出されている。土坑：北西溝ほぼ中央で0.20 m、北コーナーで0.19 m、北東溝北側で0.17 m周溝底面より低い部分があるが、断面や掘り方の状況から土坑として構築されたものとは考えにくい。



第14図 第3号周溝状遺構出土遺物実測図 (S = 1/4 · 1/3 · 1/2)

遺物（第 14 図 第 4 表 図版 9）

出土状況：本遺構からは全部で 53 点の遺物が出土した。壺形土器 16 点、（台付）甕形土器 18 点、高坏形土器 4 点、小形土器 1 点、器種不明の土器細片 13 点、不明土製品 1 点である。このうち 11 点を図示した。遺物の平面分布としては北コーナーにやや纏まりがあり、垂直分布としては中層にやや集中する傾向が見られる。1・3～6 は北コーナー付近、2 は南西溝先端付近、10 は西コーナー付近の中層から出土している。ほかにフジツボが 1 点出土しているが、流れ込みによるものであろう。

土器：1・2 は壺形土器である。1 は肩部に沈線による横位区画文が施され、区画内は鋸歯文が施される。2 は器面がヘラナデ調整されている。3～8 は（台付）甕形土器である。器面の外面は、3～7 がヘラナデ調整、8 がハケメ調整である。9 は高坏形土器の坏部である。10 は小形土器である。

土製品：11 は不明土製品である。両端が指頭押圧により凹まされる。

時期

出土遺物から、弥生時代終末から古墳時代初頭。

第 4 表 第 3 号周溝状遺構出土遺物観察表

法量の（）は推定、[] は現存、— は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
14-1 9-5	SX03	弥生土器 壺形	(10.9) (19.5) 8.0	口縁部は外傾し、頸部は緩やかに屈曲する。胴部は下位に最大径と僅かな稜をもつ。底部は平底。摩耗が著しく調整は不明瞭。外面肩部に幅狭の沈線による横位区画内に鋸歯文。	赤色粒・褐色粒・ 砂粒少量 密	良	外—にぶい黄褐色 (10YR7/3)、 橙色 (2.5YR6/6) 内—にぶい黄褐色 (10YR7/3)	最大径 18.3cm。 70% 残存。
14-2 9-6	SX03	弥生土器 壺形	7.6 [12.5] —	小形の壺。口縁部はやや外反し、頸部は緩やかに屈曲する。胴部は中位に最大径をもち球状を呈する。外面斜位・縦位ハケメ後、斜位・横位・縦位の丁寧なヘラナデ。外面赤彩の痕跡あり。内面横位ヘラナデ。	砂粒中量、褐色粒 少量 密	良	外—橙色 (5YR6/6・7.5YR6/6)、 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 内—にぶい黄褐色 (10YR6/3)、 灰黄褐色 (10YR5/2)	最大径 11.8cm。 75% 残存。
14-3 9-7	SX03	弥生土器 甕形	18.4 14.0 6.8	口縁部は外傾し、頸部は緩やかに屈曲する。胴部は中位に最大径をもち底部は平底。外面口縁部横位ヘラナデ、胴下部斜位・横位の細かいヘラナデ後、胴上部～胴中央部斜位・横位ヘラナデ。内面横位ヘラナデ。胴部～底部にかけて黒斑あり。	褐色粒・白色粒中 量、砂粒少量 密	良好	外—にぶい黄褐色 (10YR7/4・ 6/3) 内—にぶい黄褐色 (10YR6/3)	95% 残存。
14-4 9-8	SX03	弥生土器 台付甕形	— [7.2] 8.9	直線的に「ハ」の字状に開く台部。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面縦位ハケメ後斜位ヘラナデ。内面横位ヘラナデ。	赤色粒少量、砂粒 中量、石英微量 密	良	外—にぶい黄褐色 (10YR7/3)、 浅黄色 (2.5Y7/4) 内—灰黄色 (2.5Y6/2)、灰色 (5Y6/1)	台部 90% 残存。
14-5 9-9	SX03	弥生土器 台付甕形	— [7.6] (11.7)	ほぼ直線的に「ハ」の字状に開く台部。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面縦位ヘラナデ。内面斜位・横位ヘラナデ。	砂粒多量、褐色粒 少量 やや粗	良	内外—明赤褐色 (5Y5/6)	台部 30% 残存。
14-6 9-10	SX03	弥生土器 台付甕形	— [7.2] (10.5)	直線的に「ハ」の字状に開く台部。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面斜位・縦位ヘラナデ後、横位ヘラナデ。内面横位ヘラナデ。	白色粒・砂粒微量 密	良好	外—灰黄褐色 (10YR4/2) 内—にぶい黄褐色 (10YR4/3)	台部 40% 残存。
14-7 9-11	SX03	弥生土器 甕形	— [3.6] —	外反して開く口縁部。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、外面斜位・横位ヘラナデ後、口唇部に棒状の可能性のある工具によるキザミ。内面横位ヘラナデ。	赤色粒・白色粒・ 砂粒微量 密	良好	外—暗褐色 (10YR3/3) 内—灰黄褐色 (10YR6/2)、暗褐 色 (10YR3/3)	口縁部破片資 料。
14-8 9-12	SX03	弥生土器 甕形	— [5.3] —	頸部は緩く屈曲し、胴部に向かって緩やかに広がる。外面頸部縦位ハケメ後、胴上部横位ハケメ、胴中央部斜位ハケメ。内面頸部斜位ハケメ後、胴部横位ヘラナデ。	褐色粒・砂粒少量 密	良好	外—灰黄褐色 (10YR4/2) 内—灰黄褐色 (10YR5/2)	頸部～胴部破片 資料。
14-9 9-13	SX03	弥生土器 高坏形	(19.0) [2.7] —	やや内湾して開く口縁部。外面斜位・横位の丁寧なヘラナデ後、口縁部横位ヘラナデ。内面横位ヘラナデ。	白色粒・砂粒中 量、赤色粒微量 密	良	外—橙色 (5YR6/6) 内—にぶい黄褐色 (10YR7/4)	口縁部 15% 残存。
14-10 9-14	SX03	弥生土器 小形土器	(8.0) 6.3 4.4	平底の底部から口縁部に向かって内湾しながら外傾して立ち上がる。外面斜位・横位の丁寧なヘラナデ。内面ヘラナデ。	白色粒・赤色粒少 量、砂粒中量 密	良好	内外—にぶい褐色 (7.5YR5/4)	70% 残存。

法量の（）は推定、[] は現存、— は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	胎土	焼成	色調	備考
14-11 9-15	SX03	土製品 器種不明	[3.4]	[1.95]	0.8	3.6	褐色粒中量、砂粒 少量 密	良	表—にぶい黄褐色 (10YR6/3)、 黒褐色 (10YR3/1) 裏—にぶい黄褐色 (10YR7/3)、 褐灰色 (10YR4/1)	上部欠損。中央部がくびれる。表面 2 条の斜位沈線。裏面下部指頭により平たく押圧される。

第2節 溝跡

第9号溝跡（第12図 図版3）

遺構

位置：M-16 グリッド。主軸方位：N-57°-W。規模・形状：調査区内ではほぼ直線状に検出され、南東側は調査区外に続いている。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。調査区内で確認された長さは2.59 m、上端幅0.13～0.21 m、下端幅0.10 m前後、確認面からの深さは0.07 m前後で、調査区内で底面はほぼ水平である。覆土：黒褐色シルトの単一層で、含有物の状況から自然堆積と考えられる。備考：荒川流域の微高地で検出される周溝状遺構には、本溝跡のような小規模な溝跡が周溝間を連結するように検出される例がある（嶋村1999）。本溝跡は攪乱により壊されているため、直接第3号周溝状遺構に連結していないが、他遺跡で確認される連結溝に規模が類似していることから、第3号周溝状遺構に伴う連結溝と判断した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

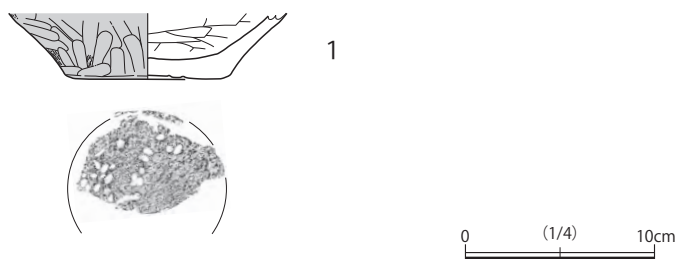
第3号周溝状遺構に伴うものと考えられるため、弥生時代終末から古墳時代初頭。

第3節 遺構外出土遺物

遺物（第15図 第5表 図版10）

出土状況：表土や攪乱及びその他の時期の遺構からは全部で41点の遺物が出土した。壺形土器30点、（台付）甕形土器8点、高環形土器1点、焼成粘土塊2点である。このうち1点を図示した。

土器：1は壺形土器で外面が赤彩され、外面底面に靱殻らしき圧痕が残る。



第15図 遺構外出土遺物実測図（S = 1/4）

第5表 遺構外出土遺物観察表

法量の（）は推定、[]は現存、—は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
15-1 10-1	遺構外	弥生土器 壺形	— [3.5] (8.0)	平底の底部から胴部に向かって胴下部が外傾しながら立ち上がる。外面縦位ハケメ後、斜位・横位の丁寧なヘラナデ。外面赤彩。底面靱殻圧痕か。内面横位ヘラナデ。	砂粒中量、赤色粒・白色粒少量密	良好	外—黒褐色 (7.5YR3/1) 内—褐色 (7.5YR4/4)	胴下部～底部40%残存。

第4章 平安時代～中世の遺構と遺物

第1節 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

遺構（第16図 図版4）

位置：K～M-4～6グリッド。平面形式：桁行1間×梁行2間の側柱建物で、中心に束柱があり、北西側に庇が付く構造と考えられる。規模：桁行総長3.60m、庇まで含めると5.55m、梁行総長3.00m、面積10.8㎡である。柱間はP145-9・4-3間が3.60m、P145-11・11-4・9-8・8-3間が1.50m、P11-7・7-8間が1.80m、P6-145・5-4間が1.95m、P6-5間が3.00mである。主軸方位：N-65°-W。柱穴：9基の柱穴を確認した。いずれも長・短軸長が0.30m前後の円形または方形を呈する。確認面からの深さは0.12m～0.56mで、底面の標高は1.59～2.05mと幅があり一定ではないが、深さ0.20m前後、標高1.90m前後のものが多い。覆土は黒色や黒褐色シルト主体の単一層のものが多い。柱痕跡：P11の下層で確認した。備考：本遺構は、整理作業の段階で掘立柱建物跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1～3号溝跡との関連性が考えられるため、13世紀前後と推測される。

第2号掘立柱建物跡

遺構（第17図 図版4）

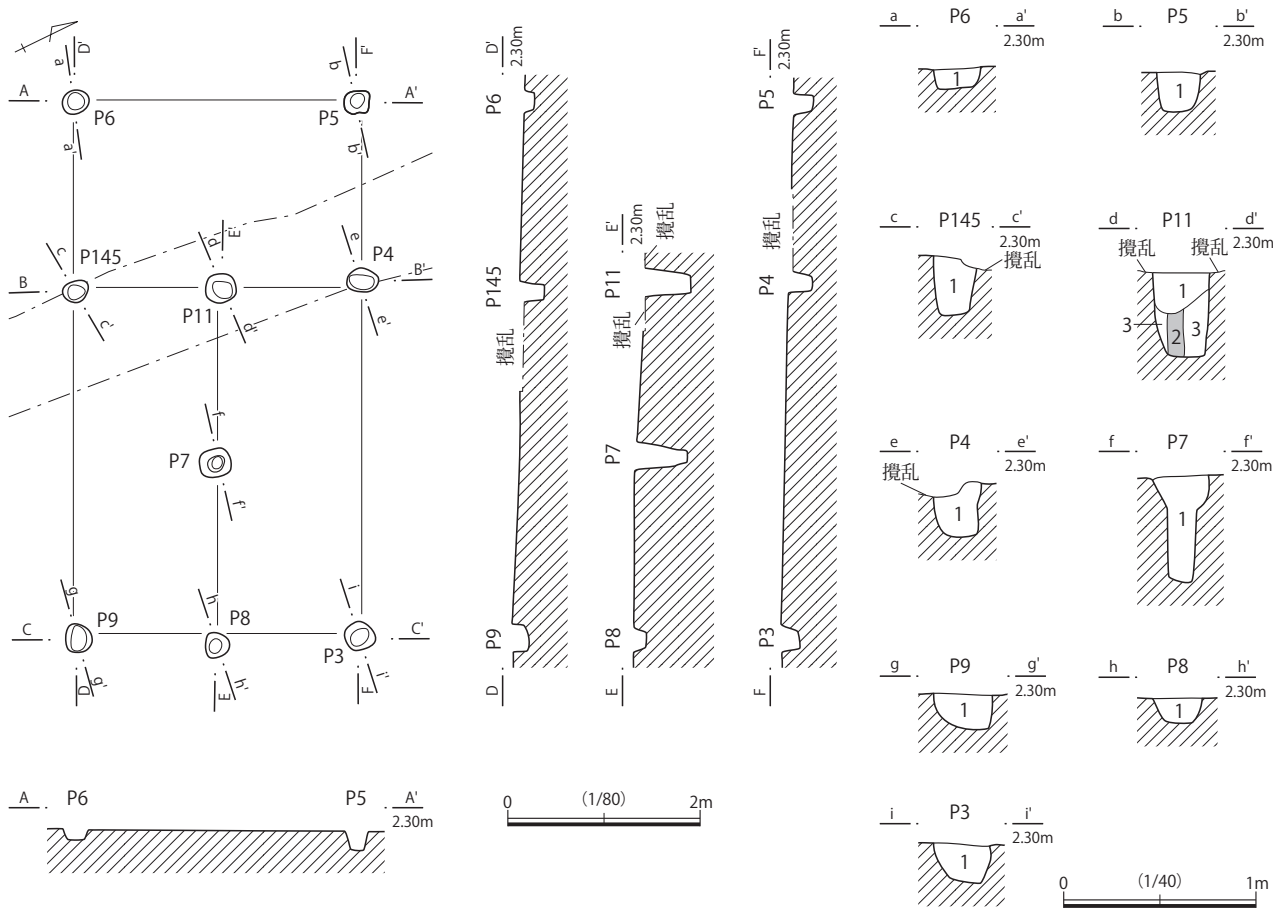
位置：K～M-6～8グリッド。重複関係：第13号土坑と切り合うが、新旧関係は明らかにできなかった。平面形式：桁行3間×梁行1間の側柱建物。規模：桁行総長4.80m、梁行総長3.00m、面積14.40㎡。柱間はP31-32・43-33・28-20・22-12間が1.65m、P32-43・20-22間が1.50m、P31-28・33-12間が3.00mである。主軸方位：N-71°-W。柱穴：8基の柱穴を確認した。いずれも長・短軸長0.30m前後で方形を呈するものが多い。確認面からの深さは0.20m前後、底面標高は2.00m前後である。覆土は黒褐色シルト主体の単一層である。備考：本遺構は、整理作業の段階で掘立柱建物跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1～3号溝跡との関連性が考えられるため、13世紀前後と推測される。



ピット計測表

[] は現存値、単位はm。

遺構名	ピット番号	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
SBO1	P6	0.28	0.24	0.12	1.95
	P5	0.26	0.24	0.21	1.85
	P145	[0.28]	[0.22]	0.28	1.84
	P11	[0.32]	[0.31]	0.51	1.59
	P4	[0.32]	[0.24]	0.28	1.83
	P7	0.32	0.29	0.56	1.61
	P9	0.29	0.28	0.18	2.01
	P8	0.26	0.25	0.14	2.05
	P3	0.31	0.29	0.21	1.98

SBO1

土層説明 (a a')

1. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子中量、酸化粒子少量含む。

土層説明 (b b')

1. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性あり、縮まりやや弱。明黄褐色シルト粒子多量、明黄褐色シルトブロック中量含む。

土層説明 (c c')

1. 黒褐色シルト (10YR3/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子多量、明黄褐色シルトブロック微量含む。

土層説明 (d d')

1. 黒褐色シルト (10YR3/1)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子、ブロック中量含む。
 2. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック微量含む。
 3. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト多量含む。

土層説明 (e e')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子中量、明黄褐色シルトブロック少量含む。

土層説明 (f f')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子中量、明黄褐色シルトブロック少量含む。

土層説明 (g g')

1. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色粒子中量、明黄褐色シルトブロック少量含む。

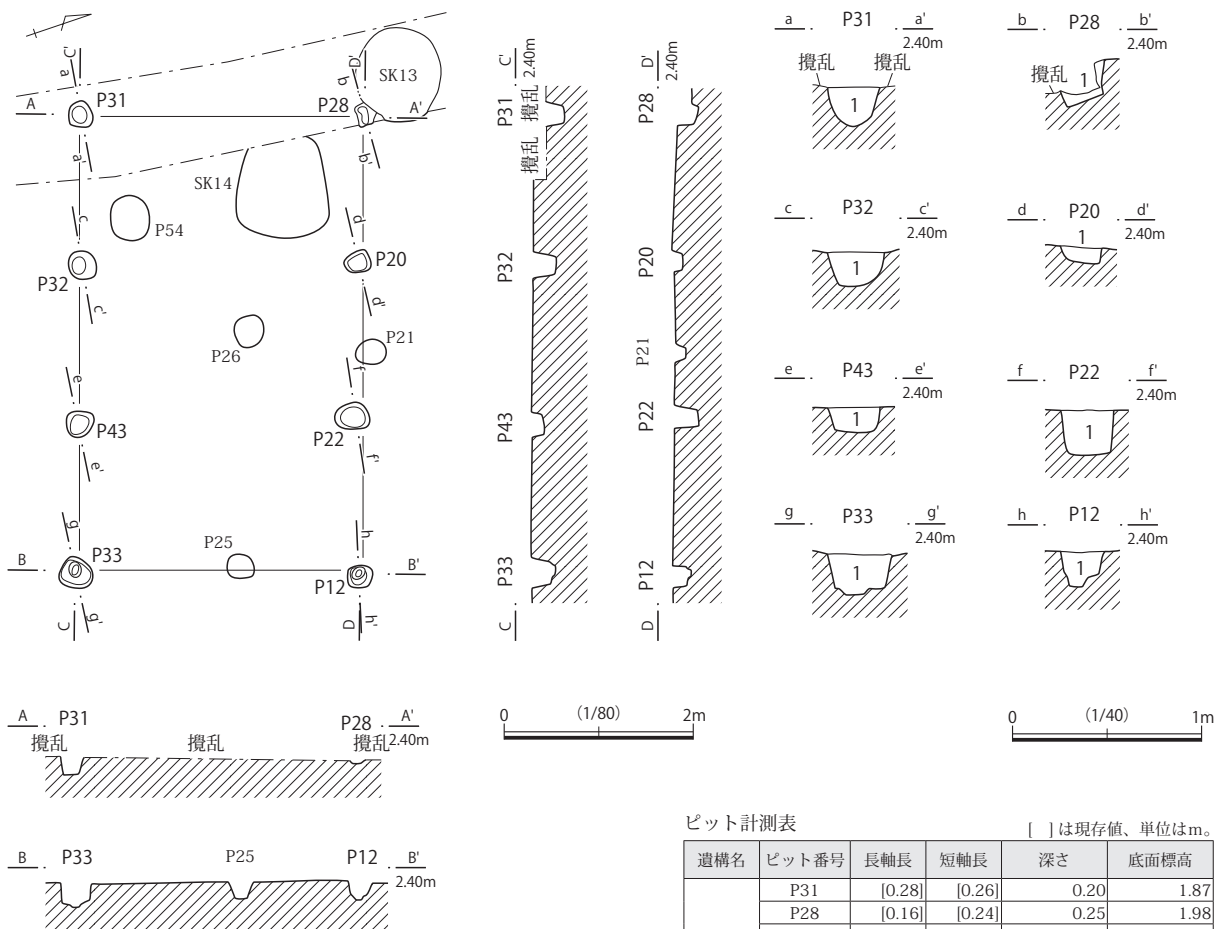
土層説明 (h h')

1. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子多量、明黄褐色シルトブロック少量含む。

土層説明 (i i')

1. 黒褐色シルト (10YR3/1)。粘性あり、縮まりやや強。明黄褐色シルト粒子中量含む。

第 16 図 第 1 号掘立柱建物跡実測図 (S = 1/80・1/40)



ピット計測表

[]は現存値、単位はm。

遺構名	ピット番号	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
SB02	P31	[0.28]	[0.26]	0.20	1.87
	P28	[0.16]	[0.24]	0.25	1.98
	P32	0.29	0.29	0.25	1.97
	P20	0.27	0.23	0.13	2.15
	P43	0.29	0.27	0.14	2.10
	P22	0.37	0.28	0.27	1.98
	P33	0.34	0.32	0.27	1.97
	P12	0.27	0.23	0.20	2.06

SB02

土層説明 (a a')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。

土層説明 (b b')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック少量含む。

土層説明 (c c')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。

土層説明 (d d')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック少量含む。

土層説明 (e e')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。

土層説明 (f f')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子中量、酸化粒子少量含む。

土層説明 (g g')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。

土層説明 (h h')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性あり、締まりやや強。明黄褐色粒子少量、明黄褐色シルトブロック微量含む。

第 17 図 第 2 号掘立柱建物跡実測図 (S = 1/80・1/40)

第3号掘立柱建物跡

遺構 (第18図 図版4)

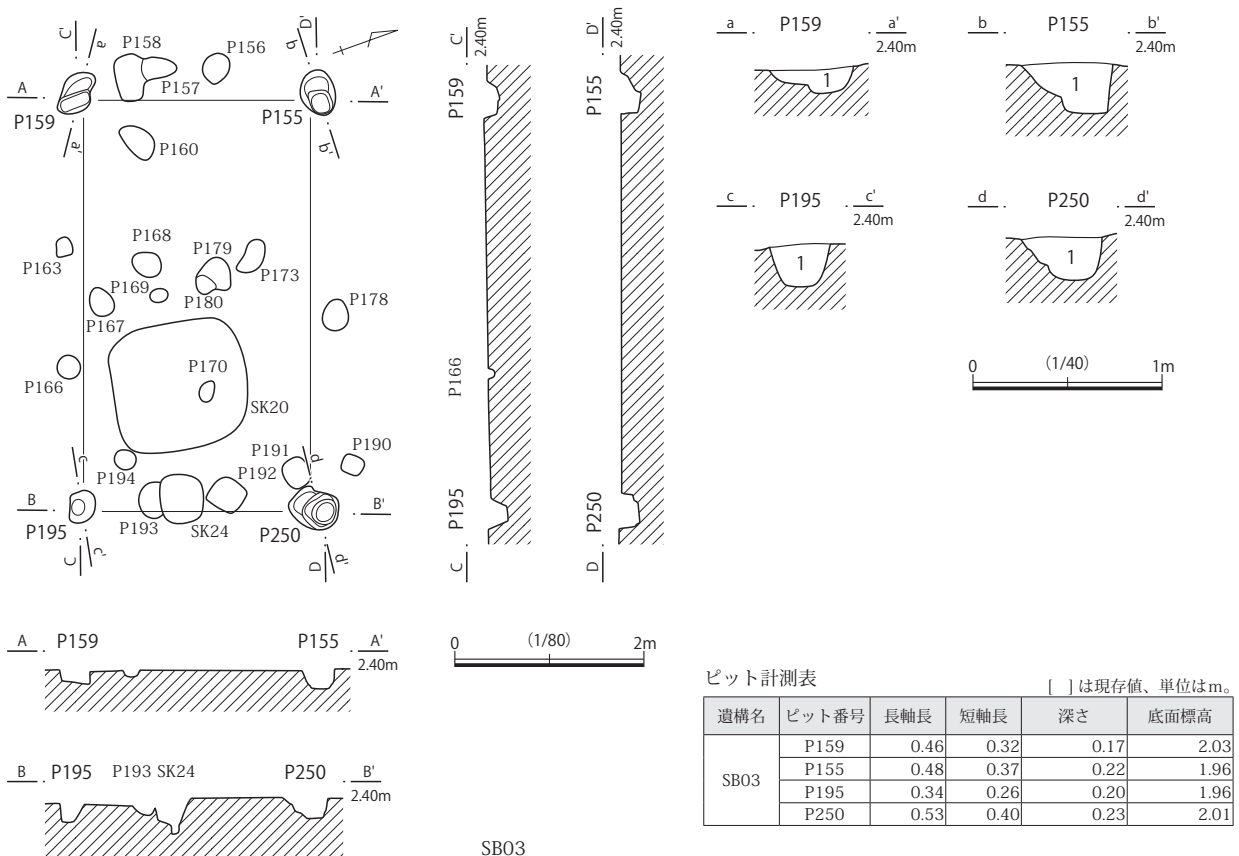
位置：K・L-9・10グリッド。平面形式：桁行1間×梁行1間の側柱建物。規模：桁行総長4.35m、梁行総長2.40m、面積10.44㎡。柱間は桁行・梁行総長と同じである。主軸方位：N-69°-W。柱穴：4基の柱穴を確認した。長軸長0.50m前後、短軸長0.35m前後の長方形を呈するものが多い。P195のみ0.30m前後と規模が小さい。確認面からの深さは0.20m前後、底面標高は2.00m前後である。覆土は黒褐色シルト主体の単一層である。備考：本遺構は、整理作業の段階で掘立柱建物跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1～3号溝跡との関連性が考えられるため、13世紀前後と推測される。



SB03

土層説明 (a a')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック中量含む。

土層説明 (b b')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック中量含む。

土層説明 (c c')

1. 黒褐色シルト (10YR3/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子微量含む。

土層説明 (d d')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子少量含む。

第18図 第3号掘立柱建物跡実測図 (S = 1/80・1/40)

第4号掘立柱建物跡

遺構 (第19図 図版4)

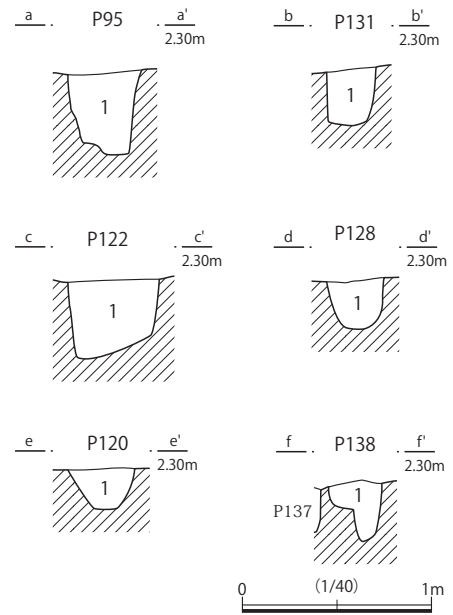
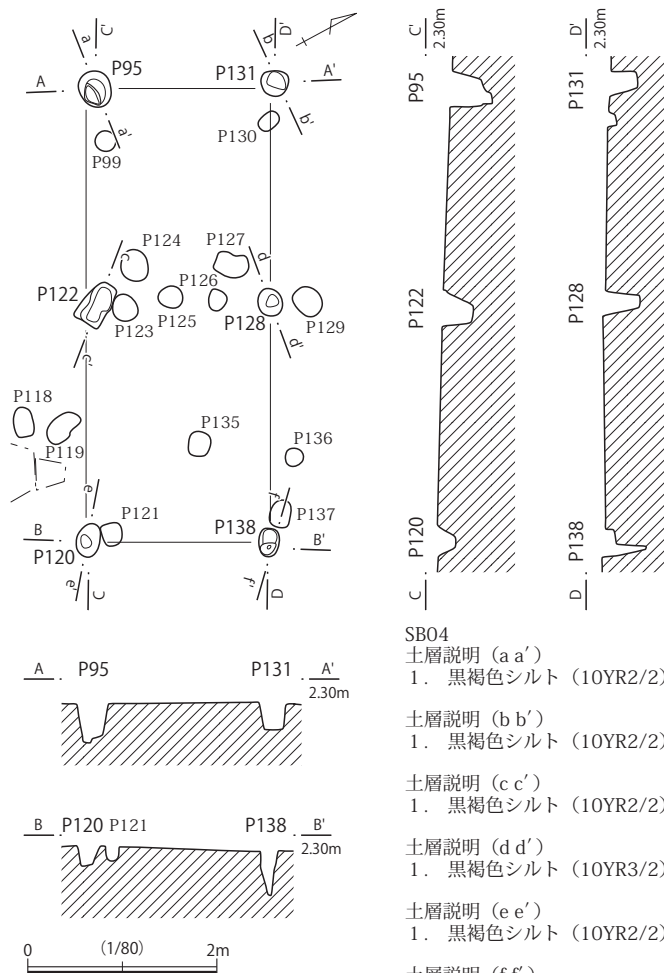
位置：H・I-9・10グリッド。平面形式：桁行2間×梁行1間の側柱建物。規模：桁行総長4.80m、梁行総長1.95m、面積9.36㎡。柱間はP95-122・131-128間が2.25m、P122-120・128-138間が2.55m、P95-131・120-138間は梁行総長と同じである。主軸方位：N-62°-W。柱穴：6基の柱穴を確認した。長・短軸長0.30m前後の円形・方形を呈するものが多いが、P122は長軸長0.47mの長方形を呈する。確認面からの深さは0.22～0.48m、底面標高は1.58～1.95mと幅があり一定ではないが、深さ0.40m前後、標高1.70m前後のものが多い。覆土は黒褐色シルト主体の単一層のものが多い。備考：本遺構は、整理作業の段階で掘立柱建物跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1～3号溝跡との関連性が考えられるため、13世紀前後と推測される。



ピット計測表

[]は現存値、単位はm。

遺構名	ピット番号	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
SB04	P95	0.39	0.33	0.46	1.58
	P131	0.29	0.27	0.29	1.73
	P122	0.47	0.29	0.35	1.79
	P128	0.27	0.28	0.40	1.71
	P120	0.35	0.25	0.22	1.95
	P138	0.30	0.22	0.48	1.65

SB04

土層説明 (a a')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック多量含む。

土層説明 (b b')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック少量含む。

土層説明 (c c')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック少量含む。

土層説明 (d d')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック中量含む。

土層説明 (e e')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子中量含む。

土層説明 (f f')

1. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量、酸化粒子微量含む。

第19図 第4号掘立柱建物跡実測図 (1/80・1/40)

第5号掘立柱建物跡

遺構 (第20図 図版4)

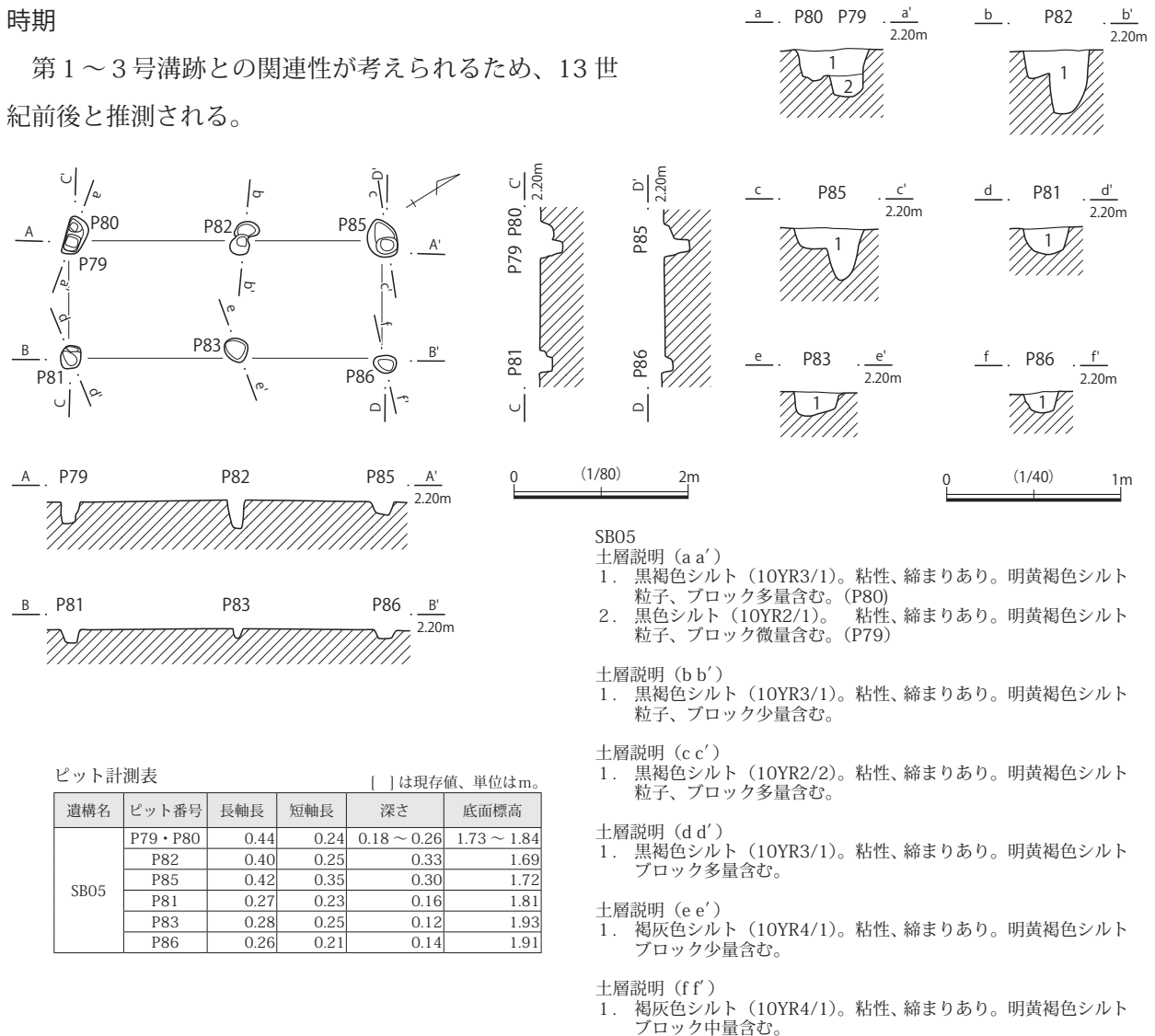
位置：F・G-9・10グリッド。平面形式：桁行2間×梁行1間の側柱建物。規模：桁行総長3.60m、梁行総長1.35m、面積4.86㎡。柱間はP79・80-82・81-83間が1.95m、P82-85・83-86間が1.65m、P79・80-81・85-86間が梁行総長と同じである。主軸方位：N-58°-W。柱穴：6基の柱穴を確認した。P79・80・82・85は長軸長0.40m前後、短軸長0.30m前後の長方形を呈し、西側にテラスが設けられている。すべて同様の構造のため、添え柱のような補強材が設けられていた可能性がある。P81・83・86は長・短軸長0.25m前後の方形を呈する。確認面からの深さは0.12~0.33m、底面標高は1.69~1.93mと幅があり一定ではない。覆土は黒褐色シルト主体の単一層のものが多く、備考：本遺構は、整理作業の段階で掘立柱建物跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1~3号溝跡との関連性が考えられるため、13世紀前後と推測される。



ピット計測表

[]は現存値、単位はm。

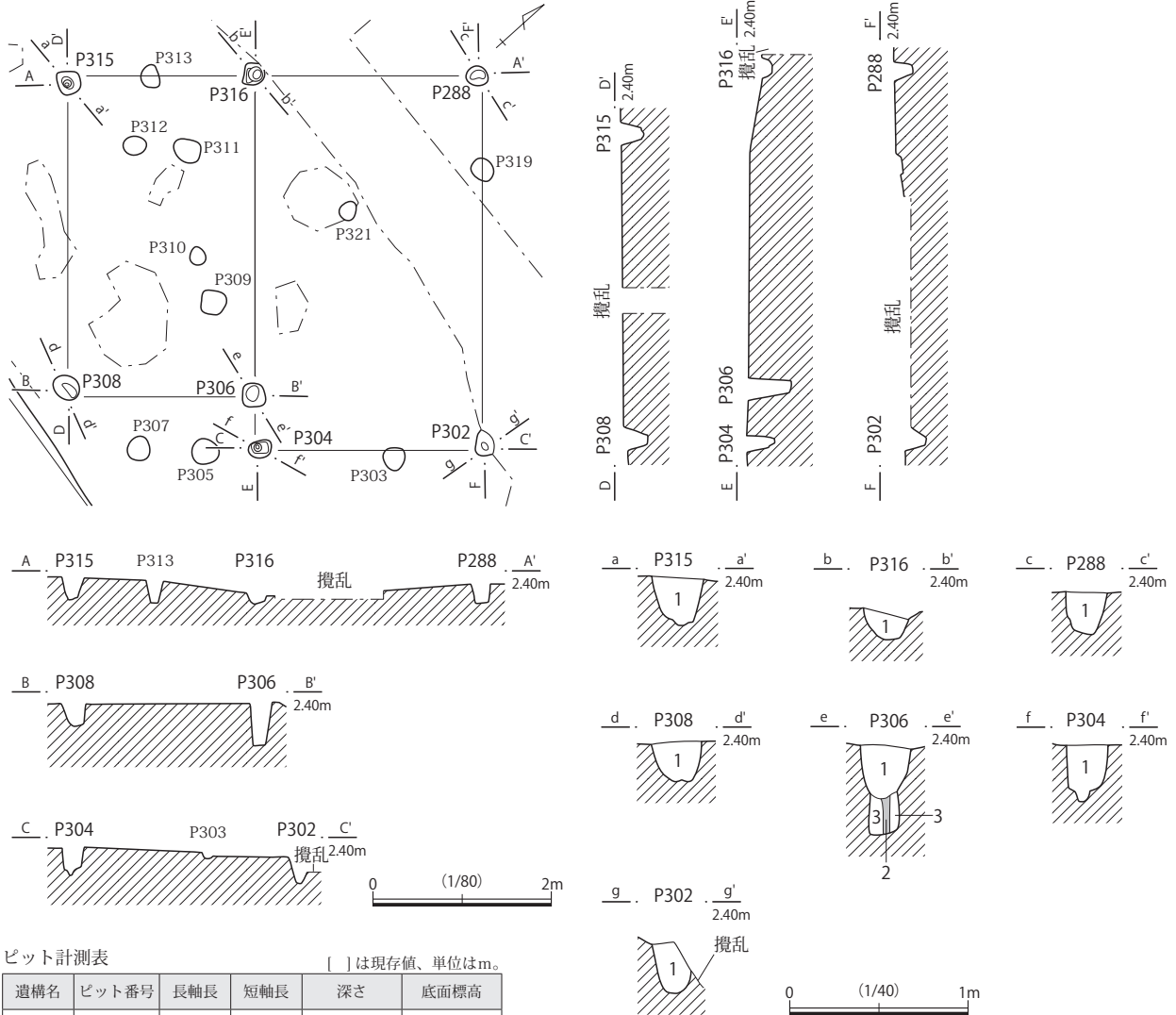
遺構名	ピット番号	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
SB05	P79・P80	0.44	0.24	0.18~0.26	1.73~1.84
	P82	0.40	0.25	0.33	1.69
	P85	0.42	0.35	0.30	1.72
	P81	0.27	0.23	0.16	1.81
	P83	0.28	0.25	0.12	1.93
	P86	0.26	0.21	0.14	1.91

第20図 第5号掘立柱建物跡実測図 (S = 1/80・1/40)

第6号掘立柱建物跡

遺構 (第21図 図版4)

位置：K～M-14・15グリッド。平面形式：規模の異なる桁行1間×梁行1間の側柱建物が2棟連結したような構造と推測される。規模：桁行総長は南西辺が3.60m、北東辺が4.20m、梁行総長4.65



ピット計測表

[]は現存値、単位はm。

遺構名	ピット番号	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
SB06	P315	0.27	0.25	0.27	2.08
	P316	0.25	0.22	0.17	2.00
	P288	0.24	0.23	0.22	2.03
	P308	0.31	0.26	0.29	2.02
	P306	0.26	0.26	0.51	1.79
	P304	0.26	0.19	0.32	1.97
	P302	0.30	[0.22]	0.30	1.88

SB06

土層説明 (a a')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子中量、明黄褐色シルトブロック少量、酸化粒子微量含む。

土層説明 (b b')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子ブロック中量含む。

土層説明 (c c')

1. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量含む。

土層説明 (d d')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子ブロック中量含む。

土層説明 (e e')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック多量含む。
2. 黒色シルト (10YR1.7/1)。粘性あり、締まりやや弱。炭化材主体層。柱痕か？
3. 褐灰色シルト (10YR5/1)。粘性あり、締まりやや強。明黄褐色シルトブロック、酸化ブロック多量含む。

土層説明 (f f')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量、明黄褐色シルトブロック微量含む。

土層説明 (g g')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量、明黄褐色シルトブロック微量含む。

第21図 第6号掘立柱建物跡実測図 (S = 1/80・1/40)

m、面積 18.27㎡。柱間は P 315 - 308・316 - 306 間が桁行南西辺と同じ、P 316 - 304・288 - 302 間が桁行北東辺と同じ、P 315 - 316・308 - 306 間は 2.10 m、P 316 - 288・304 - 302 間は 2.55 m である。主軸方位：N - 48° - W。柱穴：7 基の柱穴を確認した。長・短軸長 0.25 m 前後の方形を呈するものが多い。確認面からの深さは 0.17 ~ 0.51 m、底面標高は 1.79 ~ 2.08 m と幅があり一定ではないが、深さ 0.30 m、標高 2.00 m 前後のものが多い。覆土は黒褐色シルト主体の単一層のものが多い。柱痕跡：P 306 の下層で確認した。備考：本遺構は、整理作業の段階で掘立柱建物跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第 1 ~ 3 号溝跡との関連性が考えられるため、13 世紀前後と推測される。

第 2 節 柵列跡

第 1 号柵列跡

遺構（第 22 図 図版 4）

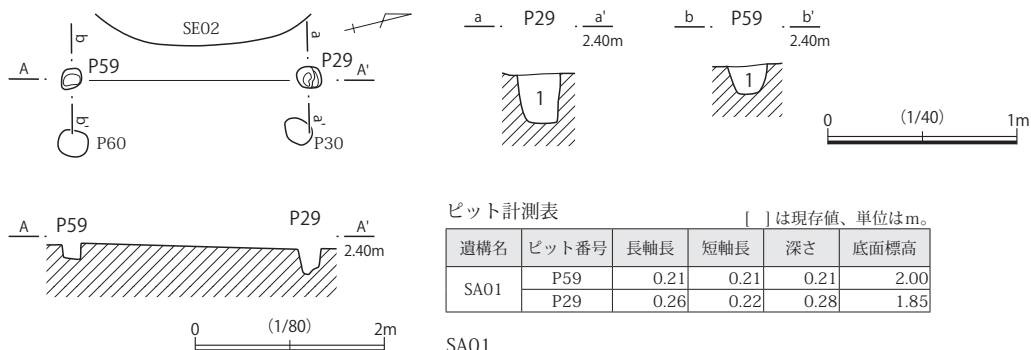
位置：K - 7・8 グリッド。規模：総長 2.55 m で 1 間分を確認した。主軸方位：N - 14° - E。柱穴：2 基の柱穴を確認した。長・短軸長 0.20 m 前後の方形を呈する。確認面からの深さは 0.25 m 前後で、底面標高は 1.85 m、2.00 m である。覆土は黒色・黒褐色シルト主体の単一層である。備考：本遺構は、整理作業の段階で柵列跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第 1 ~ 3 号溝跡との関連性が考えられるため、13 世紀前後と推測される。



SA01

土層説明 (a a')

1. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック少量含む。

土層説明 (b b')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。

第 22 図 第 1 号柵列跡実測図 (S = 1/80・1/40)

第2号柵列跡

遺構 (第23図 図版4)

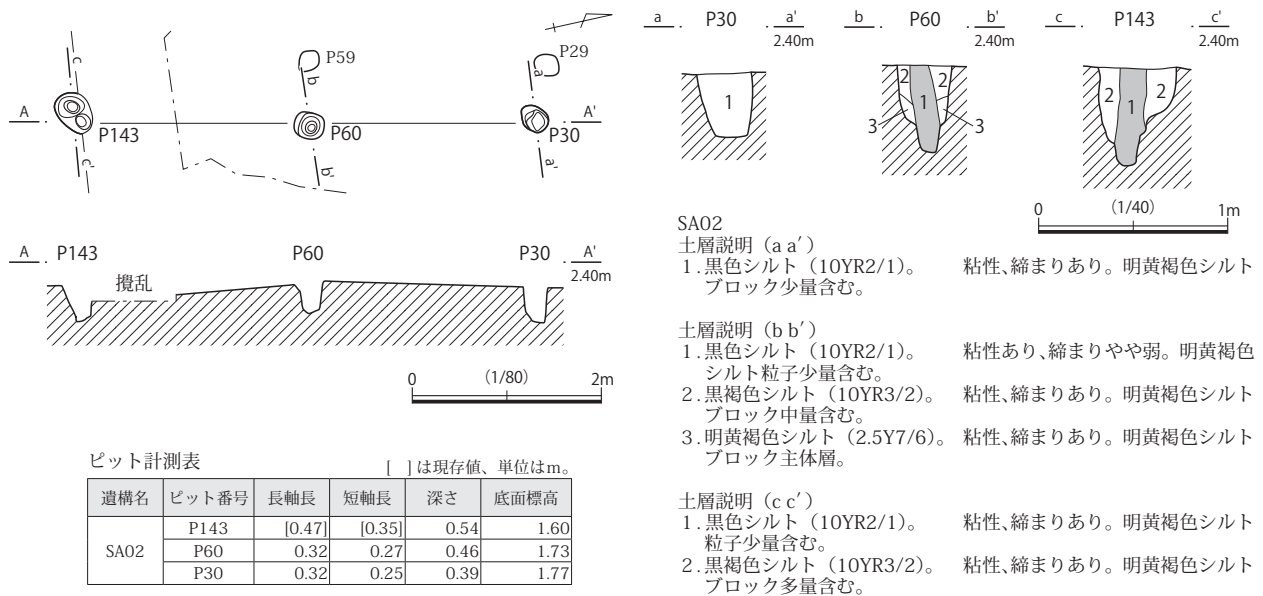
位置：K-7~9グリッド。規模：総長4.80mで、2間分を確認し、柱間は2.40m等間である。主軸方位：N-14°-E。柱穴：3基の柱穴を確認した。長・短軸長0.30m前後の方形を呈するものが多いが、P143は長軸長0.47m以上あり、他の2基の柱穴より規模は大きい。確認面からの深さは0.39~0.54m、底面標高は1.60~1.77mと幅があり一定ではない。覆土は黒色・黒褐色シルト主体である。柱痕跡：P60・143の2基で確認した。備考：本遺構は、整理作業の段階で柵列跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1~3号溝跡との関連性が考えられるため、13世紀前後と推測される。



第23図 第2号柵列跡実測図 (S = 1/80・1/40)

第3号柵列跡

遺構 (第24図 図版4)

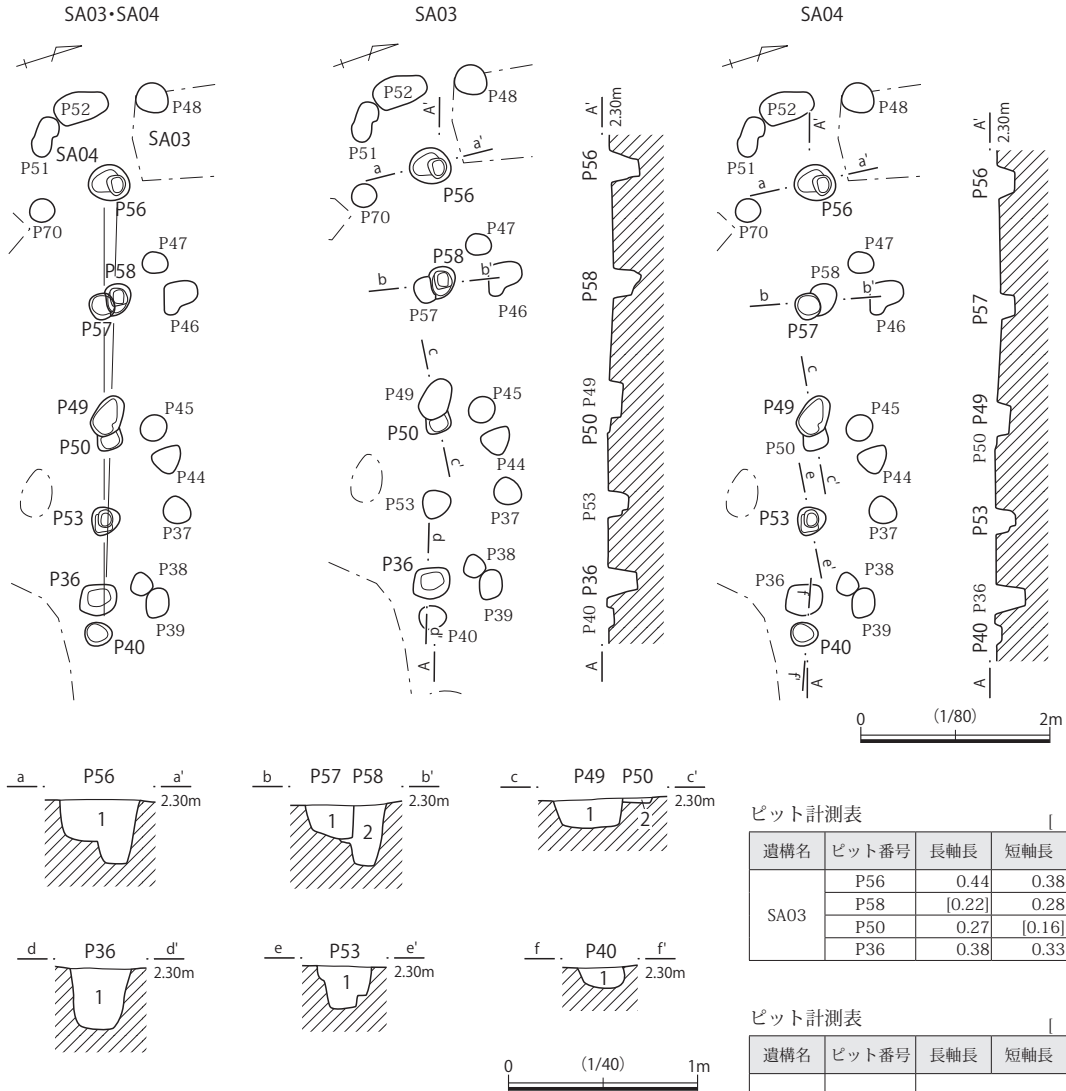
位置：L・M-8グリッド。重複関係：第4号柵列跡に切られる。規模：総長4.35mで、3間分を確認した。柱間はP56-58間が1.20m、P58-50間が1.50m、P50-36間が1.65mである。主軸方位：N-71°-W。柱穴：4基の柱穴を確認した。P56は第4号柵列跡の柱穴だが、掘り方の形状から本柵列にも使用されていたと推測される。長・短軸長0.30m前後の円形・方形を呈する。確認面からの深さは0.07~0.35m、底面標高は1.86~2.19mと幅があり一定ではないが、P50以外は深さ0.33m前後、底面標高1.87m前後である。覆土は黒褐色シルト主体の単一層である。備考：本遺構は、整理作業の段階で柵列跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1～3号溝跡との関連性が考えられるため、13世紀前後と推測される。



ピット計測表 []は現存値、単位はm。

遺構名	ピット番号	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
SA03	P56	0.44	0.38	0.34	1.89
	P58	[0.22]	0.28	0.32	1.86
	P50	0.27	[0.16]	0.07	2.19
	P36	0.38	0.33	0.35	1.90

ピット計測表 []は現存値、単位はm。

遺構名	ピット番号	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
SA04	P56	SA03 P56 (同ピット) に記載			
	P57	0.29	0.28	0.18	2.01
	P49	0.45	0.30	0.17	2.07
	P53	0.31	0.29	0.24	2.01
	P40	0.28	0.25	0.09	2.15

SA03・SA04

土層説明 (a a')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。

土層説明 (b b')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック少量、酸化粒子微量含む。
2. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量含む。

土層説明 (c c')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。
2. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色粒子中量、明黄褐色シルトブロック少量含む。

土層説明 (d d')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック、粒子多量、酸化粒子少量含む。

土層説明 (e e')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。

第24図 第3・4号柵列跡実測図 (S = 1/80・1/40)

第4号柵列跡

遺構（第24図 図版4）

位置：L・M-8グリッド。重複関係：第3号柵列跡を切る。規模：総長4.80mで、4間分を確認した。柱間は1.20m等間である。主軸方位：N-73°-W。柱穴：5基の柱穴を確認した。長・短軸長0.30m前後の円形・方形を呈する。確認面からの深さは0.09～0.34m、底面標高は1.89～2.15mと幅があり一定ではない。覆土は黒褐色シルト主体の単一層である。備考：本遺構は、整理作業の段階で柵列跡と認定したものである。そのため、各柱穴の番号は発掘調査段階で付したピット番号をそのまま使用した。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1～3号溝跡との関連性が考えられるため、13世紀前後と推測される。

第3節 井戸跡

第1号井戸跡

遺構（第25図 図版5・6）

位置：J・K-6・7グリッド。規模・形状：上面の平面形は長軸3.93m×短軸3.30mの楕円形を呈する。確認面からの深さ0.80mほどから直径1.20mの円形になり、下部では長軸2.05m×短軸1.71mの楕円形、底面は直径1.07mの円形となる。断面形は漏斗状を呈し、確認面からの深さ0.80m位からほぼ垂直に垂下し、下部で袋状に広がる。北側の壁面は底面に向かって階段状に下る。確認面からの深さは2.79mである。覆土：全部で10層に分層でき、含有物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。上部は暗褐色・黒褐色シルト主体、下部は褐色・黒褐色シルト主体である。備考：下部が袋状に広がるが、この付近の地山は砂層のため、使用している段階で崩落し袋状を呈するようになったものと考えられる。本来は中部より下位は円筒状を呈していた可能性が高い。

遺物（第26図 第6表 図版10）

出土状況：本遺構からは全部で12点の遺物が出土した。南多摩産と考えられる須恵器壺が1点、東海産の須恵器甕が1点、南比企産と考えられる須恵器甕が1点、東播系と考えられる中世陶器鉢が1点、常滑産の中世陶器鉢が1点、甕が2点、在地産と考えられる中世陶器鉢が1点、中世カワラケが2点、東播系と考えられる中世陶器鉢を転用した土製品1点、器種不明の木製品1点である。このうち7点を図示した。他には拳大の砂岩円礫10点1,610gが出土している。平面分布としては特に纏まりをもたないが、垂直分布では1～6層で遺物が多く出土し、9・10層からの出土はほとんどない。

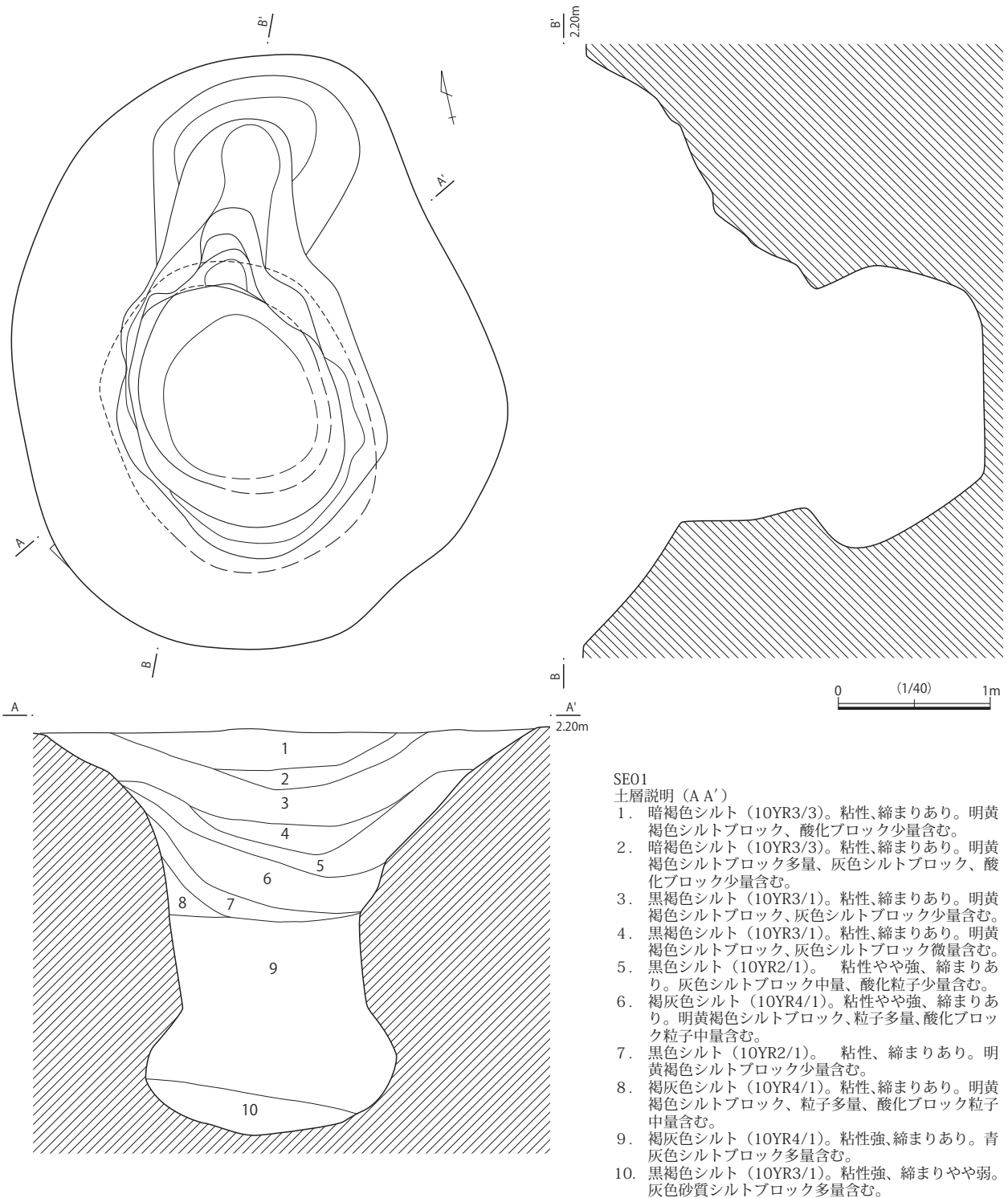
土器：1・2は9世紀代の須恵器である。1は南多摩産と考えられる壺で、底面にヘラ描きが見られる。2は東海産の甕である。3は東播系と考えられる中世陶器鉢で11世紀後半のものと考えられる。4は在地産と考えられる中世陶器鉢である。5は常滑産の中世陶器甕で、13世紀中頃のものである。

土製品：6は東播系の中世陶器鉢を転用した研具で、上面や側面に使用した痕跡が残る。

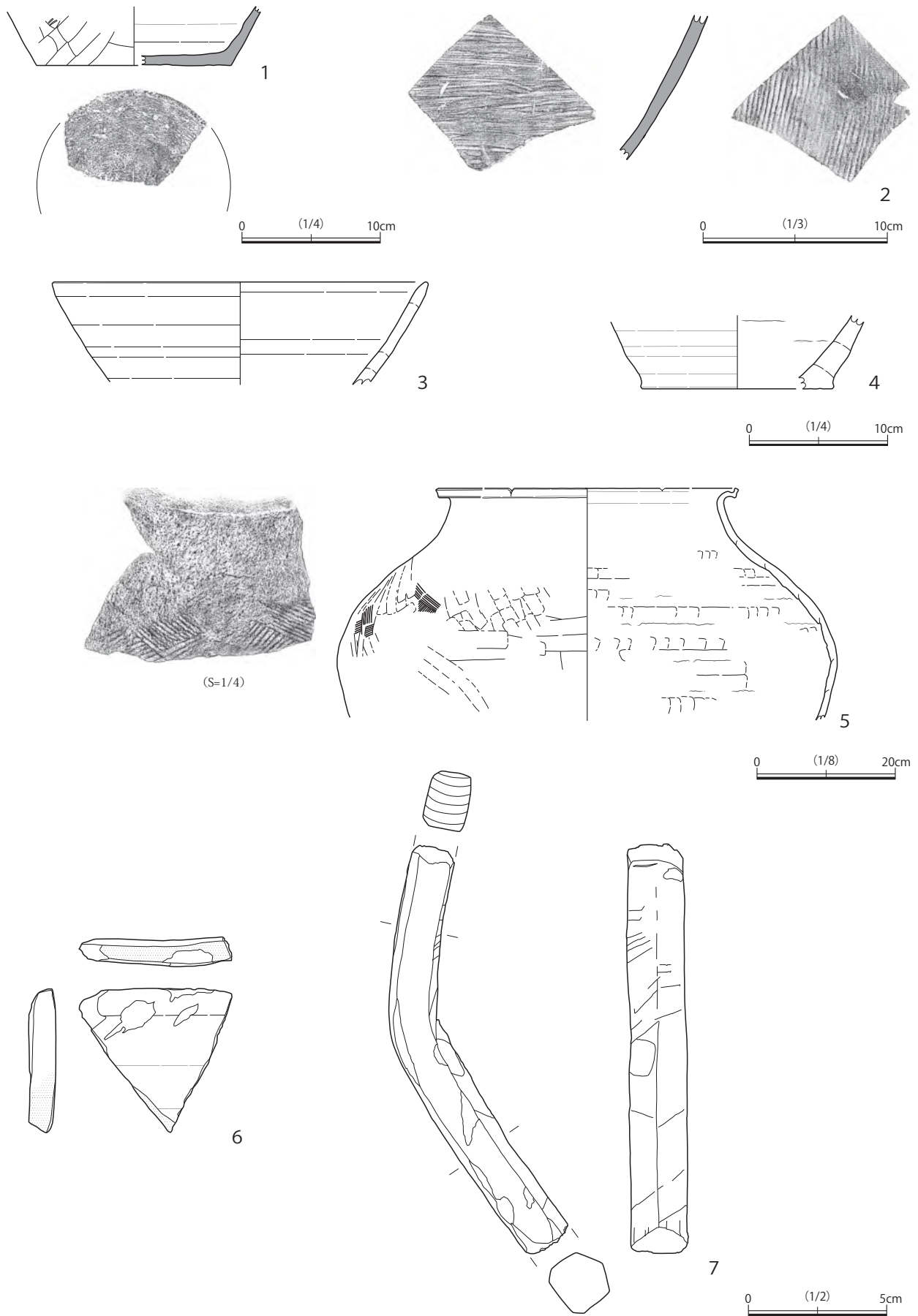
木製品：7はエノキ属製で器種不明だが、何らかの製品の一部分と推測される。

時期

出土遺物から13世紀以降に廃絶されたと考えられる。



第25図 第1号井戸跡実測図 (S = 1/40)



第 26 图 第 1 号井戸跡出土遺物実測図 (S = 1/8 · 1/4 · 1/3 · 1/2)

第6表 第1号井戸跡出土遺物観察表

法量の（ ）は推定、[]は現存、—は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
26-1 10-2	SE01	須恵器 壺	— [4.3] (13.0)	平底の底部から胴部に向かって外傾しながら直線的に立ち上がる。外面斜位・横位ヘラケズリ、ごく一部に平行タタキ痕が残る。底面ヘラ描きか。内面回転ナデ。	砂粒少量	緻密	良好	外—灰色 (N5/)、黄灰色 (2.5Y6/1) 内—黄灰色 (2.5Y6/1)	胴下部～底部 30%残存。 南多摩産か。 9c代。
26-2 10-3	SE01	須恵器 甕	— [7.9] —	外面平行タタキ。内面横位ヘラナデ。	砂粒少量	緻密	良好	外—灰色 (N6/) 内—黄灰色 (2.5Y6/1)	胴下部破片資料。 東海産。 9c。

法量の（ ）は推定、[]は現存、—は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法／釉薬・文様などの特徴	胎土	胎土色	備考	
26-3 10-4	SE01	中世陶器 鉢	(25.9) [7.6] —	体部から口縁部に向かってほぼ直線的に開く。内外面回転ナデ。	砂粒少量	緻密	灰色 (N5/)	口縁部～体下部 15%残存。 東播系? 11c後半。
26-4 10-5	SE01	中世陶器 鉢	— [5.3] (13.8)	平底の底部から胴部に向かって胴下部が外傾しながら立ち上がる。内外面回転ナデ。内面使用による摩耗か。	白色粒・砂粒中量	緻密	褐灰色 (10YR6/1)	胴下部～底部 20%残存。 産地不明 (在地?)
26-5 10-6	SE01	中世陶器 甕	(43.0) [33.7] —	紐作り成形。口縁部は大きく外反し、口唇部は平坦に成形されている。頸部は内傾し、胴部上位に最大径をもつ。外面口縁部横ナデ、胴上部平行タタキ後、斜位・横位ヘラナデ。内面口縁部横ナデ、胴上部横位ヘラナデ。内面に粘土紐の継ぎ目痕が顕著に残る。	砂粒中量	緻密	褐灰色 (10YR6/1)	最大径 (72.1) cm。 口縁部～胴上部 30%残存。 常滑産。 1220～1250 年。

法量の（ ）は推定、[]は現存、—は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
26-6 10-7	SE01	転用品 転用研具	5.2	5.6	1.0	22.7	鉢口縁部を転用。上面および表面左下、左側面下半部に使用面あり。 東播系? 外—灰色 (N5/)・内—灰色 (5Y6/1)

法量の（ ）は推定、[]は現存、—は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
26-7 10-8	SE01	木製品 器種不明	[14.8]	2.1	2.1	51.0	樹種：エノキ属 木取り：割材 板目。 「く」の字状に成形されている。上下端部欠損。断面形状は上半部は四角形、下半部は五角形を呈する。 側面に複数の工具痕が認められる。

第2号井戸跡

遺構 (第27図 図版5・6)

位置：J・K-7・8グリッド。規模・形状：上面の平面形は直径3.18mの円形を呈する。確認面からの深さ0.90mほどから長軸1.88m×短軸1.61mの楕円形になり、下部では直径2.02mの円形、底面は長軸0.74m×短軸0.55mの楕円形となる。断面形は漏斗状を呈し、確認面からの深さ0.90m位からほぼ垂直に垂下し、下部で袋状に広がる。北壁面では確認面からの深さ0.37mのところでは2箇所、南壁面では確認面からの深さ0.47mのところには1箇所足掛け穴状のピットがほぼ水平に穿たれている。確認面からの深さは2.98mである。覆土：全部で8層に分層でき、含有物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。黒色シルト主体である。備考：下部が袋状に広がるが、この付近の地山は砂層のため、使用している段階で崩落し袋状を呈するようになったものと考えられる。本来は中部より下部は円筒状を呈していた可能性が高い。

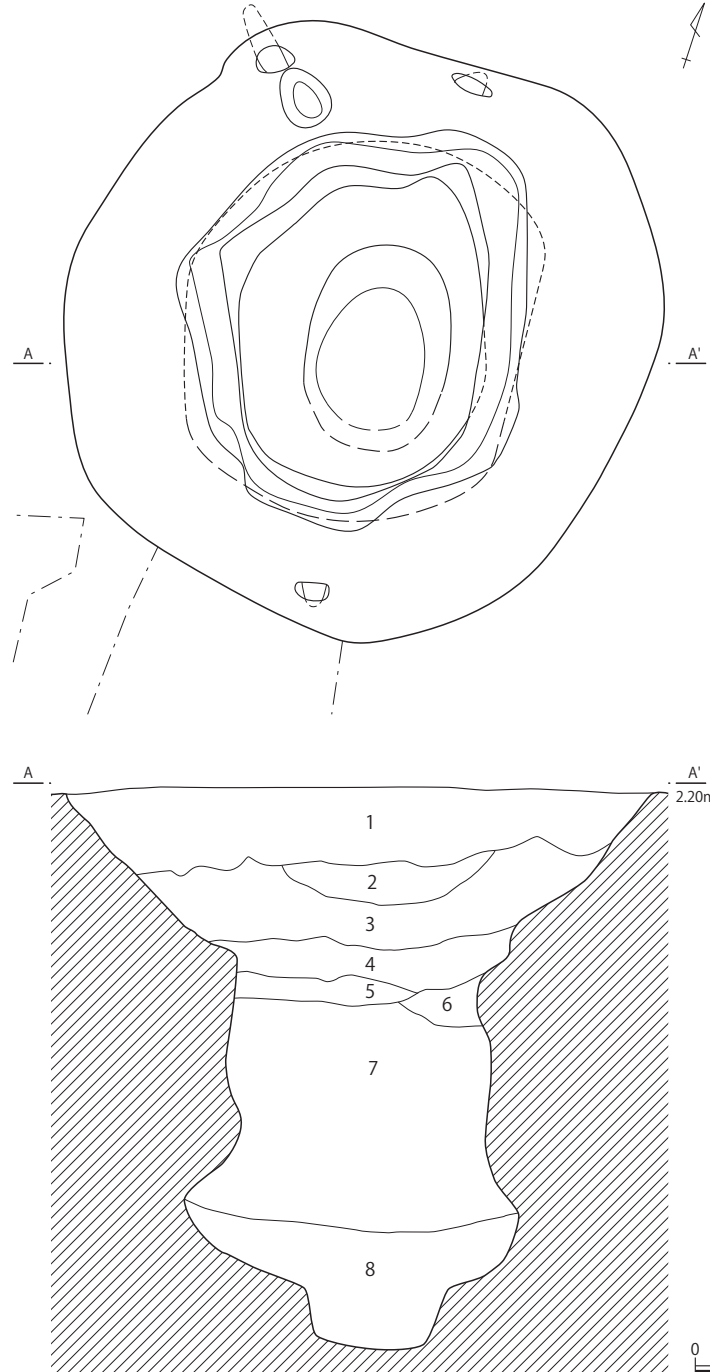
遺物 (第28図 第7表 図版11)

出土状況：本遺構からは全部で18点の遺物が出土した。東金子産と考えられる須恵器盤が1点、中国龍泉窯の青磁碗が1点、常滑産の中世陶器(片口)鉢が10点、甕が1点、渥美産の中世陶器壺と短頸壺

が各1点、器種不明の土器が1点、砥石が1点、器種不明で、スギの棒状木製品が1点である。このうち7点を図示し、1点は写真掲載した。他には拳大の砂岩円礫27点8,229g、安山岩円礫3点1,241g、礫岩円礫1点380g、ハマグリ1点、モモの種子1点が出土している。平面分布としては特に纏まりをもつことはないが、垂直分布では1～5層から多く出土し、7層以下の出土量は少ない。

土器：1～6は常滑産の中世陶器である。1～3はI類の(片口)鉢である。4は甕、5・6はII類の片口鉢である。いずれも13世紀中頃から後半にかけてのものである。図版11-1は中国龍泉窯の13世紀の青磁碗である。

石器：7は凝灰岩製の砥石で、欠損部以外すべての面に使用された痕跡が残る。



時期

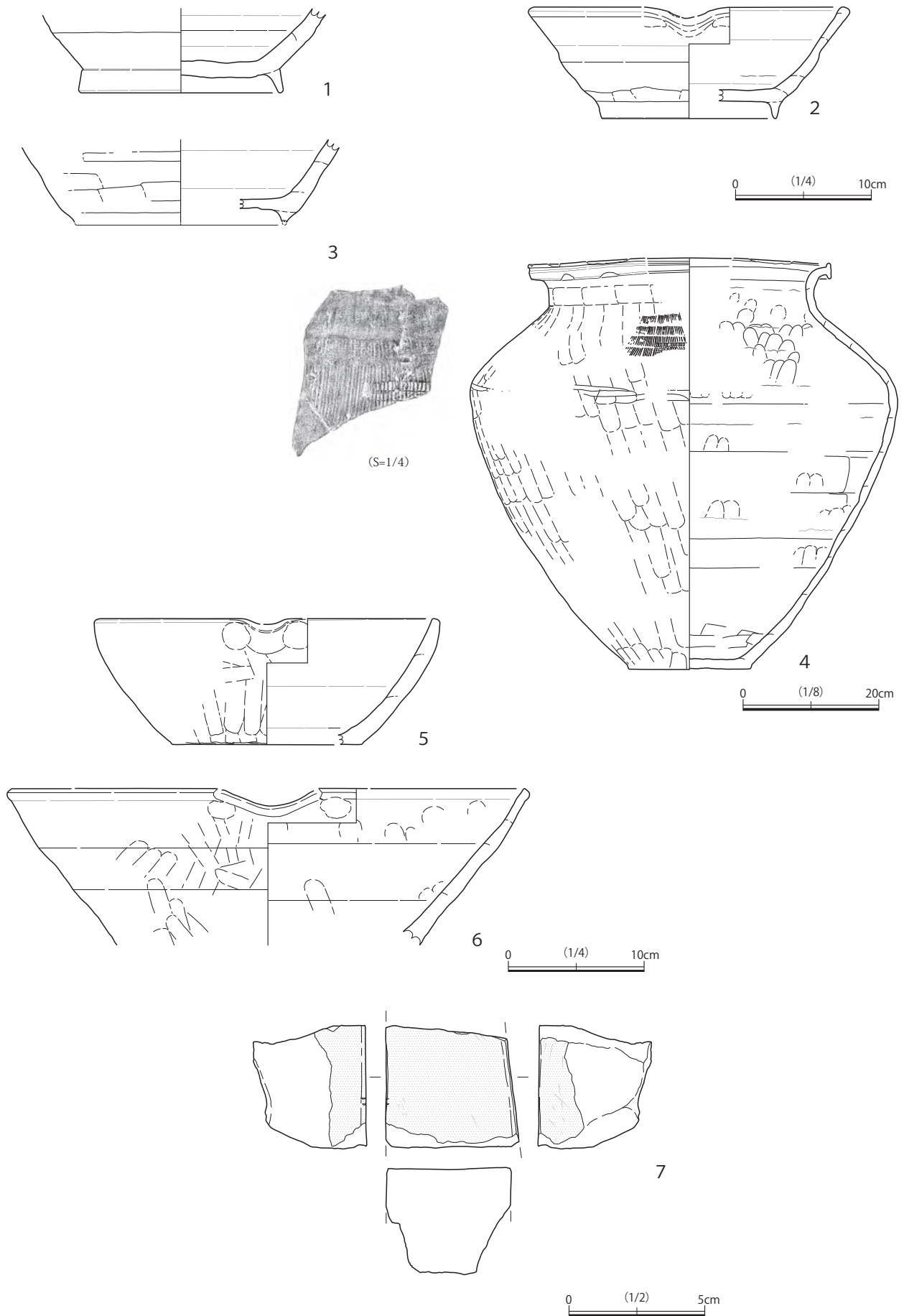
出土遺物から13世紀以降に廃絶されたと考えられる。

SE02

土層説明 (A A')

1. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック、酸化ブロック微量含む。
2. オリーブ黒色シルト (7.5Y3/2)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子多量、酸化ブロック微量含む。
3. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック微量含む。
4. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、縮まりあり。青灰色シルトブロック中量含む。
5. 黒色シルト (10YR1.7/1)。粘性やや強、縮まりあり。オリーブ黒色シルト粒子多量含む。
6. 黒色シルト (10YR1.7/1)。粘性やや強、縮まりあり。青灰色シルト粒子少量含む。
7. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性強、縮まりあり。青灰色シルトブロック多量含む。
8. 褐灰色シルト (10YR5/1)。粘性強、縮まりやや弱。灰色砂ブロック多量含む。

第27図 第2号井戸跡実測図 (S = 1/40)



第28図 第2号井戸跡出土遺物実測図 (S = 1/8 · 1/4 · 1/2)

第7表 第2号井戸跡出土遺物観察表

法量の（ ）は推定、[] は現存、一は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法／釉薬・文様などの特徴	胎土	胎土色	備考
— 11-1	SE02	磁器 碗	— — —	ロク口成形。 青磁釉。鎔蓮弁文。	—	灰白色 (2.5Y7/1)	口縁部破片資料。 中国（龍泉窯）。 13c。
28-1 11-2	SE02	中世陶器 鉢	— [6.2] (14.0)	高台を有する底部から体下部がほぼ直線的に外傾して立ち上がる。内外面回転ナデ後、外面体下部回転ヘラケズリ、高台貼付、ナデ。内面使用による摩耗か。	砂粒中量	緻密 褐灰色 (10YR6/1)	体下部～底部 25%残存。 常滑産。 I類、1220～ 1275年。
28-2 11-3	SE02	中世陶器 片口鉢	(22.7) 8.2 (12.8)	断面三角形の高台を有する。底部から口縁部に向かってほぼ直線的に外傾して立ち上がる。口縁部はわずかに肥厚する。内外面回転ナデ後、外面体下部回転ヘラケズリ。底面回転ヘラケズリ後、高台貼付、ナデ。内面自然釉。	砂粒中量	緻密 灰黄褐色 (10YR6/2)	25%残存。 常滑産。 I類、1250～ 1275年。
28-3 11-4	SE02	中世陶器 鉢	— [6.3] (14.4)	断面三角形の高台を有する。底部から体下部が直線的に外傾して立ち上がる。内外面回転ナデ後、外面体下部回転ヘラケズリ、高台貼付、ナデ。内面および外面底面自然釉。	石英・砂粒少量	緻密 灰白色 (N7/)	体下部～底部 20%残存。 常滑産。 I類、1250～ 1275年。
28-4 11-5	SE02	中世陶器 甕	(44.3) (60.6) (17.8)	紐作り成形。口縁部断面は「N」字状を呈し、胴部上位に最大径をもつ。底部は平底。外面口縁部横ナデ、頸部横位、肩部縦位、胴部縦位ヘラナデ。肩部稜を横位指ナデ。内面口縁部横ナデ、胴部～底部横位ヘラナデ。内面に粘土紐の継ぎ目痕と指圧痕が残る。	砂粒中量	緻密 灰褐色 (5YR4/2)	最大径 (63.3) cm。 30%残存。 常滑産。 1250～1300 年。
28-5 11-6	SE02	中世陶器 片口鉢	(24.5) 9.3 (13.9)	平底の底部から口縁部に向かって内湾しながら外傾して立ち上がる。口唇部は平坦に成形されている。内外面回転ナデ後、外面斜位横位ヘラナデ。内面使用による摩耗か。	砂粒中量、黒色粒 微量	緻密 褐灰色 (10YR5/1)	20%残存。 常滑産。 II類、1250～ 1275年。
28-6 11-7	SE02	中世陶器 片口鉢	(37.7) [11.5] —	体部から口縁部に向かって直線的に開く。口唇部は平坦に成形されている。片口部は欠損するが、わずかに痕跡が認められる。内外面回転ナデ後、外面体部斜位ヘラナデ。内面指頭圧が残る。	砂粒中量	緻密 褐灰色 (10YR4/1)、灰 黄褐色 (10YR6/2)	口縁部～体部 20%残存。 常滑産。 II類、1275～ 1300年。

法量の（ ）は推定、[] は現存、一は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
28-7 11-8	SE02	石器 砥石	[4.4]	4.9	[4.1]	117.0	凝灰岩	砥石破片。上下部・裏面欠損。使用面3面。

第3号井戸跡

遺構（第29図 図版6・7）

位置：I・J-9グリッド。規模・形状：上面の平面形は長軸1.67m×短軸1.34mの楕円形、底面は長軸0.75m×短軸0.57mの楕円形を呈する。断面形は漏斗状を呈し、確認面から0.80m位の深さから直線的に垂下する。確認面からの深さは2.17mである。覆土：全部で3層に分層でき、含有物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。黒色・褐灰色シルト主体である。

遺物（第30図 第8表 図版11）

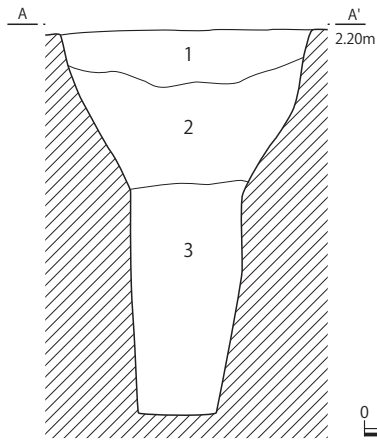
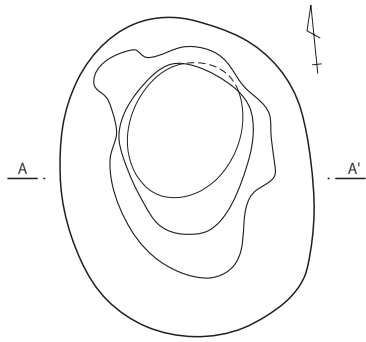
出土状況：本遺構からは全部で6点の遺物が出土した。中国龍泉窯の青磁碗が1点、中国景德鎮窯と考えられる白磁皿が1点、常滑産の中世陶器鉢が1点、中世カワラケが1点、器種不明の土器が1点、木製品が1点である。このうち1点を図示し、2点を写真掲載した。他には拳大の砂岩円礫7点2,310g、ウシの歯1点、モモの種子3点が出土している。遺物は、平面・垂直分布ともに特に纏まりをもつことなく散在的に出土している。

土器：図版11-9は中国龍泉窯の13世紀の青磁碗である。図版11-10は中国景德鎮窯と考えられる白磁の皿で、時期は不明である。

木製品：1はアカガシ亜属製の農・工具の柄と考えられる。

時期

出土遺物から13世紀以降に廃絶されたと考えられる。



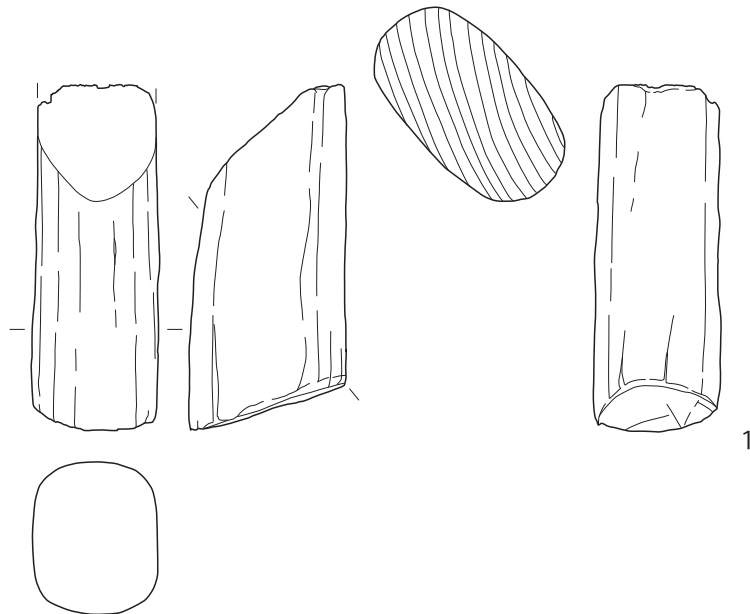
SE03

土層説明 (A A')

1. 黒褐色シルト (10YR3/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子少量、明黄褐色シルトブロック微量含む。
2. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子少量含む。
3. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性やや強、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子、黒色シルトブロック少量含む。

0 (1/40) 1m

第 29 図 第 3 号井戸跡実測図 (S = 1/40)



0 (1/2) 5cm

第 30 図 第 3 号井戸跡出土遺物実測図 (S = 1/2)

第8表 第3号井戸跡出土遺物観察表

法量の () は推定、[] は現存、— は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法／釉薬・文様などの特徴	胎土	胎土色	備考
— 11-9	SE03	磁器 碗	— — —	ロクロ成形、削り高台。 青磁釉。	—	灰白色 (5Y7/1)	体下部～底部破片資料。 龍泉窯。 13c?
— 11-10	SE03	白磁 皿	— — —	ロクロ成形。 白磁釉。	—	灰白色 (7.5Y8/1)	口縁部～体部破片資料。 中国 (景德鎮窯?)。 時期不明。

法量の () は推定、[] は現存、— は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
30-1 11-11	SE03	木製品 柄?	[9.1]	4.1	3.3	85.1	樹種：アカガシ亜属 木取り：割材斜。 農・工具の柄と思われる。断面形状は隅丸方形を呈する。

第4号井戸跡

遺構 (第31図 図版6・7)

位置：J-9グリッド。規模・形状：上面の平面形は直径 1.46 m の円形、底面は直径 0.55 m の円形、断面形は逆台形を呈する。北壁面では確認面からの深さ 0.54 m のところに 1 箇所足掛け穴状のピットが斜位に穿たれている。確認面からの深さは 1.58 m である。覆土：全部で 5 層に分層でき、含有物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。黒褐色・黒色シルト主体である。

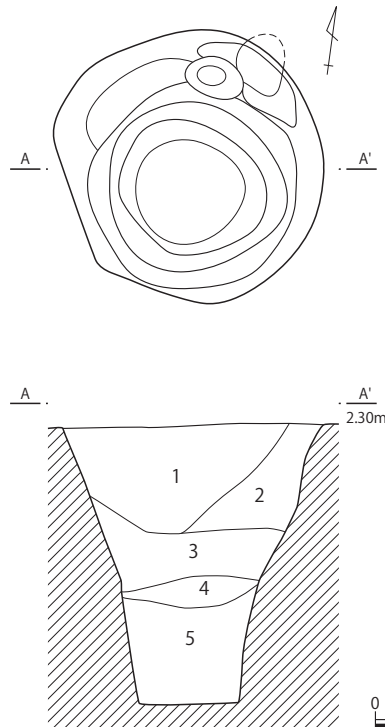
遺物 (第32図 第9表 図版12)

出土状況：本遺構からは第32図の中世カワラケ 1 点が出土した。他には拳大の砂岩円礫 1 点 25 g が出土している。カワラケは上層からの出土である。

土器：1 は中世カワラケである。

時期

中世。

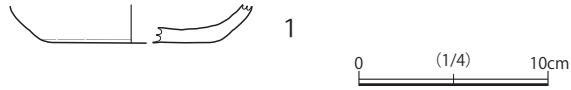


SE04

土層説明 (A A')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト、酸化粒子少量含む。
2. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト中量、明黄褐色シルトブロック少量含む。
3. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック少量含む。
4. 黒色シルト (10YR1.7/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。
5. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性強、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子、黒色シルトブロック少量含む。

第31図 第4号井戸跡実測図 (S = 1/40)



第32図 第4号井戸跡出土遺物実測図 (S = 1/4)

第9表 第4号井戸跡出土遺物観察表

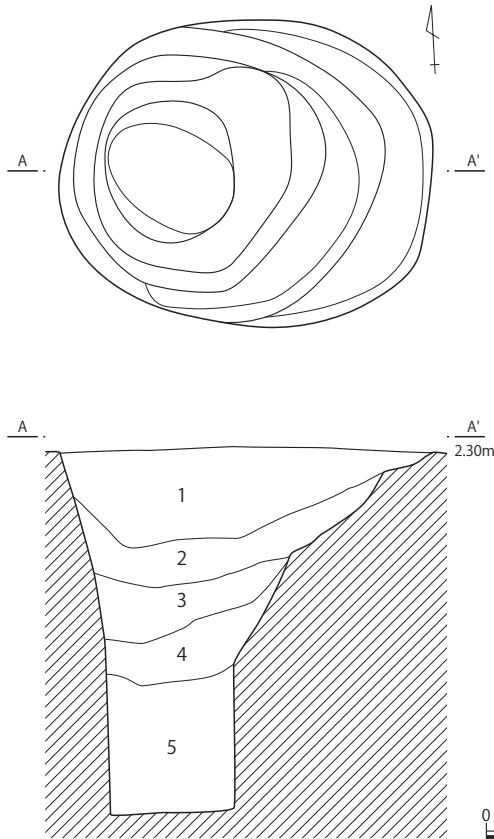
法量の () は推定、[] は現存、一は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
32-1	SE04	土器 カワラケ	—	平底の底部から体下部がやや内湾しながら立ち上がる。摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、内外面回転ナデ、底面回転ヘラ切り。	赤色粒・砂粒少量密	良	外—にぶい 橙色 (7.5YR7/4) 内—にぶい 黄橙色 (10YR7/4)	体下部～底部 25%残存。 13c代。
12-1			[2.0] (8.0)					

第5号井戸跡

遺構 (第33図 図版6・7)

位置：J・K-9グリッド。規模・形状：上面の平面形は長軸 1.94 m×短軸 1.63 mの楕円形を呈する。確認面からの深さ 1.10 mほどから直径 1.00 mの円形になり、底面は長軸 0.70 m×短軸 0.49 mの楕円形である。断面形は漏斗状を呈し、確認面からの深さ 1.10 m位からほぼ垂直に垂下する。西壁は急斜度で垂下するが、東壁は階段状に緩やかに下る。確認面からの深さは 1.91 mである。覆土：全部で5層に分層でき、含有物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。黒褐色・黒色シルト主体である。



第33図 第5号井戸跡実測図 (S = 1/40)

遺物

出土状況：本遺構からは、東金子産の須恵器坏が1点、常滑産の中世陶器壺が1点出土したが、小破片のため図示できなかった。他には拳大の砂岩円礫1点 160 g、人頭大の火山礫凝灰岩亜角礫1点 5,560 gが出土した。火山礫凝灰岩は底面近くから出土した。

時期

中世。

SE05

土層説明 (A A')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量、酸化粒子微量含む。
2. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。
3. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量含む。
4. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。
5. 黒褐色シルト (10YR3/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック中量含む。

第6号井戸跡

遺構 (第34図 図版7)

位置：N-11 グリッド。規模・形状：上面の平面形は直径 1.02 m の円形、底面は直径 0.61 m の円形、断面形はほぼ円筒形を呈する。確認面からの深さは 2.63 m である。覆土：全部で2層に分層でき、含有物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。黒褐色シルト主体である。

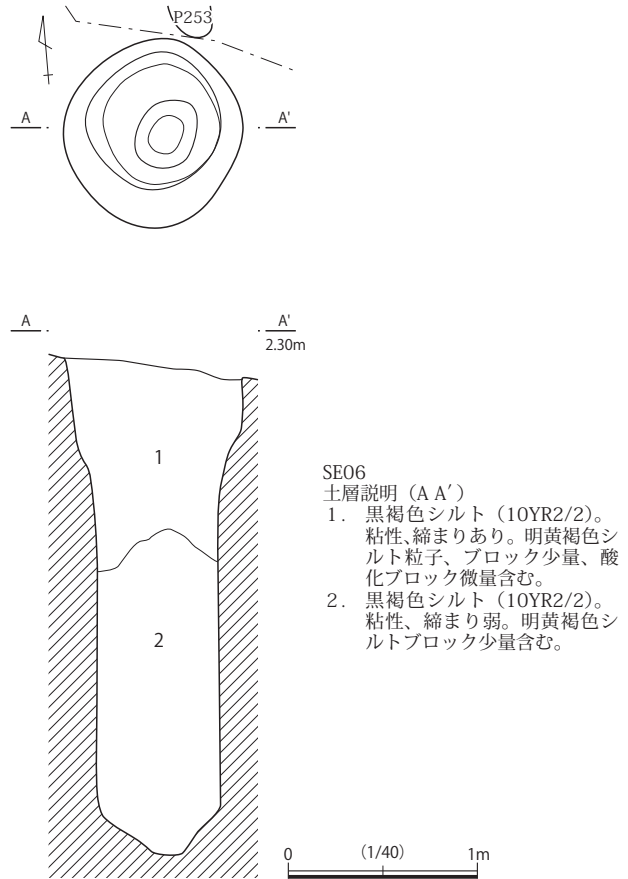
遺物 (第10表 図版12)

出土状況：本遺構からは中国龍泉窯の青磁碗が1点出土し、写真のみ掲載した。他にはモモの種子が1点出土している。

土器：図版12-2は中国龍泉窯の13世紀の青磁碗である。

時期

出土遺物から13世紀以降に廃絶されたと考えられる。



第34図 第6号井戸跡実測図 (S = 1/40)

第10表 第6号井戸跡出土遺物観察表

法量の () は推定、[] は現存、一は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法/釉薬・文様などの特徴	胎土	胎土色	備考
—	SE06	磁器 碗	— — —	ロクロ成形、削り高台。 青磁釉。竈蓮弁文。	—	灰白色 (5Y7/1)	口縁部～体部破片資料。 中国 (龍泉窯)。 13c。

第7号井戸跡

遺構 (第35図 図版7)

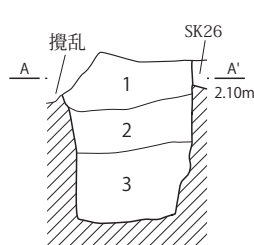
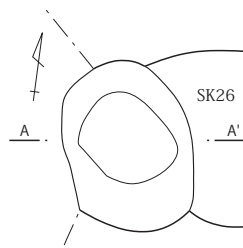
位置：L-11 グリッド。重複関係：第26号土坑を切る。規模・形状：上面の平面形は長軸 0.90 m × 短軸 0.67 m の楕円形、底面は長軸 0.51 m × 短軸 0.44 m の楕円形、断面形は円筒形を呈する。確認面からの深さは 0.92 m である。覆土：全部で3層に分層でき、含有物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。黒褐色・黒色シルト主体である。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世。



SE07

土層説明 (A A')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色粒子少量、酸化粒子微量含む。
2. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色粒子中量、明黄褐色シルトブロック少量含む。
3. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック少量含む。

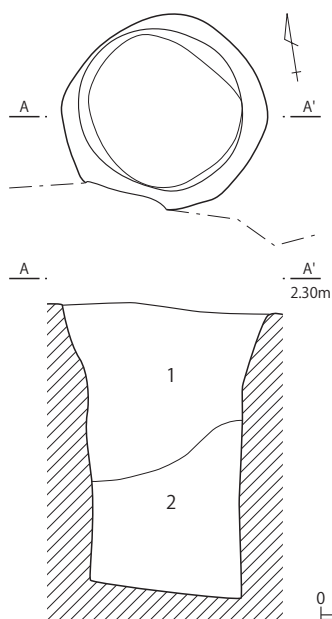
0 (1/40) 1m

第35図 第7号井戸跡実測図 (S = 1/40)

第8号井戸跡

遺構 (第36図 図版7)

位置：L-12・13グリッド。規模・形状：上面の平面形は直径1.05mの円形、底面は直径0.71mの円形、断面形はほぼ円筒形を呈する。確認面からの深さは1.43mである。覆土：全部で2層に分層でき、含有物や堆積状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。黒褐色シルト主体である。



遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世。

SE08

土層説明 (A A')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック中量、灰色シルトブロック少量、酸化粒子微量含む。
2. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、酸化粒子少量含む。

0 (1/40) 1m

第36図 第8号井戸跡実測図 (S = 1/40)

第4節 溝跡

第1号溝跡

遺構 (第37・38図 図版7)

位置：M~O-1~3グリッド。重複関係：第12号土坑に切られる。主軸方位：N-59°-W。規模・形状：調査区内ではやや蛇行するものの、概ね直線状に検出され、北西・南東方向の調査区外に続

いている。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。調査区内で確認された長さは 12.22 m、上端幅 1.08 m 前後、下端幅 0.43 m 前後、確認面からの深さは 0.36 ～ 0.41 m 前後で、調査区内では南東から北西に向かって緩やかに下る。覆土：全部で 5 層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積と考えられる。備考：第 2・3 号溝跡とほぼ直交・平行しているので、同時期に区画溝として機能していたものと推測される。

遺物

出土状況：本遺構からは常滑産の中世陶器壺が 1 点出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期

出土遺物に乏しいが、本調査区から出土する遺物のうち 13 世紀代の遺物が最も主体的であるため、本遺構は 13 世紀以降の中世段階に機能していたものと推測される。

第 2 号溝跡

遺構（第 37・38 図 図版 7）

位置：D・E-7・8、K・L-1・2 グリッド。重複関係：第 3 号溝跡と切り合うがほぼ同時期と推測される。主軸方位：N-51°-E。規模・形状：調査区内ではほぼ直線状に検出され、北東側で第 1 号溝跡に合流するものと考えられ、南西側は D-8 グリッドでは第 3 号溝跡に合流する。断面形は逆台形を呈し、底面はやや凹凸が見られる。調査区内で確認された長さは北東側が 5.92 m、南西側が 2.00 m・0.38 m であり、上端幅 0.94 m 前後、下端幅 0.82 m 前後、確認面からの深さは 0.04 ～ 0.12 m 前後で、調査区内では底面はほぼ水平である。覆土：明黄褐色シルト主体の単一層である。自然堆積か埋戻しかの判断はつけられなかった。備考：第 1・3 号溝跡とほぼ直交しているので、同時期に区画溝として機能していたものと推測される。

遺物

出土状況：本遺構からは中世カワラケが 1 点出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期

第 1・3 号溝跡とほぼ同時期と判断できるため、13 世紀以降の中世段階に機能していたものと推測される。

第 3 号溝跡

遺構（第 37・38 図 図版 8）

位置：A～K-6～16 グリッド。重複関係：第 2 号溝跡とは同時期と考えられ、第 7 号溝跡に切られる。主軸方位：N-42°-W。規模・形状：調査区内では直線状に検出され、北西・南東方向の調査区外へ続いている。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。調査区内で確認された長さは 56.66 m、上端幅 0.88 m 前後、下端幅 0.58 m 前後、確認面からの深さは 0.15 ～ 0.26 m 前後で、調査区内では南東から北西に向かって緩やかに下る。覆土：全部で 5 層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積と考えられる。備考：第 1・2 号溝跡とほぼ直交・平行しているので、同時期に区画溝として機能していたものと推測される。

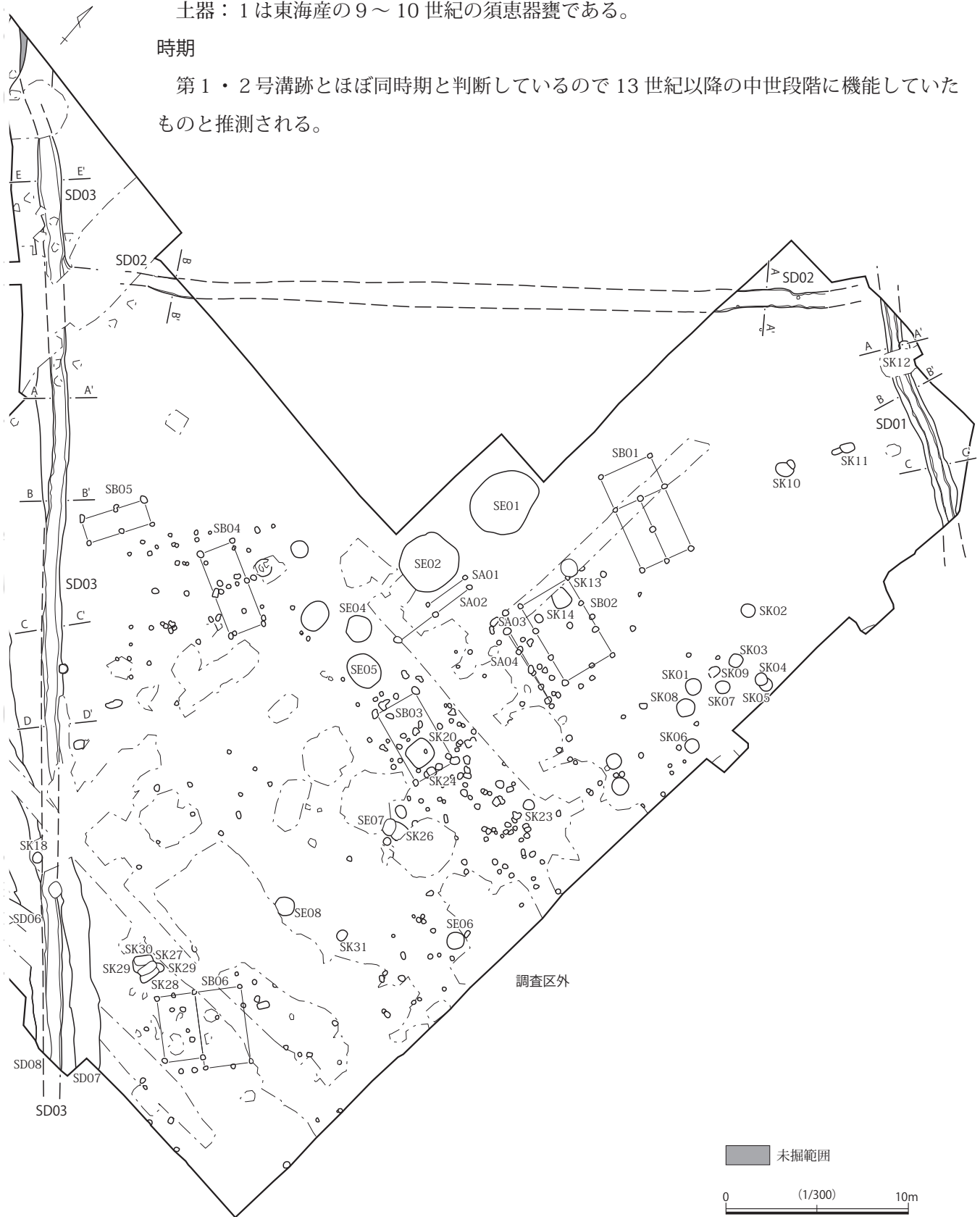
遺物（第 39 図 第 11 表 図版 12）

出土状況：本遺構からは第 39 図の須恵器甕が 1 点出土した。

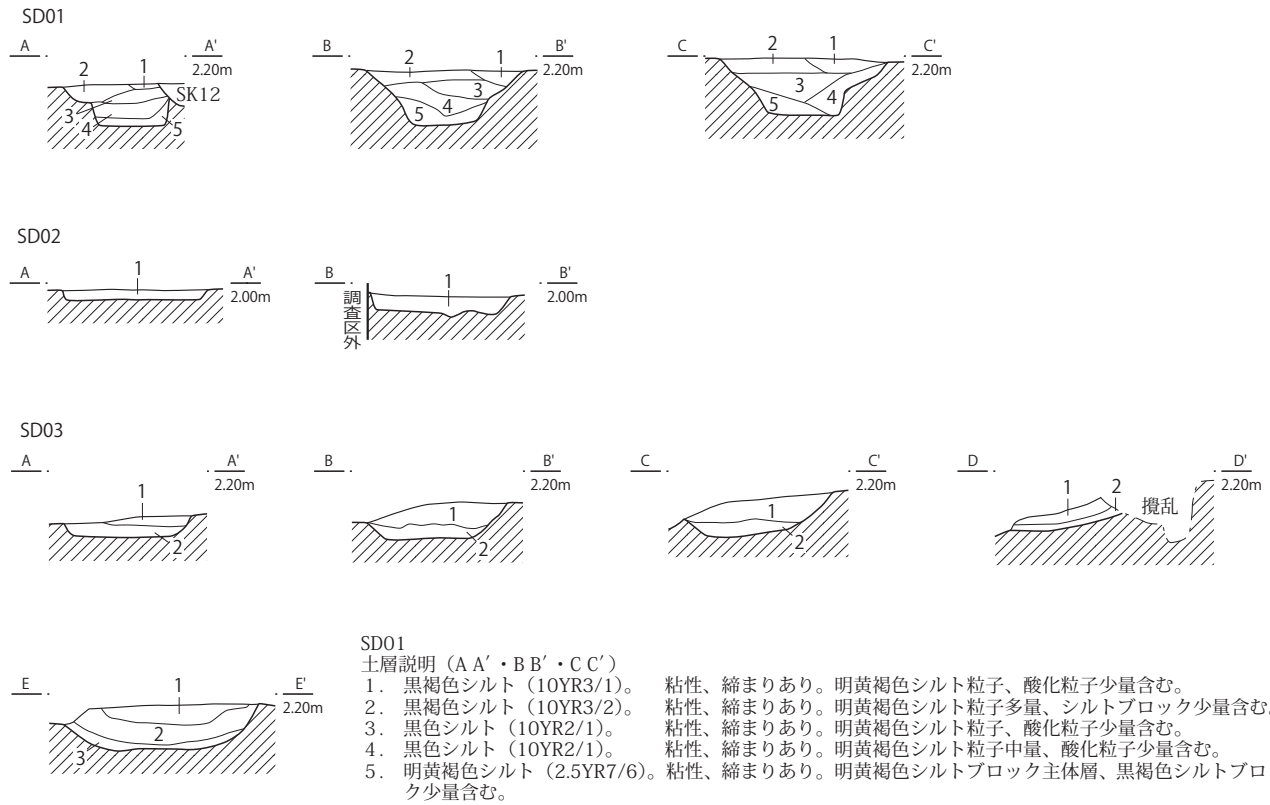
土器：1 は東海産の 9～10 世紀の須恵器甕である。

時期

第 1・2 号溝跡とほぼ同時期と判断しているため 13 世紀以降の中世段階に機能していたものと推測される。



第 37 図 第 1・2・3 号溝跡実測図 (1) (S = 1/300)



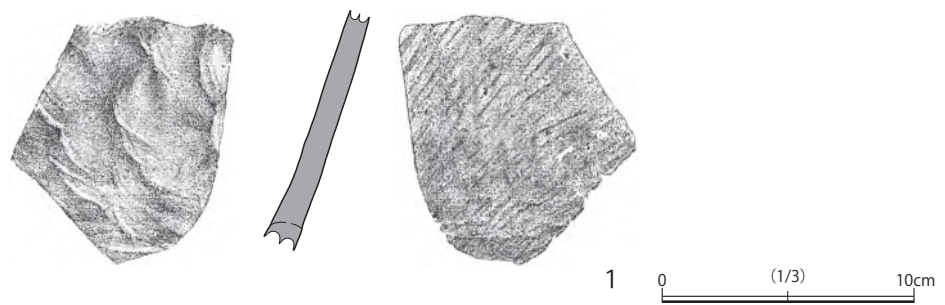
SD02 土層説明 (A A'・B B')

1. 明黄褐色シルト (10YR7/6)。粘性やや強、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック主体層、黒褐色シルトブロック少量含む。

SD03 土層説明 (A A'・B B'・C C'・D D'・E E')

1. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子中量、明黄褐色シルトブロック少量、酸化ブロック微量含む。
2. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック粒子少量含む。
3. 明黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック主体層。

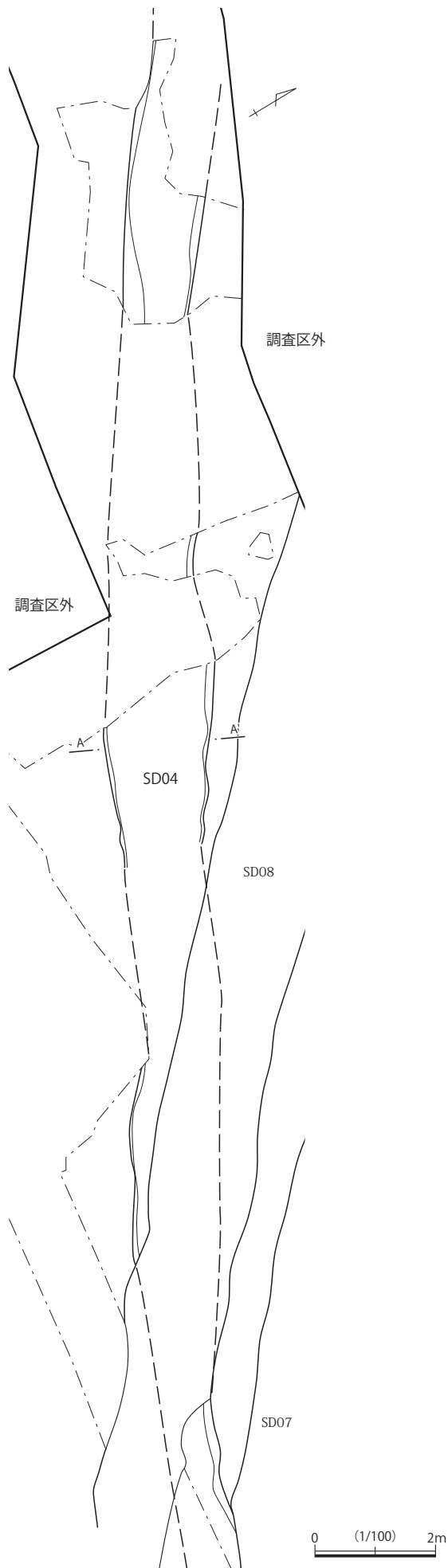
第 38 図 第 1・2・3号溝跡実測図 (2) (S = 1/50)



第 39 図 第 3号溝跡出土遺物実測図 (S = 1/3)

第 11 表 第 3号溝跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法の特徴	法量の () は推定、[] は現存、— は不明・計測不能				
					胎土	焼成	色調	備考	
39-1	SD03	須恵器 甕	—	外面平行タタキ。内面当て具痕。	砂粒中量	緻密	良好	外—暗灰色 (N3/) 内—灰色 (N5/)	胴下部破片資料。 東海産。 9~10c?
12-3			[9.6]						



第4号溝跡

遺構 (第40図 図版8)

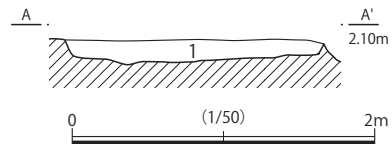
位置：B～H－10～13グリッド。重複関係：第7・8号溝跡に切られる。主軸方位：N－61°－W。規模・形状：調査区内では直線状に検出され、北西方向の調査区外に続いている。南東方向は第7号溝跡により壊されており不明である。断面形は逆台形を呈し、底面はやや凹凸が見られる。調査区内で確認された長さは25.72m、上端幅1.66m前後、下端幅1.56m前後、確認面からの深さは0.11～0.21m前後で、調査区内では北西から南東に向かって緩やかに下る。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積によるものと推測される。備考：第1・3号溝跡と走行方位が近接しているので区画溝として機能していたものと推測される。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

第1～3号溝跡と時期的に近接しているものと考えられるため、中世と推測される。



SD04

土層説明 (A A')

1. 黒褐色シルト (10YR3/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック粒子中量含む。

第40図 第4号溝跡実測図 (S = 1/100・1/50)

第5号溝跡

遺構 (第41図 図版8)

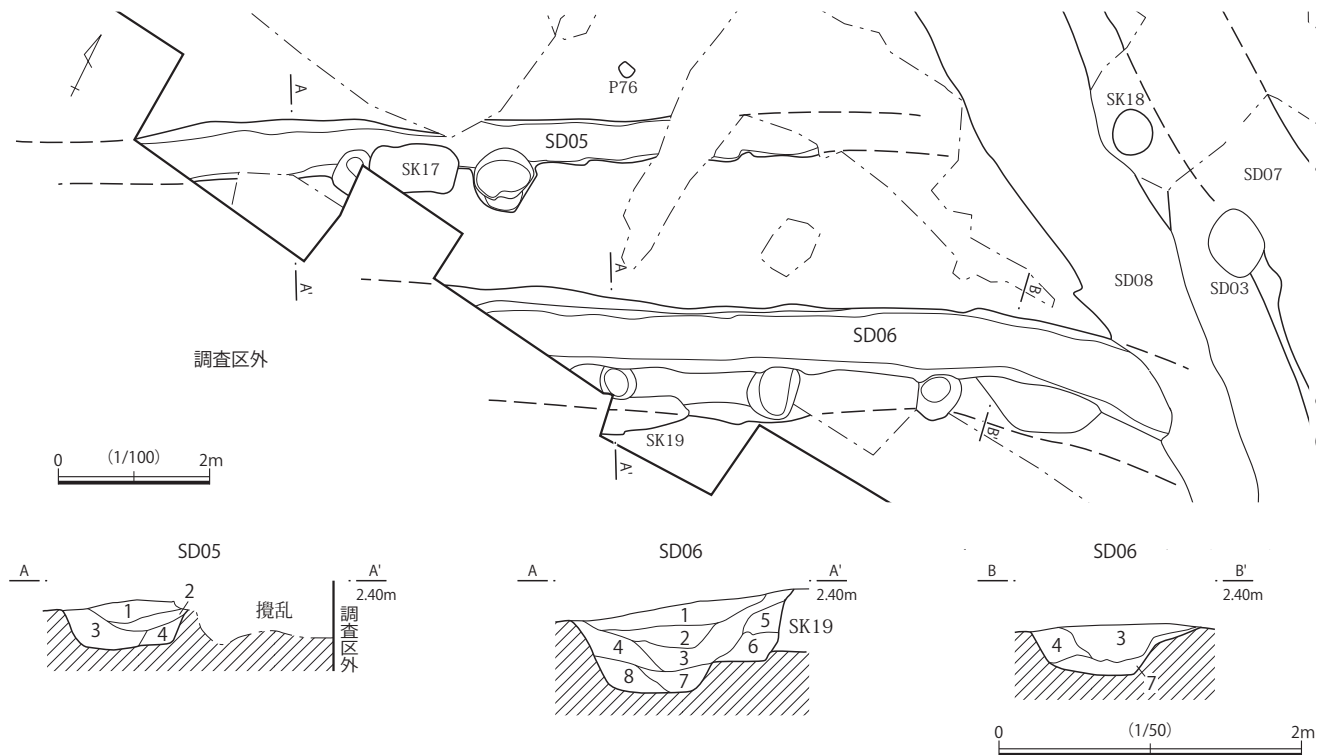
位置：F～H-15・16グリッド。重複関係：第17号土坑を切る。主軸方位：N-62°-E。規模・形状：調査区内ではほぼ直線状に検出され、南西側は調査区外に続き、北東側は攪乱により確認できなかった。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。調査区内で確認された長さは8.98mで、上端幅0.59m前後、下端幅0.48m前後、確認面からの深さは0.13～0.25mで、調査区内では底面はほぼ水平である。覆土：全部で4層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積と考えられる。黒褐色・黒色シルト主体である。ピット：南東壁際に2箇所穿たれる。深さは北東側が0.13m、南西側が0.29mである。備考：区画溝として機能していたものと推測される。

遺物

出土状況：本遺構からは中世カワラケ1点が出土しているが、小破片のため図示できなかった。

時期

第1～4号溝跡同様、中世段階に機能していたものと推測される。



SD05

土層説明 (A A')

- | | |
|-----------------------|---|
| 1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子多量、明黄褐色シルトブロック少量含む。 |
| 2. 黒色シルト (10YR2/1)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック微量含む。 |
| 3. 黒褐色シルト (10YR3/2)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子多量、明黄褐色シルトブロック、灰色シルトブロック少量含む。 |
| 4. 黒色シルト (10YR1.7/1)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック少量含む。 |

SD06

土層説明 (A A'・B B')

- | | |
|----------------------|--|
| 1. 暗褐色シルト (10YR3/3)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色粒子少量、酸化ブロック微量含む。 |
| 2. 黒褐色シルト (10YR3/2)。 | 粘性、縮まりあり。酸化ブロック少量含む。 |
| 3. 黒褐色シルト (10YR2/2)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子、酸化ブロック微量含む。 |
| 4. 黒褐色シルト (10YR3/2)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子中量、明黄褐色シルトブロック微量含む。 |
| 5. 黒褐色シルト (10YR3/1)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック少量含む。 |
| 6. 褐灰色シルト (10YR4/1)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック多量含む。 |
| 7. 黒褐色シルト (10YR2/2)。 | 粘性、縮まりあり。明黄褐色シルト粒子多量、ブロック少量含む。 |
| 8. 黒色シルト (10YR2/1)。 | 粘性あり、縮まりやや弱。明黄褐色シルトブロック中量、明黄褐色シルト粒子少量含む。 |

第41図 第5・6号溝跡実測図 (S = 1/100・1/50)

第6号溝跡

遺構（第41図 図版8）

位置：G～I-15・16グリッド。重複関係：第19号土坑を切り、第8号溝跡に切られる。主軸方位：N-66°-E。規模・形状：調査区内ではほぼ直線状に検出され、I-15グリッドで、西方向に折れ曲がる。南西側は調査区外に続くが、北東側は第8号溝跡に壊されており確認できなかった。断面形は逆台形を呈し、北西壁は急斜度で立ち上がるが、南東壁は比較的緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。調査区内で確認された長さは9.22mで、上端幅1.53m前後、下端幅0.59m前後、確認面からの深さは0.50～0.72mで、調査区内では北東から南西に向かって緩やかに下る。覆土：全部で8層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積によるものと考えられる。ピット：南東壁際に3基のピットが穿たれる。深さは0.50m前後である。備考：区画溝として機能していたものと推測される。

遺物（第12表 図版12）

出土状況：本遺構からは中国龍泉窯の青磁碗が1点出土し、写真掲載した。

土器：図版12-4は中国龍泉窯の13世紀の青磁碗である。

時期

第1～5号溝跡同様、中世段階に機能していたものと推測される。

第12表 第6号溝跡出土遺物観察表

法量の（ ）は推定、[]は現存、—は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法／釉薬・文様などの特徴	胎土	胎土色	備考
— 12-4	SD06	磁器 碗	— — —	ロクロ成形。 青磁釉。鎊蓮弁文。	—	灰白色 (7.5Y7/1)	体部破片資料。 中国（龍泉窯）。 13c。

第5節 土坑

第1号土坑

遺構（第42図）

位置：N-6・7グリッド。重複関係：第1号周溝状遺構を切る。規模・形状：直径0.90mの円形で、断面形は「U」字状を呈し、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは0.19mである。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第2号土坑

遺構（第42図）

位置：N-5グリッド。規模・形状：直径0.76mの円形で、断面形は皿形を呈し、底面はやや凹凸が見られる。確認面からの深さは0.14mである。覆土：全部で2層に分層でき、暗褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第3号土坑

遺構（第42図）

位置：N-6グリッド。規模・形状：直径0.76mの円形で、断面形は半球形を呈する。確認面からの深さは0.27mである。覆土：全部で4層に分層でき、暗褐色・黄褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第4号土坑

遺構（第42図）

位置：O-6グリッド。重複関係：第5号土坑を切る。規模・形状：直径0.68mの円形で、断面形は半球形を呈する。確認面からの深さは0.14mである。覆土：暗褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第5号土坑

遺構（第42図）

位置：O-6グリッド。重複関係：第4号土坑に切られる。規模・形状：直径0.69mの円形で、断面形は逆台形を呈し、底面はやや凹凸が見られる。確認面からの深さは0.14mである。覆土：暗褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第6号土坑

遺構（第42図）

位置：N・O-7グリッド。規模・形状：直径0.77mの円形で、断面形は皿形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは0.04mである。覆土：暗褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第7号土坑

遺構（第42図）

位置：N-6グリッド。規模・形状：直径0.81mの円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。南西側に直径0.44mの円形の掘り込みがある。確認面からの深さは一番深いところで0.13mである。覆土：全部で2層に分層でき、暗褐色・黄褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第8号土坑

遺構（第42図 図版8）

位置：N-7グリッド。規模・形状：直径1.04mの円形で、断面形は「U」字状を呈する。確認面からの深さは0.26mである。覆土：全部で5層に分層でき、暗褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第9号土坑

遺構（第43図）

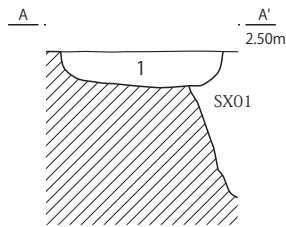
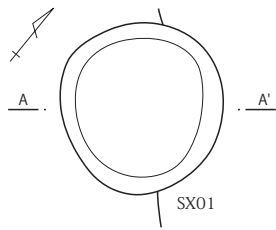
位置：N-6グリッド。重複関係：第1号周溝状遺構を切る。規模・形状：長軸推定0.80m×短軸推定0.45mの楕円形と考えられ、断面形は逆台形を呈し、底面はやや凹凸が見られる。確認面からの深さは0.06mである。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。備考：本遺構は第1号周溝状遺構調査時に同時に調査したため、長軸規模は不明である。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

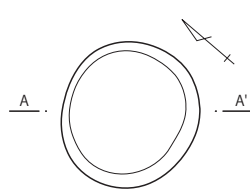
時期

中世と推測される。



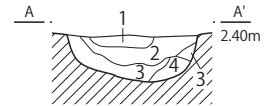
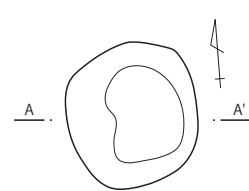
SK01
土層説明 (A A')

1. 黒褐色シルト (10YR3/2)。粘性あり、縮まりやや強い。明黄褐色シルト粒子、酸化鉄少量含む。



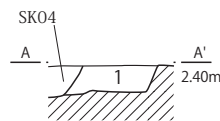
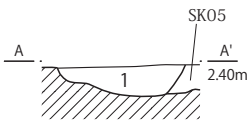
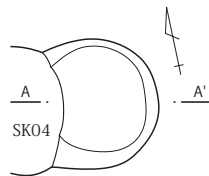
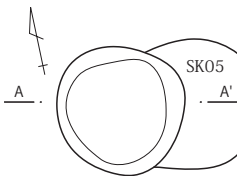
SK02
土層説明 (A A')

1. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルト粒子多量、酸化粒子、灰色シルトブロック少量含む。
2. 明黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性、縮まりあり。暗褐色シルト粒子、酸化粒子少量含む。



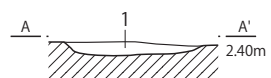
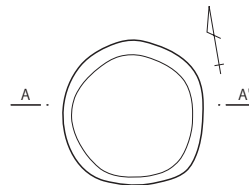
SK03
土層説明 (A A')

1. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルト粒子中量、酸化粒子少量含む。
2. 黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性、縮まりあり。暗褐色シルトブロック少量含む。
3. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性、縮まりあり。黄白色シルト粒子、ブロック少量、酸化粒子微量含む。
4. 暗褐色シルト (7.5YR3/3)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルトブロック中量、酸化粒子少量含む。



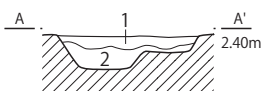
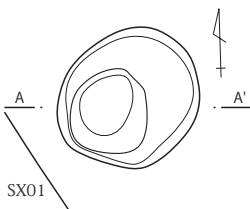
SK04・SK05
土層説明 (A A')

1. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性、縮まりあり。灰色シルトブロック、黄白色シルトブロック、粒子少量含む。
2. 暗褐色シルト (7.5YR3/4)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルトブロック、粒子少量含む。



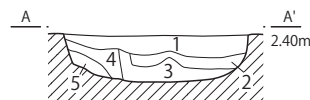
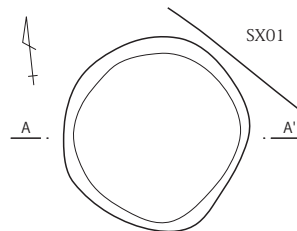
SK06
土層説明 (A A')

1. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性、縮まりあり。黄白色シルト粒子中量含む。



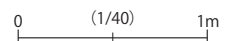
SK07
土層説明 (A A')

1. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルト粒子、酸化粒子少量含む。
2. 黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性あり、縮まりやや強。灰色シルトブロック微量含む。



SK08
土層説明 (A A')

1. 暗褐色シルト (7.5YR3/4)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルト粒子多量、酸化粒子少量含む。
2. 暗褐色シルト (10YR3/4)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルト粒子少量、酸化粒子微量含む。
3. 暗褐色シルト (7.5YR3/3)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルト粒子中量、灰色シルトブロック微量含む。
4. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルト粒子少量、酸化粒子微量含む。
5. 暗褐色シルト (7.5YR3/4)。粘性あり、縮まりやや強。黄白色シルト粒子中量、酸化粒子微量含む。



第 42 図 第 1～8 号土坑実測図 (S = 1/40)

第 10 号土坑

遺構 (第 43 図)

位置：M-3・4 グリッド。重複関係：P 2 に切られる。規模・形状：長軸 1.00 m×短軸 0.75 m の楕円形で、断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは 0.21 m である。覆土：全部で 3 層に分層でき、黒褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 11 号土坑

遺構 (第 43 図)

位置：M・N-3 グリッド。重複関係：P 1 を切る。規模・形状：長軸 0.76 m×短軸 0.52 m の楕円形で、断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは 0.40 m である。覆土：全部で 3 層に分層でき、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 12 号土坑

遺構 (第 43 図)

位置：M-1 グリッド。重複関係：第 1 号溝跡を切る。規模・形状：直径 0.60 m の円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.19 m である。覆土：全部で 2 層に分層でき、黒褐色・黒色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 13 号土坑

遺構 (第 43 図 図版 8)

位置：L-6 グリッド。重複関係：第 2 号掘立柱建物跡との新旧関係は不明。規模・形状：直径 1.05 m の円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.39 m である。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 14 号土坑

遺構 (第 43 図)

位置：L-7 グリッド。規模・形状：0.94 m 四方の正方形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.13 m である。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 15 号土坑

遺構 (第 43 図)

位置：N-8 グリッド。規模・形状：直径 0.92 m の円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.16 m である。覆土：黒色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構からは中世カワラケ 1 点が出土したが、小破片のため図示できなかった。

時期

中世。

第 16 号土坑

遺構 (第 43 図)

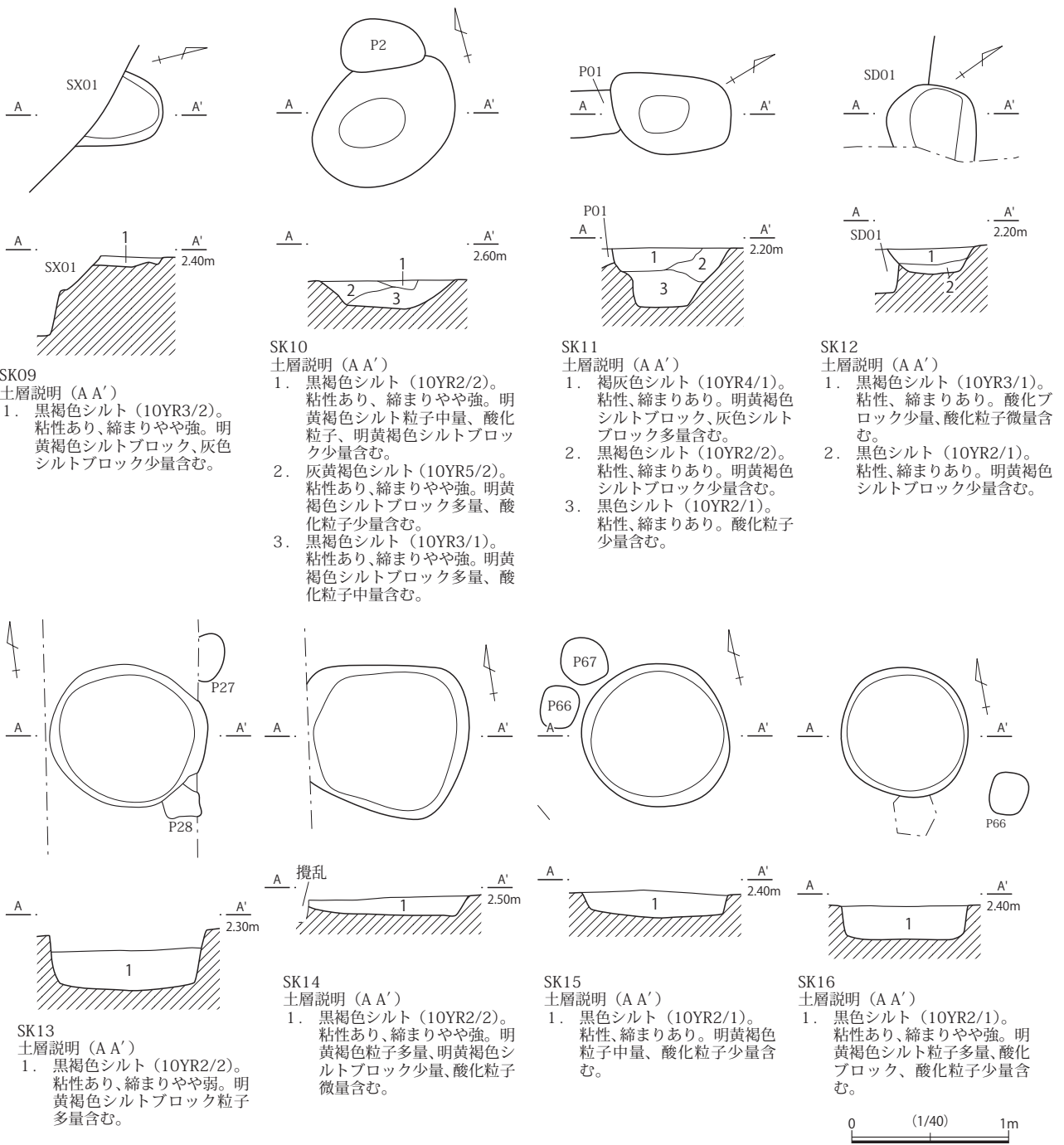
位置：N-8 グリッド。規模・形状：直径 0.83 m の円形で、断面形は円筒状を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.24 m である。覆土：黒色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。



第 43 図 第 9～16 号土坑実測図 (S = 1/40)

第 17 号土坑

遺構 (第 44 図)

位置：F・G-15 グリッド。重複関係：第 5 号溝跡に切られる。規模・形状：長軸 1.16 m×短軸 0.63 m の長方形で、断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。確認面からの深さは 0.45 m である。

覆土：全部で 3 層に分層でき、黒褐色・黒色シルト主体で人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 18 号土坑

遺構 (第 44 図)

位置：I-14 グリッド。規模・形状：直径 0.61 m の円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.22 m である。覆土：褐灰色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 19 号土坑

遺構 (第 44 図)

位置：H-16 グリッド。重複関係：第 6 号溝跡に切られる。規模・形状：長軸不明×短軸推定 0.50 m の長方形で、断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さは 0.46 m である。覆土：全部で 2 層に分層でき、黒色・黒褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 20 号土坑

遺構 (第 44 図 図版 8)

位置：L-9・10 グリッド。重複関係：P 170 との新旧関係は不明。規模・形状：1.43 m 四方の正方形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.24 m である。覆土：全部で 2 層に分層でき、黒色・黒褐色シルト主体で埋め戻されたものと考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは中世カワラケ 1 点が出土したが、小破片のため図示できなかった。他には砂岩小円礫 2 点 14 g が出土している。

時期

中世。

第 21 号土坑

遺構 (第 44 図)

位置：H・I-9 グリッド。規模・形状：直径 0.94 m の円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.13 m である。覆土：黒色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 22 号土坑

遺構 (第 44 図)

位置：I-8・9 グリッド。規模・形状：直径 0.92 m の円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.14 m である。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 23 号土坑

遺構 (第 44 図)

位置：M-9 グリッド。規模・形状：直径 0.60 m の円形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.26 m である。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 24 号土坑

遺構 (第 44 図 図版 8)

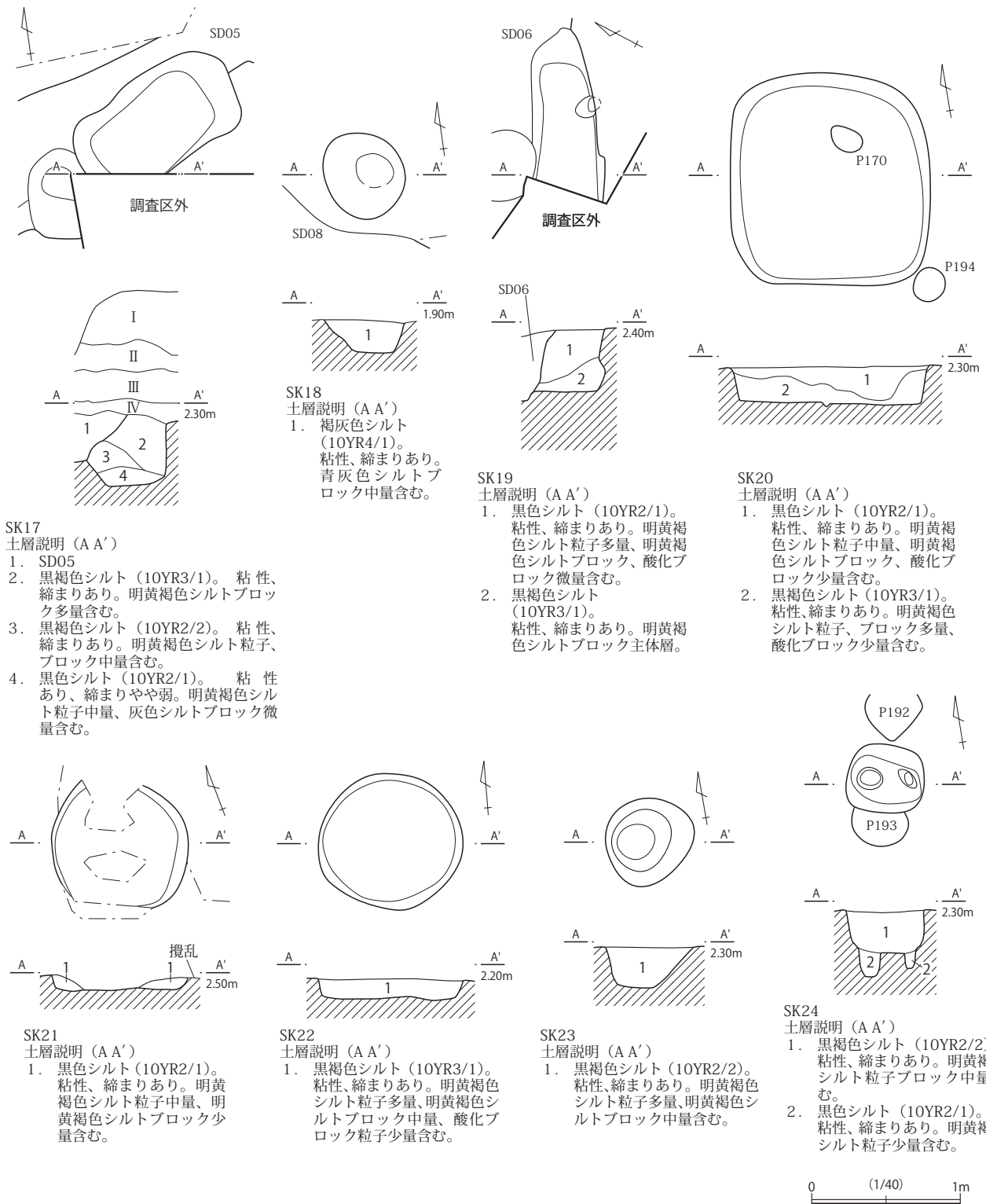
位置：L-10 グリッド。重複関係：P 193 との新旧関係は不明。規模・形状：長軸 0.50 m × 短軸 0.45 m の長方形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.31 m である。底面には 2 基のピットが穿たれる。覆土：全部で 2 層に分層でき、黒褐色・黒色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。



第44図 第17～24号土坑実測図 (S = 1/40)

第25号土坑

遺構 (第45図)

位置：L-10グリッド。規模・形状：長軸0.74m×短軸0.54mの楕円形で、断面形は「U」字状を呈する。確認面からの深さは0.20mである。覆土：全部で2層に分層でき、黒褐色・明黄褐色シルト

主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 26 号土坑

遺構（第 45 図）

位置：L－11 グリッド。重複関係：第 7 号井戸跡に切られる。規模・形状：長軸不明×短軸 0.94 m の楕円形と考えられ、断面形は「U」字状と推測される。確認面からの深さは 0.20 m である。覆土：褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 27 号土坑

遺構（第 45 図 図版 8）

位置：K－14 グリッド。重複関係：第 28～30 号土坑を切る。規模・形状：長軸 1.10 m×短軸 0.49 m の長方形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.36 m である。覆土：全部で 2 層に分層でき、黒褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 28 号土坑

遺構（第 45 図 図版 8）

位置：K－14 グリッド。重複関係：第 27 号土坑に切られ、第 29 号土坑を切る。規模・形状：長軸 1.14 m×短軸推定 0.40 m の長方形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.26 m である。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 29 号土坑

遺構（第 45 図 図版 8）

位置：K-14 グリッド。重複関係：第 27・28・30 号土坑に切られる。規模・形状：長軸 1.69 m×短軸推定 0.70 m の長方形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.16 m である。覆土：全部で 3 層に分層でき、褐灰色・黒褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 30 号土坑

遺構（第 45 図 図版 8）

位置：K-14 グリッド。重複関係：第 27 号土坑に切られ、第 29 号土坑を切る。規模・形状：長軸 1.01 m×短軸推定 0.55 m の長方形で、断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。確認面からの深さは 0.29 m である。覆土：全部で 2 層に分層でき、黒褐色シルト主体の自然堆積と考えられる。

遺物

本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。

第 31 号土坑

遺構（第 45 図）

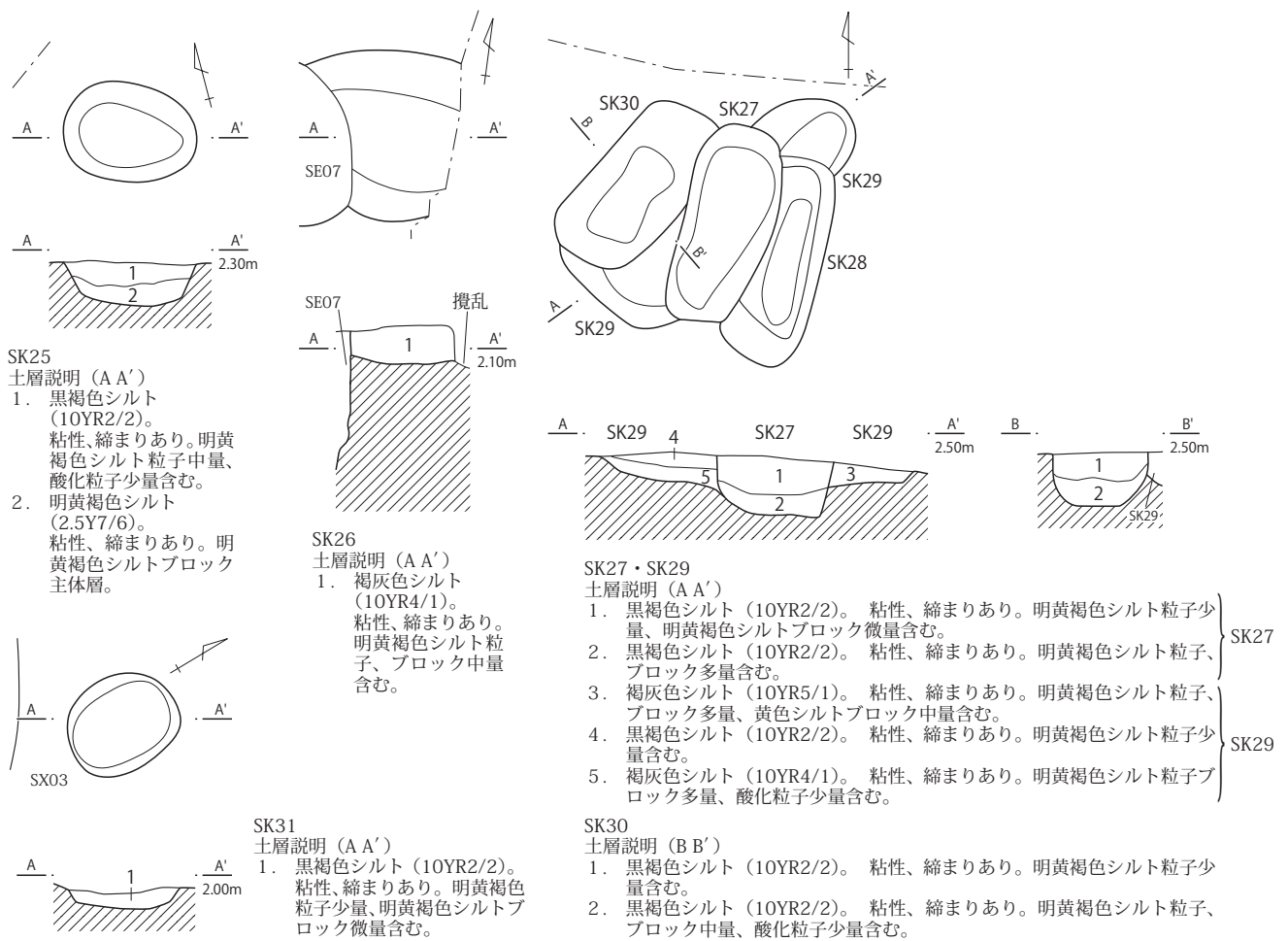
位置：M-12 グリッド。重複関係：第 3 号周溝状遺構を切る。規模・形状：長軸 0.60 m×短軸 0.53 m の楕円形と考えられ、断面形は皿形を呈する。第 3 号周溝状遺構底面からの深さは 0.15 m、確認面からの深さは 0.32 m である。覆土：黒褐色シルト主体の単一層で、自然堆積と考えられる。

遺物

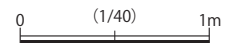
本遺構から遺物は出土していない。

時期

中世と推測される。



第45図 第25～31号土坑実測図 (S = 1/40)



第6節 ピット

遺構 (第46～48図 第13・14表 図版4)

本調査区からは全部で326基のピットが検出された。そのうち、整理作業時に掘立柱建物跡や柵列跡に認定したものが53基あり、残りは273基である。これらの中には掘立柱建物や柵列を構成していたものが含まれている可能性はあるが、規格的に配置されているものを見出すことはできなかった。覆土はほとんどが黒色・黒褐色シルト主体の単一層だが、P 52では柱痕跡が確認できた。これらピットの時期は出土遺物がほとんどないため不明確であるものの、掘り方が方形になるものが多く含まれ、軸が溝跡と揃っていること、本調査区で主体的に検出されている遺構が中世のものであることを考え合わせ、ほとんどが中世に帰属すると判断した。

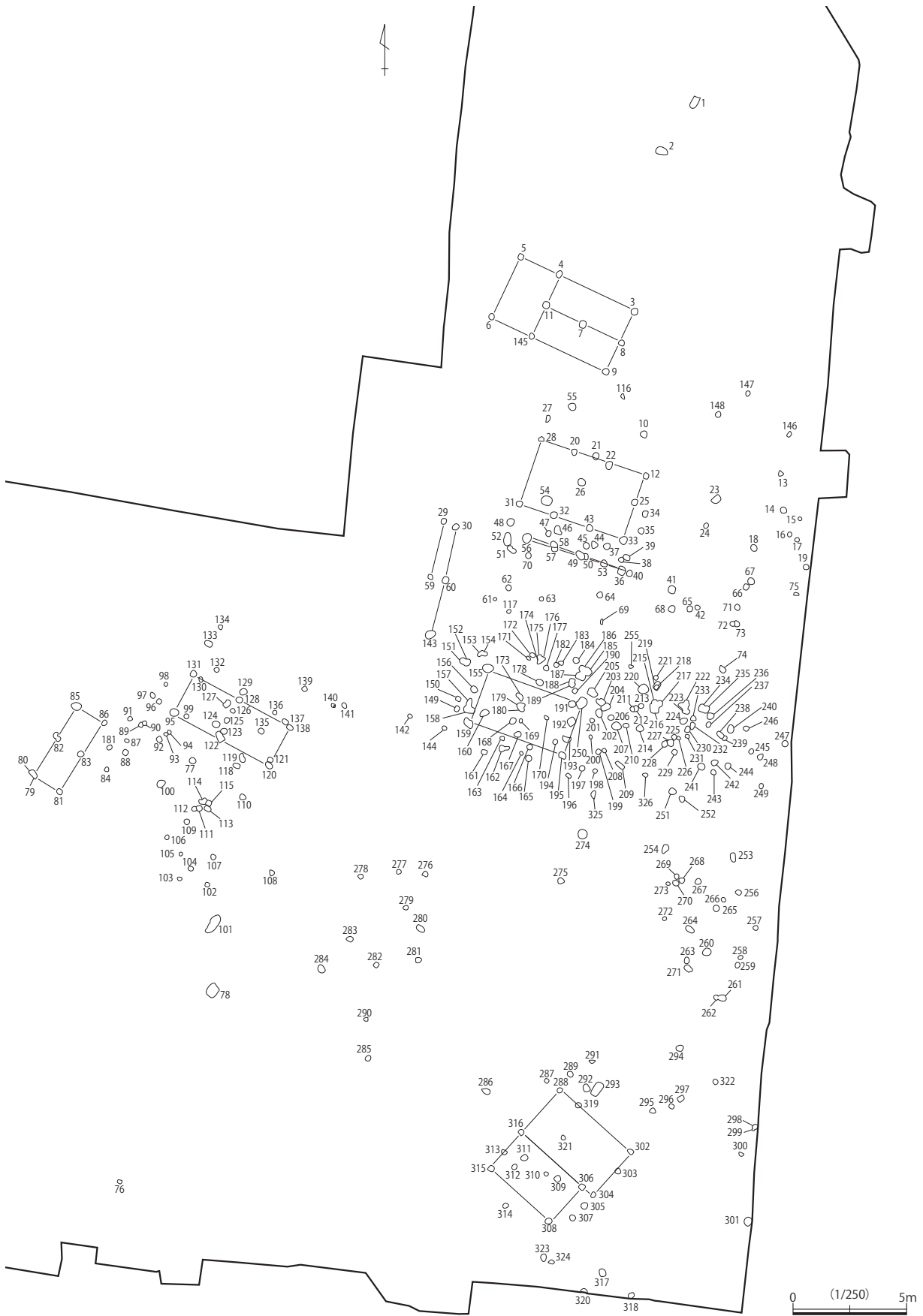
遺物 (第49図 第15表 図版12)

出土状況：P 32から常滑産の中世陶器壺が1点、P 156から不明土製品が1点、P 176から常滑産の中世陶器鉢が1点、P 205から東播系の中世陶器鉢が1点、P 250から産地不明の中世陶器鉢が1点、P 320から金属製品が1点出土した。これらのうち1点を図示した。他にはP 230から安山岩小円礫2点140gが出土している。

金属製品：1はP 320から出土した鉄鎌である。



第46図 ピット全体図 (S = 1/250)



第47図 ピット番号図 (S = 1/250)

第13表 ピット計測表(1)

[]は現存値、単位はm。

遺構名	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
P1	[0.54]	0.30	0.18	1.93
P2	0.54	0.31	0.20	1.96
P10	0.30	0.29	0.30	1.90
P13	[0.22]	0.23	0.28	2.09
P14	0.27	0.26	0.09	2.25
P15	0.17	0.16	0.17	2.17
P16	0.22	0.20	0.09	2.23
P17	0.21	0.20	0.09	2.25
P18	0.32	0.27	0.22	2.11
P19	0.25	0.24	0.32	1.97
P21	0.33	0.27	0.15	2.10
P23	0.42	0.29	0.26	2.09
P24	0.22	0.20	0.41	1.91
P25	0.28	0.26	0.18	2.08
P26	0.32	0.32	0.16	2.07
P27	0.31	[0.16]	0.14	2.07
P34	0.28	0.24	0.35	1.91
P35	0.26	0.25	0.19	2.05
P37	0.30	0.27	0.15	2.06
P38	0.23	0.22	0.19	2.05
P39	0.30	0.24	0.23	2.04
P41	0.35	0.32	0.36	1.92
P42	[0.22]	[0.21]	0.37	1.78
P44	0.31	0.28	0.12	2.09
P45	0.29	0.26	0.10	2.13
P46	0.36	0.33	0.16	2.04
P47	0.27	0.22	0.13	2.12
P48	0.33	0.31	0.27	1.93
P51	0.41	0.22	0.12	2.11
P52	0.57	0.32	0.38	1.85
P54	0.48	0.41	0.18	2.02
P55	0.34	0.31	0.14	2.06
P61	[0.15]	[0.14]	0.15	1.78
P62	0.26	0.23	0.23	1.96
P63	[0.18]	[0.18]	0.10	1.89
P64	0.25	0.25	0.33	1.91
P65	0.26	0.23	0.35	1.92
P66	0.27	0.24	0.16	2.13
P67	0.29	0.28	0.20	2.11
P68	[0.29]	[0.28]	0.33	1.85
P69	0.25	[0.11]	0.27	1.93
P70	0.26	0.25	0.13	2.05
P71	[0.26]	[0.23]	0.24	1.80
P72	[0.22]	[0.22]	0.12	1.87
P73	[0.26]	[0.21]	0.24	1.76
P74	0.32	0.23	0.54	1.59
P75	0.23	[0.13]	0.12	2.17
P76	0.19	0.16	0.16	1.82
P77	0.29	0.27	0.50	1.59
P78	0.59	0.48	0.39	1.80
P84	0.21	0.19	0.15	1.92
P87	0.21	0.16	0.12	1.92
P88	0.24	0.22	0.28	1.78
P89	0.22	0.19	0.10	1.92
P90	0.20	0.19	0.11	1.91
P91	0.21	0.19	0.13	1.89
P92	0.25	0.23	0.21	1.83
P93	0.19	0.15	0.08	1.98
P94	0.19	0.17	0.09	1.97
P96	0.23	0.21	0.39	1.67
P97	0.26	0.20	0.33	1.68
P98	0.18	0.16	0.11	1.94
P99	0.22	0.21	0.30	1.75
P100	0.38	0.30	0.45	1.63
P101	0.94	0.41	0.23	1.90
P102	0.20	0.20	0.15	1.99
P103	0.19	0.17	0.18	1.97
P104	0.24	0.20	0.13	1.99
P105	0.17	0.15	0.08	2.09
P106	0.21	0.18	0.15	2.00
P107	0.24	0.23	0.10	2.09
P108	0.26	0.21	0.10	2.02
P109	0.24	0.24	0.22	1.93
P110	0.28	0.26	0.48	1.70
P111	0.25	0.25	0.32	1.81
P112	[0.22]	0.21	0.27	1.89
P113	0.32	0.22	0.15	2.00
P114	0.38	0.27	0.21	1.94
P115	0.24	0.24	0.37	1.78

遺構名	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
P116	0.25	0.15	0.33	1.85
P117	0.19	0.16	0.11	2.09
P118	0.32	0.22	0.16	1.97
P119	0.40	0.24	0.36	1.78
P121	0.24	0.21	0.25	1.92
P123	0.29	0.27	0.37	1.76
P124	0.33	0.29	0.40	1.73
P125	0.26	0.23	0.27	1.85
P126	0.22	0.19	0.32	1.82
P127	0.36	0.26	0.33	1.77
P129	0.33	0.27	0.39	1.71
P130	0.24	0.16	0.10	1.98
P132	0.22	0.21	0.14	1.92
P133	0.35	0.26	0.16	1.94
P134	0.21	0.19	0.13	1.93
P135	0.26	0.23	0.20	1.92
P136	0.19	0.19	0.11	1.98
P137	0.29	0.22	0.24	1.88
P139	0.22	0.21	0.17	1.96
P140	0.18	0.15	0.16	1.92
P141	0.26	0.19	0.16	2.00
P142	0.21	0.18	0.24	1.95
P144	0.21	0.19	0.20	2.03
P146	0.25	0.16	0.21	2.14
P147	0.23	0.20	0.11	2.22
P148	0.25	0.24	0.46	1.86
P149	0.25	0.20	0.22	1.98
P150	0.22	0.20	0.15	2.06
P151	0.27	[0.20]	0.10	2.11
P152	0.33	[0.27]	0.17	1.95
P153	0.33	0.16	0.33	1.88
P154	0.18	0.16	0.26	1.98
P156	0.32	0.27	0.22	1.96
P157	[0.37]	0.23	0.45	1.74
P158	0.49	0.33	0.17	2.03
P160	0.43	0.26	0.46	1.76
P161	0.26	0.21	0.14	2.01
P162	0.46	0.29	0.21	1.96
P163	0.20	0.17	0.10	2.06
P164	0.18	0.15	0.08	2.08
P165	0.27	0.27	0.16	2.03
P166	0.26	0.24	0.18	2.01
P167	0.31	0.24	0.12	2.06
P168	0.33	0.27	0.12	2.07
P169	0.19	0.14	0.21	2.00
P170	0.23	0.15	0.14	1.83
P171	0.21	0.14	0.18	1.96
P172	0.27	0.19	0.38	1.79
P173	0.37	0.22	0.41	1.76
P174	[0.27]	[0.20]	0.27	1.92
P175	0.20	[0.15]	0.19	2.00
P176	[0.20]	[0.19]	0.21	1.99
P177	0.24	0.23	0.11	2.09
P178	0.33	0.28	0.42	1.77
P179	0.37	[0.28]	0.36	1.83
P180	[0.21]	[0.19]	0.22	1.96
P181	0.24	0.19	0.12	1.94
P182	0.22	0.21	0.21	1.98
P183	0.23	0.19	0.37	1.83
P184	0.28	0.26	0.16	2.04
P185	0.35	0.33	0.40	1.82
P186	[0.33]	[0.25]	0.37	1.84
P187	0.43	[0.26]	0.27	1.93
P188	0.24	0.24	0.39	1.83
P189	0.25	0.24	0.23	2.01
P190	0.23	0.20	0.11	2.09
P191	0.32	0.28	0.21	1.97
P192	0.36	0.34	0.21	2.04
P193	0.39	[0.23]	0.10	2.11
P194	0.23	0.21	0.20	1.96
P196	0.25	0.17	0.41	1.78
P197	0.25	0.25	0.16	2.02
P198	0.19	0.19	0.20	2.03
P199	0.23	0.21	0.19	1.97
P200	0.18	0.14	0.34	1.87
P201	0.20	0.20	0.10	2.18
P202	0.38	0.28	0.14	2.14
P203	0.41	0.30	0.20	2.06
P204	0.43	[0.27]	0.28	1.99

遺構名	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
P205	0.47	0.36	0.42	1.81
P206	0.27	0.24	0.32	1.93
P207	0.39	0.36	0.15	2.13
P208	0.20	0.17	0.16	2.02
P209	0.46	0.19	0.16	2.00
P210	0.26	0.20	0.14	2.13
P211	0.25	0.19	0.08	2.15
P212	0.27	[0.18]	0.12	2.10
P213	0.24	0.22	0.16	2.07
P214	0.30	0.30	0.26	1.98
P215	0.21	[0.20]	0.37	1.84
P216	0.44	0.40	0.47	1.78
P217	[0.29]	[0.27]	0.39	1.80
P218	0.26	[0.22]	0.39	1.84
P219	0.26	[0.17]	0.31	1.91
P220	0.46	0.41	0.13	2.08
P221	0.22	0.20	0.13	2.08
P222	0.50	0.44	0.39	1.81
P223	0.31	0.23	0.45	1.73
P224	0.34	0.26	0.22	1.97
P225	0.22	0.22	0.32	1.85
P226	0.18	0.15	0.11	2.06
P227	0.31	0.29	0.40	1.79
P228	0.26	0.26	0.36	1.84
P229	0.23	0.23	0.30	1.81
P230	0.28	0.23	0.25	1.90
P231	0.19	0.16	0.11	2.04
P232	0.31	0.22	0.11	2.05
P233	0.25	0.23	0.18	2.00
P234	0.35	[0.22]	0.43	1.74
P235	0.36	0.25	0.50	1.71
P236	0.29	0.28	0.27	1.92
P237	0.26	0.20	0.11	2.07
P238	0.36	0.22	0.20	1.97
P239	0.23	0.16	0.10	2.04
P240	0.38	0.28	0.31	1.87
P241	0.32	0.29	0.21	1.91
P242	0.30	0.25	0.16	2.00
P243	0.25	0.21	0.11	2.05
P244	0.28	0.25	0.21	1.99
P245	0.23	0.20	0.21	1.94
P246	0.24	0.22	0.20	1.82
P247	0.27	0.27	0.30	1.69
P248	0.31	0.23	0.16	1.95
P249	[0.24]	[0.18]	0.11	1.72
P251	0.31	0.29	0.26	1.92
P252	0.27	0.26	0.32	1.79
P253	[0.41]	[0.22]	0.27	1.77
P254	0.42	0.28	0.33	1.83
P255	0.20	[0.15]	0.21	2.04
P256	0.25	0.22	0.14	1.99
P257	0.22	0.22	0.20	2.04
P258	0.22	0.18	0.08	2.10
P259	0.26	0.21	0.12	2.07
P260	0.39	0.33	0.33	1.89
P261	[0.39]	[0.27]	0.39	1.69
P262	[0.23]	[0.19]	0.07	2.02
P263	0.30	0.21	0.35	1.83
P264	0.42	0.25	0.41	1.82
P265	0.29	0.27	0.38	1.82
P266	0.21	0.18	0.27	1.93
P267	0.27	0.25	0.15	2.05
P268	0.26	0.24	0.34	1.85
P269	0.24	0.20	0.15	2.03
P270	0.29	0.25	0.25	1.92
P271	0.38	0.26	0.22	1.96
P272	0.18	0.17	0.23	1.99
P273	0.18	0.15	0.11	2.08
P274	0.42	0.42	0.15	2.04
P275	0.29	0.26	0.28	1.97
P276	0.24	0.21	0.39	1.87
P277	0.20	0.20	0.25	1.99
P278	0.21	0.21	0.16	2.04
P279	0.22	0.21	0.14	2.12
P280	0.41	0.24	0.32	1.94
P281	0.27	0.23	0.20	2.00
P282	[0.23]	[0.21]	0.16	1.80
P283	0.28	0.23	0.28	1.92
P284	0.38	0.29	0.35	1.84

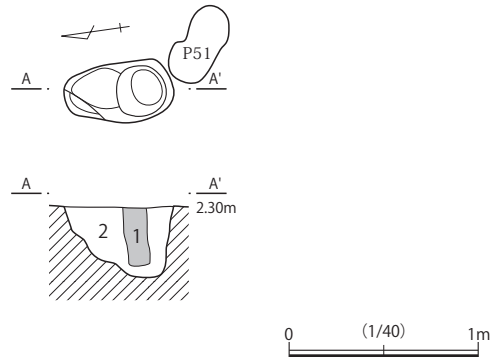
第14表 ピット計測表(2)

[]は現存値、単位はm。

遺構名	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
P285	0.27	0.23	0.17	2.19
P286	[0.37]	[0.24]	0.26	1.94
P287	0.19	0.18	0.14	2.09
P289	0.28	0.24	0.14	2.12
P290	[0.19]	[0.16]	0.21	1.94
P291	[0.18]	[0.15]	0.22	1.92
P292	0.35	0.28	0.25	1.99
P293	0.66	0.37	0.37	1.88
P294	0.33	0.28	0.26	1.86
P295	0.25	0.25	0.14	2.01
P296	0.23	0.20	0.14	1.99
P297	0.30	0.24	0.22	1.92

遺構名	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
P298	[0.22]	[0.21]	0.11	1.87
P299	[0.10]	[0.11]	0.10	1.88
P300	[0.23]	[0.16]	0.17	1.92
P301	0.38	0.34	0.38	1.76
P303	0.25	0.25	0.32	1.91
P305	0.30	0.28	0.35	1.95
P307	0.27	0.26	0.35	1.99
P309	0.28	0.26	0.23	2.07
P310	0.19	0.18	0.31	2.20
P311	0.31	0.26	0.36	1.92
P312	0.26	0.21	0.10	2.16
P313	0.26	0.20	0.28	2.02

遺構名	長軸長	短軸長	深さ	底面標高
P314	0.26	0.20	0.13	2.19
P317	0.34	0.28	0.59	1.66
P318	0.28	0.23	0.32	1.95
P319	0.26	0.23	0.11	2.13
P320	[0.18]	[0.17]	0.28	2.01
P321	0.21	0.18	0.15	1.89
P322	0.23	0.21	0.21	1.85
P323	0.31	0.26	0.15	1.77
P324	[0.21]	[0.18]	0.16	1.75
P325	[0.18]	[0.17]	0.12	2.08
P326	0.21	[0.18]	0.32	1.81

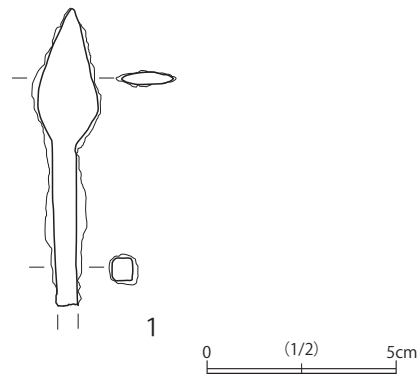


P52

土層説明 (A A')

1. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性あり、縮まりやや弱。明黄褐色シルト粒子少量含む。
2. 明黄褐色シルト (2.5Y7/6)。粘性、縮まりあり。明黄褐色シルトブロック主体層。

第48図 P 52 実測図 (S = 1/40)



第49図 P 320 出土遺物実測図 (S = 1/2)

第15表 P 320 出土遺物観察表

法量の () は推定、[] は現存、一は不明・計測不能

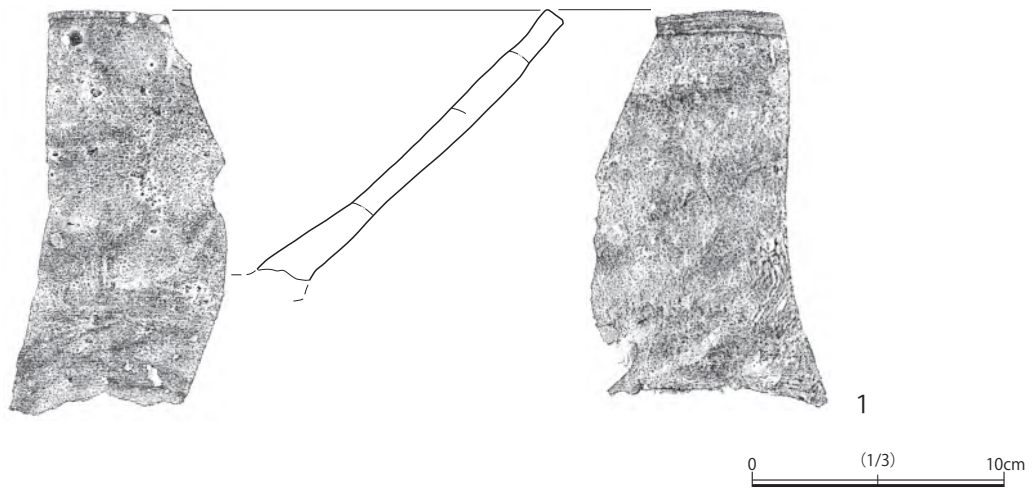
挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
49-1 12-5	P 320	金属製品 鉄鏃	[7.9]	1.85	0.6	14.3	鏃被部下端～茎部欠損。関無両丸造長三角形式。

第7節 遺構外出土遺物

遺物（第50図 第16表 図版12）

出土状況：表土や攪乱及びその他の時期の遺構からは全部で19点の遺物が出土した。武蔵産の須恵器甕が2点、須恵系土師質土器坏が1点、中国龍泉窯の青磁碗が2点、常滑産の中世陶器鉢が5点、瀬戸産と考えられる中世陶器鉢が1点、在地と考えられる中世陶器鉢が1点、産地不明の中世陶器鉢が1点、常滑産の中世陶器甕が2点、常滑産の中世陶器壺が1点、中世陶器短頸壺が1点、在地産の中世陶器壺が1点、香炉の足と考えられるものが1点である。このうち1点を図示し、2点を写真掲載した。

土器：1は常滑産の中世陶器Ⅱ類鉢で14世紀前半のものと考えられる。図版12-6・7は中国龍泉窯の13世紀の青磁碗である。



第50図 遺構外出土遺物実測図（S = 1/3）

第16表 遺構外出土遺物観察表

法量の（ ）は推定、[]は現存、—は不明・計測不能

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別 器種	法量 (cm) 口径 器高 底径	形態・成形・技法／釉薬・文様などの特徴	胎土	胎土色	備考
— 12-6	SD07	磁器 碗	— — —	ロク口成形。 青磁釉。鎚蓮弁文。	—	灰白色 (5Y6/1)	体部破片資料。 中国（龍泉窯）。 13c。
— 12-7	SD07	磁器 碗	— — —	ロク口成形。 青磁釉。劃花文。	—	灰白色 (5Y7/1)	体部破片資料。 中国（龍泉窯）。 13c。
50-1 12-8	SD08	中世陶器 鉢	— [10.7] —	体部から口縁部に向かって直線的に開く。口唇部は平坦に成形されている。外面斜位、内面横位ヘラナデ後、口縁部横ナデ。	砂粒少量 密	灰黄褐色 (10Y6/2)	口縁部～体部破片資料。 常滑産。 Ⅱ類、1300～ 1350年。

第5章 その他の時期の遺構と遺物

第1節 溝跡

第7号溝跡

遺構（第51図 図版8）

位置：A～K-6～16グリッド。重複関係：第3号溝跡を切る。主軸方位：N-46°-W。規模・形状：調査区内ではやや蛇行するものの、概ね直線状に検出され、北西・南東方向の調査区外に続いている。断面形は半円形を呈する。調査区内で確認された長さは55.88m、上端幅1.38～2.43m、下端幅0.43～1.72m、確認面からの深さは0.29～0.40m前後で、調査区内では南東から北西に向かって緩やかに下る。覆土：全部で7層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積と考えられる。ピット：I-14グリッドで南西壁際に1基穿たれる。深さは0.20mである。備考：第8号溝跡と平行しているので、道路跡の側溝の可能性はある。

遺物

本遺構の時期のものと考えられる遺物は出土していない。

時期

本遺構はIV層を切って構築されており、覆土上層はIII層で堆積し、覆土中の含有物にはIII層のブロックや粒子などがあるため、近世以降に機能していたと推測される。

第8号溝跡

遺構（第51図 図版8）

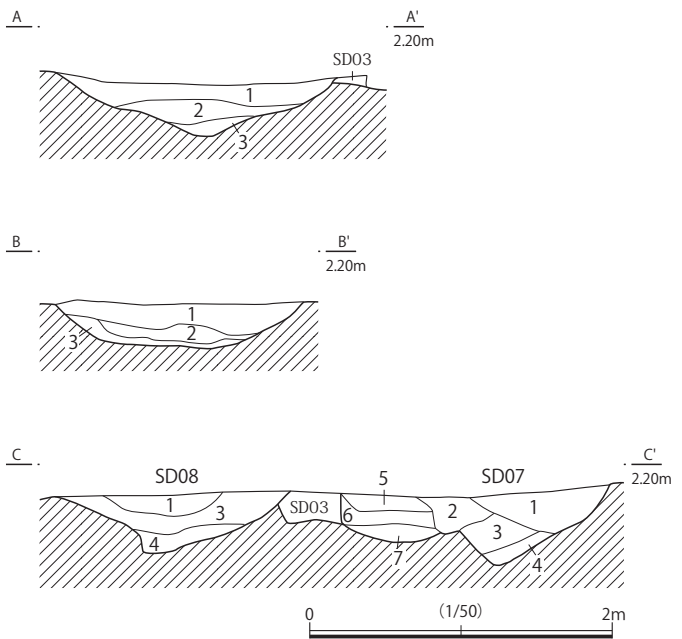
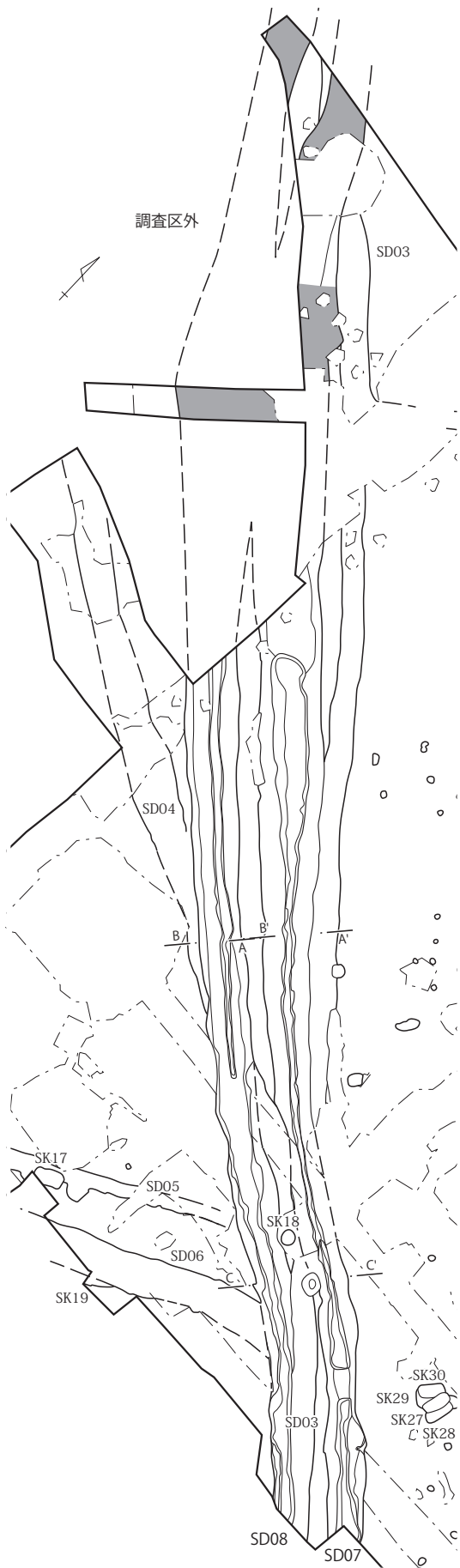
位置：A～K-6～16グリッド。重複関係：第4・6号溝跡を切る。主軸方位：N-43°-W。規模・形状：調査区内で南西方向にやや弓なりになるものの、概ね直線状に検出され、北西・南東方向の調査区外に続いている。断面形は半円形を呈する。調査区内で確認された長さは57.99m、上端幅1.76～1.95m、下端幅0.28～0.67m、確認面からの深さは0.32～0.45mで、調査区内では南東から北西に向かって緩やかに下る。覆土：全部で4層に分層でき、含有物や堆積状況から自然堆積と考えられる。備考：第7号溝跡と平行しているので、道路跡の側溝の可能性はある。

遺物

本遺構の時期のものと考えられる遺物は出土していない。

時期

本遺構はIV層を切って構築されており、覆土上層はIII層で堆積し、覆土中の含有物にはIII層のブロックや粒子などがあるため、近世以降に機能していたと推測される。

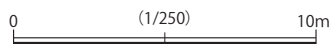


SD07・08

土層説明 (A A'・B B'・C C')

1. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック、酸化ブロック中量含む。
2. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック少量含む。
3. 褐灰色シルト (10YR4/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック微量含む。
4. 灰黄褐色シルト (10YR4/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルトブロック多量、酸化ブロック少量含む。
5. 暗褐色シルト (10YR3/3)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子中量、明黄褐色シルトブロック少量含む。
6. 黒褐色シルト (10YR2/2)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子少量含む。
7. 黒色シルト (10YR2/1)。粘性、締まりあり。明黄褐色シルト粒子、ブロック微量含む。

■ 未掘範囲



第 51 図 第 7・8号溝跡実測図 (S = 1/250・1/50)

第2節 遺構外出土遺物

遺物

出土状況：弥生時代後期から古墳時代初頭と平安時代から中世以外の遺物としては、縄文時代中期の土器が4点、古墳時代後期の土師器甕が1点、近世の土器の鉢が1点、カワラケが1点出土しているが、すべて小破片のため図示できなかった。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 2012『南原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第396集 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岡田恒三郎 1968『蕨城はどこにあったか』戸田市教育委員会・戸田市文化財研究会
- 黒田恵之ほか 1995『志茂遺跡・神谷遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第18集 北区教育委員会
- 小島清一 1990『鍛冶谷・新田口遺跡Ⅴ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第2集
1991『南原遺跡Ⅴ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第3集
1994『鍛冶谷・新田口遺跡Ⅵ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第4集
1996『南原遺跡Ⅵ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第5集
1996『上戸田本村遺跡Ⅱ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第6集
1998『上戸田本村遺跡Ⅲ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第7集
2001『鍛冶谷・新田口遺跡Ⅶ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第8集
2004『上戸田本村遺跡Ⅳ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第9集
2005『鍛冶谷・新田口遺跡Ⅷ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第10集
- 小林 高ほか 1995『豊島馬場遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第16集 北区教育委員会
- 坂上直嗣 2002『志茂遺跡発掘調査報告』文化財研究紀要第15集 北区教育委員会
- 坂上直嗣ほか 2006『東京都荒川区町屋四丁目実揚遺跡』芹澤 昭・マツヤハウジング株式会社・大成エンジニアリング株式会社
- 塩野 博 1969『南原（高知原）遺跡第1次発掘調査概要』戸田市文化財調査報告Ⅲ 埼玉県戸田市教育委員会
1972『南原（高知原）遺跡第2・3次発掘調査概要』戸田市文化財調査報告Ⅴ 埼玉県戸田市教育委員会
- 塩野 博ほか 1987『南町遺跡Ⅰ』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第1集
- 嶋村一志ほか 1999『豊島馬場遺跡Ⅱ』北区埋蔵文化財調査報告第25集 北区教育委員会
- 早田利宏ほか 2010『南原遺跡Ⅸ』戸田市文化財調査報告ⅩⅦ 株式会社プロネクサス・大成エンジニアリング株式会社・戸田市教育委員会
- 西口正純 1986『鍛冶谷・新田口遺跡 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第62集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 東園千輝男 1993『東京都板橋区徳丸原大橋遺跡』板橋市場遺跡調査会
- 水澤裕子 2000『舟渡遺跡第3地点発掘調査報告書』板橋区舟渡二丁目遺跡調査会
- 山崎 武 1998『東京都板橋区舟渡遺跡第2地点発掘調査報告書』板橋区遺跡調査会調査報告第8集 板橋区遺跡調査会

第6章 南原遺跡第11次調査地点から出土した木製品の樹種

鈴木伸哉（首都大学東京）

はじめに

南原遺跡第11次調査において、13世紀頃のものと思われる井戸跡から木製品が出土した。ここではこれらの樹種を同定し、併せて若干の検討を加えた。

1. 資料と方法

樹種同定は木材切片のプレパラート観察によりおこなった。木製品から片刃剃刀によって木材の横断面・接線断面・放射断面の切片を採取し、これをガムクロラルで封入して同定用プレパラートとした。プレパラートにはMH11-1～3の標本番号を付した。プレパラートと顕微鏡写真は出土資料とともに戸田市教育委員会で保管されている。

2. 結果と考察

プレパラート3点のうちには、針葉樹1分類群と広葉樹2分類群の、あわせて3分類群が認められた。ここではそれぞれの分類群の木材解剖学的な記載をおこない、代表的な標本の顕微鏡写真を図版13に示すことで、同定の根拠を明らかにする。

針葉樹

スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科（図版13: MH11-2）

垂直・水平樹脂道のいずれをも欠く針葉樹材。晩材は量多く明瞭。樹脂細胞が早材の終わりから晩材にかけて接線方向に散在する。仮道管の内壁にらせん肥厚は認められない。分野壁孔は大型で孔口が水平に開くスギ型で、1分野に1～2個。

広葉樹

アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科（図版13: MH11-3）

中型で丸いやや厚壁の道管が単独で1～3列幅の帯をなして放射方向に配列する放射孔材。木部柔組織はいびつな接線状から2～3細胞幅の帯状。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列の小型のものと複合状で大型のものからなる。

エノキ属 *Celtis* ニレ科（図版13: MH11-1）

やや大型で丸い道管が単独か2個複合して年輪のはじめに1～2列並び、晩材では徐々に径を減じた小道管が塊をなして斜めに連なる傾向をみせて配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の1～4細胞ほどが直立する異性で10細胞幅くらいとなり、韌細胞をもつ。

3. 考察

何らかの製品の一部とされるものには、アカガシ亜属（第30図1）とエノキ属（第26図7）が用いられていた。

本州に分布するアカガシ亜属にはイチイガシやアカガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、重硬な木材をもつものが多い。この性質を利用して古くから農具や工具に盛んに用いられてきた。本製品も何らかの農具や工具の一部と見られ、適材が選択されていたことがわかる。

関東地方に分布するおもなエノキ属にはエノキとエゾエノキの2種があり、いずれも日当りの良いところに生育する。木材はやや硬いが強度は高くないとされ、器具として用いられることは多くない。埼玉県地域の遺跡における出土例を見ても、自然木や杭、建築材などに多く、小型の製品には稀である（伊東・山田編 2012）。今後、器種の判明によって、その用途や用材選択の背景が明らかになることが期待される。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編 2012『木の考古学』海青社

第7章 まとめ

南原遺跡の発掘調査は、今回の調査で 11 次目を数える。今回の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代初頭の周溝状遺構 3 基と溝跡 1 条、平安時代から中世の掘立柱建物跡 6 棟、柵列跡 4 列、井戸跡 8 基、溝跡 6 条、土坑 31 基、ピット 273 基、近世以降の溝跡 2 条を検出した。以下にこれまでの発掘調査の成果を踏まえ、今回の発掘調査の成果について述べる。

1. 弥生時代後期から古墳時代初頭

弥生時代から古墳時代初頭に帰属すると考えられる遺構は周溝状遺構 3 基と溝跡 1 条である。

市内ではこれまでに、本報告で「周溝状遺構」とした遺構と類似した形状を呈する遺構が、鍛冶谷・新田口遺跡で 113 基、南原遺跡で 22 基、南町遺跡で 2 基、上戸田本村遺跡で 3 基、前谷遺跡で 8 基報告されており、市域での検出数は今回の調査による 3 基を含めると総計 151 基を数えることになる。

類似の周溝状遺構は東京都八王子市宇津木向原遺跡の調査以来「方形周溝墓」の名で報告事例が蓄積されてきたが、及川良彦氏（及川 1998）や飯塚義雄氏（飯塚 1998）によって提示された疑義以来、その性格や分類について検討がなされてきた。近年、福田聖氏はこれらの疑義を受けて方形周溝墓と建物の外部施設としての「周溝持建物跡」の分類を試み、ある程度の判断基準を導いているが（福田 2003）、その性格や意味付け、系譜関係等については未だ検討が必要なところが大きい。

今回検出した第 1 号～第 3 号周溝状遺構は、先学によって「方形周溝墓」なのか、「周溝を持つ建物跡」なのか議論されてきた遺構と同種のものである。本報告にあたり、市域で検出された周溝状遺構を集成し（第 17 表）、周溝の形状及び開口部位によって、1 類：周溝プランが方形状となり、各辺が直線状となるもの、2 類：周溝プランが隅丸方形状となり、各辺がやや弧状となるもの、3 類：周溝プランが略円形～円形となるものの 3 類型に大きく分類し、さらに開口部の位置によって、1 類を a～d 種、2 類を a～d 種、3 類を a・b 種として分類を行った（第 52 図）。なお、本調査によって検出した第 1 号～第 3 号周溝状遺構の 3 基はいずれも、南東辺中央に開口部を有する隅丸方形状の形状を呈することから、2 類 c 種に分類している。

分類の結果、各類型の数は、1 類と 2 類がほぼ同数となり、3 類が少ないという結果になった。また、開口部位については各類型によって差異が見られた。すなわち、1 類では b・c・d 種が拮抗するが、2 類では b・c 種が多く、d 種が少ないという傾向である。2 類に d

戸田市域における周溝状遺構類型					
周溝形状		開口部位			
 1類	 a b c d	1類	59基	a	2基
				b	13基
				c	12基
				d	13基
				不明	24基
 2類	 a b c d	2類	57基	a	0基
				b	18基
				c	13基
				d	4基
				不明	22基
 3類	 a b	3類	11基	a	3基
				b	8基
その他		24基			

※複数箇所開口部を有するものは開口部毎にカウントした

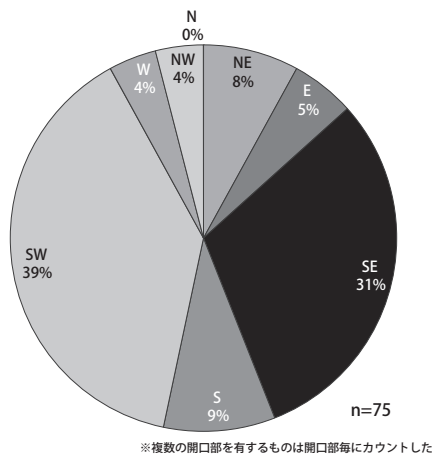
第 52 図 戸田市域における周溝状遺構の分類

第17表 戸田市域における周溝状遺構一覧表

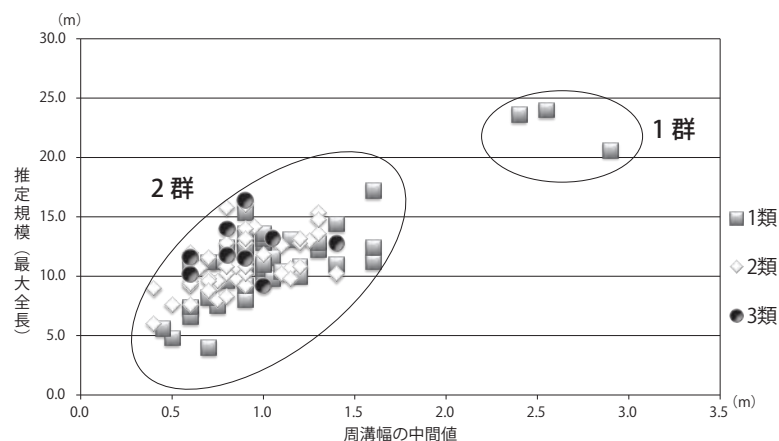
No.	遺跡名	調査次	報告書記載遺構名	規模 (m)	類型		周溝幅 (m)			開口部 方位	溝中付属遺構		周溝内付属遺構	
					周溝形状	開口部位	最小幅	最大幅	中間値		土坑	段	ビット	竪穴・土坑
1	南原	11	第1号周溝状遺構	10.6 (NW-SE) 10.8 (NE-SW)	2	c	0.6	1.0	0.8	SE		○		
2	南原	11	第2号周溝状遺構	8.2 (NW-SE) 8.3 (NE-SW)	2	c	0.5	1.1	0.8	SE		○		
3	南原	11	第3号周溝状遺構	14.6 (NW-SE) 14.8 (NE-SW)	2	c	0.9	1.7	1.3	SE		○		
4	南町	1	第1号方形周溝墓	17.2(NE-SW)	1	—	1.1	2.1	1.6	—	○	○		○
5	南町	1	第2号方形周溝墓	—	1	—	1.1	1.4	1.3	—				
6	上戸田本村	1	第1号方形周溝墓	—	1	—	1.3	1.6	1.5	—	○		○	○
7	上戸田本村	1	第2号方形周溝墓	—	2	—	0.6	1.0	0.8	—		○		
8	上戸田本村	4	第1号溝	—	2	—	0.8	1.3	1.1	—				
9	前谷	1	第1号方形周溝墓	13.1(NE-SW) 12.1(NW-SE)	1	b	0.8	1.5	1.2	SW		○		
10	前谷	1	第2号方形周溝墓	—	2	—	0.3	0.7	0.5	—		○		
11	前谷	4	第1号周溝状遺構	—	1	c	0.7	1.0	0.9	—				
12	前谷	4	第2号周溝状遺構	9.4 (NW-SE) 11.2 (NE-SW)	1	b/d	0.5	1.0	0.8	NW/SE		○	○	
13	前谷	4	第3号周溝状遺構	11.4 (NW-SE) 10.0 (NE-SW)	2	b	0.4	1.4	0.9	SE		○		
14	前谷	4	第4号周溝状遺構	11.6 (NW-SE) 11.6 (NE-SW)	1	c	0.4	1.7	1.1	SE		○		
15	前谷	4	第5号周溝状遺構	—	—	—	1.0	1.0	1.0	—		○		
16	前谷	4	第6号周溝状遺構	—	1	—	0.5	1.0	0.8	—				
17	南原	1	第1号方形周溝墓(第1溝)	9.8(N-S)	2	b	0.6	1.1	0.9	E				
18	南原	2-A	第2号方形周溝墓	—	—	—	1.3	1.3	1.3	—	○			
19	南原	2-A	第3号方形周溝墓	7.5 (NW-SE) 8.0 (NE-SW)	1	c	0.7	1.1	0.9	SE	○	○		
20	南原	2-A	第4号方形周溝墓	10.0m (NE-SW)	1	—	0.7	1.3	1.0	—	○	○		
21	南原	2-A	第5号方形周溝墓	9.6 (NW-SE) 8.8 (NE-SW)	2	c	0.4	0.8	0.6	SW	○	○		
22	南原	2-B 9	第6号方形周溝墓 15号周溝墓—SX015	10.7(W-E)	2	—	0.6	0.7	0.7	—		○		
23	南原	2-D	第7号方形周溝墓	—	—	—	0.6	1.1	0.9	—		○		
24	南原	5	第2号溝	—	1	—	0.8	1.2	1.0	—				
25	南原	5	第3号溝	—	1	—	0.8	1.5	1.2	—				
26	南原	6	第1号方形周溝墓	10.8 (NW-SE)	1	c	0.9	1.1	1.0	E		○		
27	南原	9	1号周溝墓—SX001	14.2 (W-E) 12.5 (N-S)	2	c	0.8	1.1	1.0	S	○			
28	南原	9	3号周溝墓—SX003	24.0 (W-E) 23.3 (N-S)	1	—	1.6	3.5	2.6	—	○			
29	南原	9	4号周溝墓—SX004	—	—	—	1.0	1.3	1.2	—	○			
30	南原	9	6号周溝墓—SX006	—	—	—	1.0	1.0	1.0	—				
31	南原	9	7号周溝墓—SX007	9.4 (W-E)	2	—	0.6	0.9	0.8	—				
32	南原	9	8号周溝墓—SX008	11.8(NW-SE)	2	b	0.8	1.2	1.0	SE				
33	南原	9	9号周溝墓—SX009	9.6 (W-E) 9.0 (N-S)	2	—	0.6	0.9	0.8	—				
34	南原	9	10号周溝墓—SX010	11.5 (W-E) 10.3 (N-S)	3	—	0.7	1.1	0.9	—	○	○		
35	南原	9	11号周溝墓—SX011	—	3	b	0.6	1.0	0.8	S	○			
36	南原	9	12号周溝墓—SX012	—	—	—	2.0	2.0	2.0	—		○		
37	南原	9	13号周溝墓—SX013	10.8(NW-SE)	2	—	0.6	1.1	0.9	—				
38	南原	9	14号周溝墓—SX014	10.7(W-E)	2	—	0.9	1.4	1.2	—				
39	鍛冶谷・新田口	1-A 事業団	第1号方形周溝墓 第61号方形周溝墓	12.2 (W-E)	1	d	1.0	1.6	1.3	SW		○		
40	鍛冶谷・新田口	1-A 事業団	第2号方形周溝墓 第97号方形周溝墓	6.7 (NW-SE) 7.5 (NE-SW)	1	—	0.5	1.0	0.8	—				
41	鍛冶谷・新田口	2-A 事業団	第3号方形周溝墓 第98号方形周溝墓	8.0 (W-E)	2	—	0.5	1.0	0.8	—				
42	鍛冶谷・新田口	1-B 2-B 事業団	第1号方形周溝墓 第1号方形周溝墓 第37号方形周溝墓	10.8 (NE-SW)	1	—	0.8	1.6	1.2	—		○		
43	鍛冶谷・新田口	1-B 2-B 事業団	第2号方形周溝墓 第2号方形周溝墓 第25号方形周溝墓	12.6 (NW-SE) 11.6 (NE-SW)	2	c	1.0	1.2	1.1	—	○			
44	鍛冶谷・新田口	2-A 事業団	第4号方形周溝墓 第58号方形周溝墓	10.2 (NE-SW)	2	—	1.0	1.2	1.1	—				
45	鍛冶谷・新田口	3-A 事業団	第5号方形周溝墓 第57号方形周溝墓	9.2 (W-E) 7.8 (N-S)	1	a	0.6	1.2	0.9	—	○	○		
46	鍛冶谷・新田口	2-B 事業団	第3号方形周溝墓 第28号方形周溝墓	8.2 (NW-SE)	1	c	0.6	0.8	0.7	SW				
47	鍛冶谷・新田口	2-B 事業団	第4号方形周溝墓 第22号方形周溝墓	15.8 (NW-SE)	2	c	0.4	1.2	0.8	—				
48	鍛冶谷・新田口	2-B 事業団	第5号方形周溝墓 第18号方形周溝墓	12.6 (NW-SE) 12.8 (NE-SW)	1	b	0.8	1.8	1.3	SW				
49	鍛冶谷・新田口	2-B 事業団	第6号方形周溝墓 第35号方形周溝墓	—	—	—	0.6	0.8	0.7	—				

No.	遺跡名	調査次	報告書記載遺構名	規模 (m)	類型		周溝幅 (m)			開口部方位	溝中付属遺構		周溝内付属遺構	
					周溝形状	開口部位	最小幅	最大幅	中間値		土坑	段	ビット	竪穴・土坑
50	鍛冶谷・新田口	2-B 事業団	第7号方形周溝墓 第21号方形周溝墓	15.0 (NW-SE) 15.4 (NE-SW)	2	b	1.0	1.6	1.3	SW				
51	鍛冶谷・新田口	3-C 事業団	第1・3号溝 第38号方形周溝墓	14.0(N-S)	3	—	0.4	1.2	0.8	—				
52	鍛冶谷・新田口	3-D 事業団	1号溝 第82号方形周溝墓	9.2(N-S)	2	—	0.8	1.0	0.9	—				
53	鍛冶谷・新田口	3-D 事業団	2号溝 第77号方形周溝墓	11.8(NW-SE)	3	—	0.6	1.0	0.8	—				
54	鍛冶谷・新田口	3-E	第1号方形周溝墓	—	2	—	0.5	0.7	0.6	—				
55	鍛冶谷・新田口	3-E	第2号方形周溝墓	12.5m (NE-SW)	1	—	0.7	1.1	0.9	—				
56	鍛冶谷・新田口	3-E	第3号方形周溝墓	—	1	—	0.4	0.8	0.6	—				
57	鍛冶谷・新田口	3-E	第4号方形周溝墓 (溝状遺構)	—	2	—	0.4	0.8	0.6	—				
58	鍛冶谷・新田口	5	第1号方形周溝墓	13.2 (NW-SE) 13.0 (NE-SW)	2	b	0.8	1.3	1.1	SW		○	○	
59	鍛冶谷・新田口	5	第2号方形周溝墓	8.9 (NW-SE) 9.8 (NE-SW)	2	b	0.4	1.0	0.7	SW	○	○	○	
60	鍛冶谷・新田口	5	第1号土坑・第2号溝	—	1	c	0.8	0.8	0.8	SW		○		
61	鍛冶谷・新田口	6	第1号方形周溝墓	10.6 (W-E) 8.3 (N-S)	1	d	0.8	1.2	1.0	NW	○			
62	鍛冶谷・新田口	7	第1号方形周溝墓	13.2	3	b	0.8	1.3	1.1	SW	○			
63	鍛冶谷・新田口	7	第2号方形周溝墓	—	1	—	0.9	1.0	1.0	—				
64	鍛冶谷・新田口	8	第1号方形周溝墓	9.8m (NE-SW) 9.3m (NW-SE)	1	b	0.7	1.4	1.1	SW	○			
65	鍛冶谷・新田口	8	第2号方形周溝墓	—	2	—	1.5	1.9	1.7	—				
66	鍛冶谷・新田口	8	第3号方形周溝墓	13.0m (NE-SW) 12.6m (NW-SE)	2	b	1.0	1.5	1.3	SW				
67	鍛冶谷・新田口	8	第4号方形周溝墓	9.8 (NE-SW)	2	—	0.9	1.4	1.2	—				
68	鍛冶谷・新田口	8	第5号方形周溝墓	—	—	—	0.7	1.0	0.9	—				
69	鍛冶谷・新田口	8	第6号方形周溝墓	—	2	—	0.4	0.6	0.5	—				
70	鍛冶谷・新田口	8	第7号方形周溝墓	—	—	—	0.6	0.9	0.8	—				
71	鍛冶谷・新田口	事業団	第1号方形周溝墓	12.4 (NE-SW) 12.4 (NW-SE)	1	b	0.4	1.2	0.8	SW	○			
72	鍛冶谷・新田口	事業団	第2号方形周溝墓	12.3 (NW-SW)	1	c/d	0.6	1.2	0.9	SW/E	○			
73	鍛冶谷・新田口	事業団	第3号方形周溝墓	9.6 (NW-SE)	2	c	0.4	1.0	0.7	SE				
74	鍛冶谷・新田口	事業団	第4号方形周溝墓	10.8 (NW-SE) 10.8 (NE-SW)	2	c	0.8	1.6	1.2	SW	○			
75	鍛冶谷・新田口	事業団	第5号方形周溝墓	15.4 (NW-SE) 10.0 (NE-SW)	1	b	0.6	1.2	0.9	SW	○			
76	鍛冶谷・新田口	事業団	第6号方形周溝墓	7.4 (N-S) 6.0 (W-E)	1	d	0.4	0.8	0.6	NW	○			
77	鍛冶谷・新田口	事業団	第7号方形周溝墓	18.4 (NW-SE) 20.6 (NE-SW)	1	b	2.0	3.8	2.9	SW				
78	鍛冶谷・新田口	事業団	第8号方形周溝墓	11.0 (NW-SE)	1	c	1.0	1.8	1.4	SW				
79	鍛冶谷・新田口	事業団	第9号方形周溝墓	—	2	b	0.8	1.8	1.3	SW				
80	鍛冶谷・新田口	事業団	第10号方形周溝墓	6.0 (NW-SE) 6.6 (NE-SW)	1	b/d	0.4	0.8	0.6	SW/SE /NE				
81	鍛冶谷・新田口	事業団	第11号方形周溝墓	10.2 (W-E) 10.0 (N-S)	2	b	0.8	1.0	0.9	W				
82	鍛冶谷・新田口	事業団	第12号方形周溝墓	12.8 (W-E)	2	b	0.8	1.6	1.2	—				
83	鍛冶谷・新田口	事業団	第13号方形周溝墓	—	1	—	0.6	1.0	0.8	—				
84	鍛冶谷・新田口	事業団	第14号方形周溝墓	—	—	—	0.4	0.8	0.6	—				
85	鍛冶谷・新田口	事業団	第15号方形周溝墓	12.8 (N-S)	3	b	1.0	1.8	1.4	SW				
86	鍛冶谷・新田口	事業団	第16号方形周溝墓	7.6 (W-E)	2	c	0.4	0.8	0.6	S				
87	鍛冶谷・新田口	事業団	第17号方形周溝墓	10.2 (NW-SE) 9.4 (NE-SW)	2	d	0.6	1.0	0.8	SW	○			
88	鍛冶谷・新田口	事業団	第19号方形周溝墓	9.2 (NW-SE)	2	c	0.4	0.8	0.6	NE				
89	鍛冶谷・新田口	事業団	第20号方形周溝墓	—	—	—	0.4	1.0	0.7	—				
90	鍛冶谷・新田口	事業団	第23号方形周溝墓	12.6 (NW-SE) 12.4 (NE-SW)	1	b	0.6	1.2	0.9	SE	○			
91	鍛冶谷・新田口	事業団	第24号方形周溝墓	4.8 (NE-SW)	1	c	0.4	0.6	0.5	SE				
92	鍛冶谷・新田口	事業団	第26号方形周溝墓	8.4 (NE-SW)	—	—	0.4	0.6	0.5	—				
93	鍛冶谷・新田口	事業団	第27号方形周溝墓	13.2 (NE-SW) 14.4 (NW-SE)	1	b	1.2	1.6	1.4	SE				
94	鍛冶谷・新田口	事業団	第29号方形周溝墓	11.6 (NE-SW) 11.2 (NW-SE)	2	d	0.4	1.0	0.7	SW				
95	鍛冶谷・新田口	事業団	第30号方形周溝墓	10.6 (NE-SW) 14.0 (NW-SE)	2	b	0.6	1.2	0.9	SE	○			
96	鍛冶谷・新田口	事業団	第31号方形周溝墓	12.6 (NE-SW) 12.8 (NW-SE)	2	—	0.6	1.2	0.9	—	○			
97	鍛冶谷・新田口	事業団	第32号方形周溝墓	10.2 (NW-SE) 13.2 (NE-SW)	—	—	0.8	1.4	1.1	—				
98	鍛冶谷・新田口	事業団	第33号方形周溝墓	11.2 (NW-SE)	2	d	0.6	1.2	0.9	SW				
99	鍛冶谷・新田口	事業団	第34号方形周溝墓	11.6 (W-E) 12.4 (N-S)	1	a	0.6	1.2	0.9	—	○	○		
100	鍛冶谷・新田口	事業団	第36号方形周溝墓	16.4 (NW-SE)	3	b	0.6	1.2	0.9	S				

No.	遺跡名	調査次	報告書記載遺構名	規模 (m)	類型		周溝幅 (m)			開口部方位	溝中付属遺構		周溝内付属遺構	
					周溝形状	開口部位	最小幅	最大幅	中間値		土坑	段	ビット	竪穴・土坑
101	鍛冶谷・新田口	事業団	第39号方形周溝墓	13.2 (NW-SE) 12.0 (NE-SW)	2	b	0.8	1.6	1.2	SE	○	○		
102	鍛冶谷・新田口	事業団	第40号方形周溝墓	9.4 (N-S) 10.8 (W-E)	1	b/d	0.4	0.8	0.6	W/SE				
103	鍛冶谷・新田口	事業団	第41号方形周溝墓	—	—	—	0.8	0.8	0.8	—				
104	鍛冶谷・新田口	事業団	第42号方形周溝墓	—	—	—	1.0	1.2	1.1	—				
105	鍛冶谷・新田口	事業団	第43号方形周溝墓	—	1	—	1.0	1.6	1.3	—				
106	鍛冶谷・新田口	事業団	第44号方形周溝墓	12.8 (NE-SW) 12.8 (NW-SE)	2	b	0.6	1.0	0.8	SW	○	○		
107	鍛冶谷・新田口	事業団	第45号方形周溝墓	—	1	—	0.4	0.8	0.6	—	○	○		
108	鍛冶谷・新田口	事業団	第46号方形周溝墓	—	1	—	0.6	1.0	0.8	—		○		
109	鍛冶谷・新田口	事業団	第47号方形周溝墓	16.0 (NW-SE) 14.4 (NE-SW)	2	b	0.6	1.2	0.9	SW	○	○		
110	鍛冶谷・新田口	事業団	第48号方形周溝墓	13.6 (NE-SW) 13.6 (NW-SE)	2	c	1.0	1.6	1.3	SE				
111	鍛冶谷・新田口	事業団	第49号方形周溝墓 第50号方形周溝墓	5.6 (NW-SE) 7.4 (NE-SW)	1	d	0.4	0.8	0.6	W				
112	鍛冶谷・新田口	事業団	第51号方形周溝墓	12.0 (NW-SE)	2	—	0.4	0.8	0.6	—				
113	鍛冶谷・新田口	事業団	第52号方形周溝墓	11.6 (W-E)	3	b	0.4	0.8	0.6	S				
114	鍛冶谷・新田口	事業団	第53号方形周溝墓	10.2 (W-E)	3	b	0.4	0.8	0.6	S				
115	鍛冶谷・新田口	事業団	第54号方形周溝墓	—	—	—	0.4	0.8	0.6	—				
116	鍛冶谷・新田口	事業団	第55号方形周溝墓	12.8(NE-SW) 12.0 (NW-SE)	1	c	0.4	1.6	1.0	SE				
117	鍛冶谷・新田口	事業団	第56号方形周溝墓	13.2 (NE-SW) 9.0 (NW-SE)	2	c	0.6	1.2	0.9	SE		○		
118	鍛冶谷・新田口	事業団	第59号方形周溝墓	10.8 (N-S)	1	b	0.6	1.2	0.9	S				
119	鍛冶谷・新田口	事業団	第60号方形周溝墓	5.6 (N-S) 5.2 (W-E)	1	d	0.2	0.7	0.5	SW				
120	鍛冶谷・新田口	事業団	第62号方形周溝墓	—	—	—	1.4	1.4	1.4	—				
121	鍛冶谷・新田口	事業団	第63号方形周溝墓	—	—	—	0.6	1.0	0.8	—				
122	鍛冶谷・新田口	事業団	第64号方形周溝墓	11.2 (N-S)	1	—	1.6	1.6	1.6	—				
123	鍛冶谷・新田口	事業団	第65号方形周溝墓	—	—	—	0.4	0.6	0.5	—	○			
124	鍛冶谷・新田口	事業団	第66号方形周溝墓	11.2 (NW-SE)	1	—	0.6	0.8	0.7	—				
125	鍛冶谷・新田口	事業団	第67号方形周溝墓	9.0 (NE-SW)	2	—	0.4	0.4	0.4	—				
126	鍛冶谷・新田口	事業団	第68号方形周溝墓	—	—	—	0.6	1.0	0.8	—				
127	鍛冶谷・新田口	事業団	第69号方形周溝墓	8.8 (N-S)	2	—	0.4	1.0	0.7	—		○		
128	鍛冶谷・新田口	事業団	第70号方形周溝墓	3.8 (NW-SE) 4.0 (NE-SW)	1	d	0.4	1.0	0.7	E				
129	鍛冶谷・新田口	事業団	第71号方形周溝墓	10.4 (NE-SW)	1	b/d	1.0	1.2	1.1	SW/NE				
130	鍛冶谷・新田口	事業団	第72号方形周溝墓	7.6 (NW-SE)	2	d	0.4	0.6	0.5	NW				
131	鍛冶谷・新田口	事業団	第73号方形周溝墓	8.8 (N-S) 9.6 (W-E)	1	d	0.4	1.2	0.8	SE/NW				
132	鍛冶谷・新田口	事業団	第74号方形周溝墓	23.6 (W-E)	1	—	1.8	3.0	2.4	—	○	○		
133	鍛冶谷・新田口	事業団	第75号-A方形周溝墓	9.4 (NE-SW) 8.6 (NW-SE)	2	b	0.4	0.8	0.6	SE	○	○		
134	鍛冶谷・新田口	事業団	第76号方形周溝墓	12.4 (NW-SE)	1	—	1.2	2.0	1.6	—		○		
135	鍛冶谷・新田口	事業団	第78号方形周溝墓	10.8(NE-SW) 11.4 (NW-SE)	2	b	0.4	1.2	0.8	NW/SE		○		
136	鍛冶谷・新田口	事業団	第79号方形周溝墓	—	—	—	0.6	0.6	0.6	—				
137	鍛冶谷・新田口	事業団	第80号方形周溝墓	—	—	—	0.4	1.0	0.7	—				
138	鍛冶谷・新田口	事業団	第81号方形周溝墓	13.6 (NW-SE)	1	—	0.6	1.2	0.9	—	○	○		
139	鍛冶谷・新田口	事業団	第83号方形周溝墓	13.2 (NW-SE)	1	c	0.8	1.2	1.0	NE	○			
140	鍛冶谷・新田口	事業団	第84号方形周溝墓	10.0 (NW-SE) 9.8 (NE-SW)	1	d	1.2	1.2	1.2	W		○		
141	鍛冶谷・新田口	事業団	第85号方形周溝墓	9.2 (NW-SE)	3	b	0.8	1.2	1.0	NE				
142	鍛冶谷・新田口	事業団	第86号方形周溝墓	9.8 (NW-SE) 10.2 (NE-SW)	2	b	1.0	1.8	1.4	SW	○	○		
143	鍛冶谷・新田口	事業団	第87号方形周溝墓	—	1	—	1.2	1.4	1.3	—				
144	鍛冶谷・新田口	事業団	第89号方形周溝墓	—	—	—	—	—	—	—				
145	鍛冶谷・新田口	事業団	第90号方形周溝墓	13.6 (NE-SW) 10.4 (NW-SE)	1	—	0.8	1.2	1.0	—				
146	鍛冶谷・新田口	事業団	第91号方形周溝墓	—	—	—	0.4	1.8	1.1	—				
147	鍛冶谷・新田口	事業団	第92号方形周溝墓	6.0 (NW-SE)	2	b	0.4	0.4	0.4	NE				○
148	鍛冶谷・新田口	事業団	第93号方形周溝墓	10.8 (NW-SE)	2	—	0.8	1.0	0.9	—		○		
149	鍛冶谷・新田口	事業団	第94号方形周溝墓	11.0 (NE-SW)	1	c	0.8	1.2	1.0	SE				
150	鍛冶谷・新田口	事業団	第95号方形周溝墓	—	2	—	0.8	1.2	1.0	—				
151	鍛冶谷・新田口	事業団	第96号方形周溝墓	—	3	b	0.8	1.2	1.0	—				



第 53 図 周溝状遺構の開口部方位



第 54 図 周溝状遺構類型と規模の関係

種が少ない理由は、周溝形状の円形化による「角」に対する意識の希薄化にその原因を求められると考えるが、周溝形状と開口部位の関係性が示す意味について今後の検討を要する。

今回の調査で検出した周溝状遺構 3 基は全て南東方向に開口部を持つ点が特徴として挙げられる。開口部方位については埼玉県埋蔵文化財調査事業団による『鍛冶谷・新田口遺跡』（西口ほか 1986）においても分析がなされているが、今回改めて市域における周溝状遺構の開口部方位を図示したものが第 53 図である。最も多い方位が南西であり、これに追随するのが南東である。北東・北西に開口部を有するものを含め、北向きに開口部を有するものは極端に少なく、南東・南西を含めた南向きに開口部を有するものが 79% を占める。開口部方位に偏りが見られることについては、集落における構造物相互の位置関係や、川や谷等自然地形によるもの、集落構成員の血縁的關係、地縁的關係による方位規制等、様々な要因が考えられる。一方、南西や南東に開口部を多く有するという傾向は、荒川対岸に所在する周溝状遺構を多数検出した遺跡として著名な東京都北区豊島馬場遺跡をはじめ、立地を違える他の遺跡においても多く見られるものである。したがって、この傾向は遺跡の立地や地形に起因するものというよりは、当該期の周溝状遺構に普遍的に見られる属性であるといえる。個々の周溝状遺構が「墓」であるか、「建物跡」であるかによって、その意味付けは大きく変わるが、日の出から南中を経て日の入りに至る太陽の日周運動に関係するものである可能性が考えられよう。

今回の調査で検出した周溝状遺構の全長および推定規模は、第 1 号周溝状遺構が 10.60m、第 2 号周溝状遺構が 8.18m、第 3 号周溝状遺構が 14.58m を測る。また、周溝の上端幅は第 1 号周溝状遺構が 0.56m ～ 1.01m、第 2 号周溝状遺構が 0.48m ～ 1.11 m、第 3 号周溝状遺構が 0.47 ～ 1.73m を測る。市域で検出した周溝状遺構は、1 群：[最大全長 20m 以上、周溝幅中間値 2.4m 以上]、2 群：[最大全長 18m 以下、周溝幅中間値 1.6m 以下] の 2 グループに分かれる（第 54 図）。1 群に属するものは、一覧表 28、77、132 の 3 基のみであり、今回の調査による 3 基を含め、他は全て 2 群に属する。1 群に属する周溝の類型は 1 類のみであるが、2 群は 1 類から 3 類まで、全ての類型が属することになる。その規模の差から考えても、1 群と 2 群で遺構の性格が異なるであろうことは明白であるが、それぞれの周溝状遺構の類型と規模の関係が示す意味については、今後出土遺物や細部の遺構形状を含めた検討が求められる。

出土遺物は、壺形土器や甕形土器、台付甕形土器、高坏形土器、小型土器が、第1号周溝状遺構からは13点、第2号周溝状遺構からは11点、第3号周溝状遺構からは53点出土しているが、いずれも相対的に出土量は少ないと言える。関東地方で検出される周溝状遺構は、これまでS字口縁甕や頸部凸帯付壺などの出土から東海地方との関係性が指摘されており、これらの所謂東海地方系の土器は、市域においても南町遺跡や南原遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡で検出された周溝状遺構からある程度まとまった量が出土している。本報告では言及し得ないが、今後これらの在地の土器に系譜を持たない土器群と周溝状遺構の関係を検討することにより、当該期の社会的側面が明らかとなるであろう。

2. 平安時代から中世

平安時代から中世に帰属すると考えられる遺構は、掘立柱建物跡6基、柵列跡4列、井戸跡8基、溝跡6条、土坑31基、ピット273基である。平安時代に帰属する遺物は第1号井戸跡出土の須恵器2点、陶器1点と第3号溝跡出土の須恵器1点のみであり、他の遺物はほぼ13世紀代に比定できるものである。中世の出土遺物は、主に井戸跡と溝跡から出土し、常滑や渥美、南多摩、東金子産の陶器に加え、中国龍泉窯産の青磁、同景德鎮窯産の白磁が出土した。

各遺構の帰属時期については、遺物の出土がなかった掘立柱建物跡や柵列跡など推測に頼らざるを得ない部分が多いが、いずれも13世紀頃に荒川の氾濫などの理由で廃絶を迎えたものと考えられる。

遺構の配置関係については、各遺構の同時期性の問題について明確にすることは困難であるが、柵列や区画溝などの空間分割を目的とした遺構と掘立柱建物跡、井戸跡などの生活に関わると考えられる遺構が密集して存在することから、本調査区が中世段階では居住域であったことが推測できる。

南原遺跡周辺は、下戸田村の南西に桃井播磨守直常の居城である「戸田の御所」が所在したとする『新編武蔵国風土記稿』の記述から、これらの所在について議論がなされている。しかしながら、「太平記」や「南方紀伝」にも登場するとされる直常が戸田の地へ来たという記録は残されておらず、また当時荒川沿岸に所在した多福院や海禅寺を開基したとされる直常の子、桃井中務少輔直和についても、他の文献史料に見られる多くの年代的矛盾が存在することから、「戸田の御所」の年代や居住者を特定するには至っていないのが現状である。今回検出した中世の遺構がこの「戸田の御所」に関連するものである可能性を捨て去ることはできないが、直常や直和の没年代や直和を開基とする海禅寺、多福院の開山年代が14世紀後半と推測されていることから（岡田1968）、今回検出した中世の遺構が桃井氏の居城としての「戸田の御所」の痕跡である可能性は低いと考える。しかしながら、今回の調査では市内では初めてとなる中国産磁器の出土が見られることから、これらを所有していたある程度の有力者が本調査区周辺に存在していたことは間違いないものと思われる。

結語

今回の調査によって、弥生時代後期から中世にわたる多くの遺構・遺物を検出することができた。今後これらの資料を他の遺跡における資料と比較、検討していくことによって、当時に生活を営んだ人々の社会や文化を解明していくことが出来ると考える。

引用文献

- 飯島義男 1998 「古墳時代前期における『周溝をもつ建物』の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号群馬県立歴史博物館
- 及川良彦 1998 「関東地方の低地遺跡の再検討—弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡を中心に—」『青山考古』第15号 青山考古学会
- 岡田恒三郎 1968 『蕨城はどこにあったか』戸田市教育委員会・戸田市文化財研究会
- 西口正純ほか 1986 『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵財調査事業団報告書第62集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 福田聖 2003 「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡(6)」『研究紀要』第18号 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第1号周溝状遺構完掘（南西から）



2 第1号周溝状遺構完掘（北西から）



3 第1号周溝状遺構遺物出土状況①（南西から）



4 第1号周溝状遺構遺物出土状況②（北から）



5 第1号周溝状遺構 BB' 断面（南東から）



1 第2号周溝状遺構完掘（南東から）



2 第3号周溝状遺構完掘（南東から）



1 第3号周溝状遺構遺物出土状況①（北西から）



2 第3号周溝状遺構遺物出土状況②（西から）



3 第3号周溝状遺構遺物出土状況③（南東から）



4 第3号周溝状遺構遺物出土状況④（南東から）



5 第9号溝跡完掘（南東から）



1 第1～6号掘立柱建物跡・第1～4号柵列跡完掘



2 第1号掘立柱建物跡 P11 断面 (南から)



3 第6号掘立柱建物跡 P306 断面 (南から)



4 第2号柵列跡 P60 断面 (南から)



5 第2号柵列跡 P143 断面 (南から)



1 第1号井戸跡完掘（南から）



2 第2号井戸跡完掘（南から）



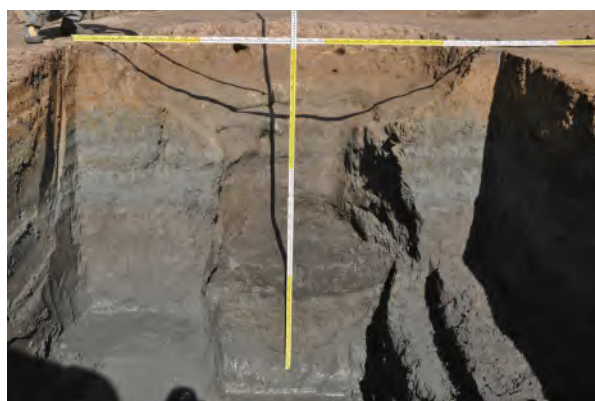
1 第1号井戸跡上部断面（南東から）



2 第1号井戸跡下部断面（南東から）



3 第2号井戸跡上部断面（南東から）



4 第2号井戸跡下部断面（南東から）



5 第1～5号井戸跡完掘（南東から）



1 第3号井戸跡完掘（南から）



2 第4号井戸跡完掘（南から）



3 第5号井戸跡完掘（南から）



4 第6号井戸跡完掘（南から）



5 第7号井戸跡完掘（南から）



6 第8号井戸跡完掘（南から）



7 第1号溝跡完掘（南東から）



8 第1・2号溝跡完掘（南西から）



1 第3・4・7・8号溝跡完掘（北西から）



2 第5・6号溝跡完掘（北東から）



3 第8号土坑完掘（南から）



4 第8号土坑断面（南から）



5 第13号土坑完掘（南から）



6 第20号土坑完掘（南から）



7 第24号土坑完掘（南から）



8 第27~30号土坑完掘（南西から）



第1号周溝状遺構出土遺物



第2号周溝状遺構出土遺物

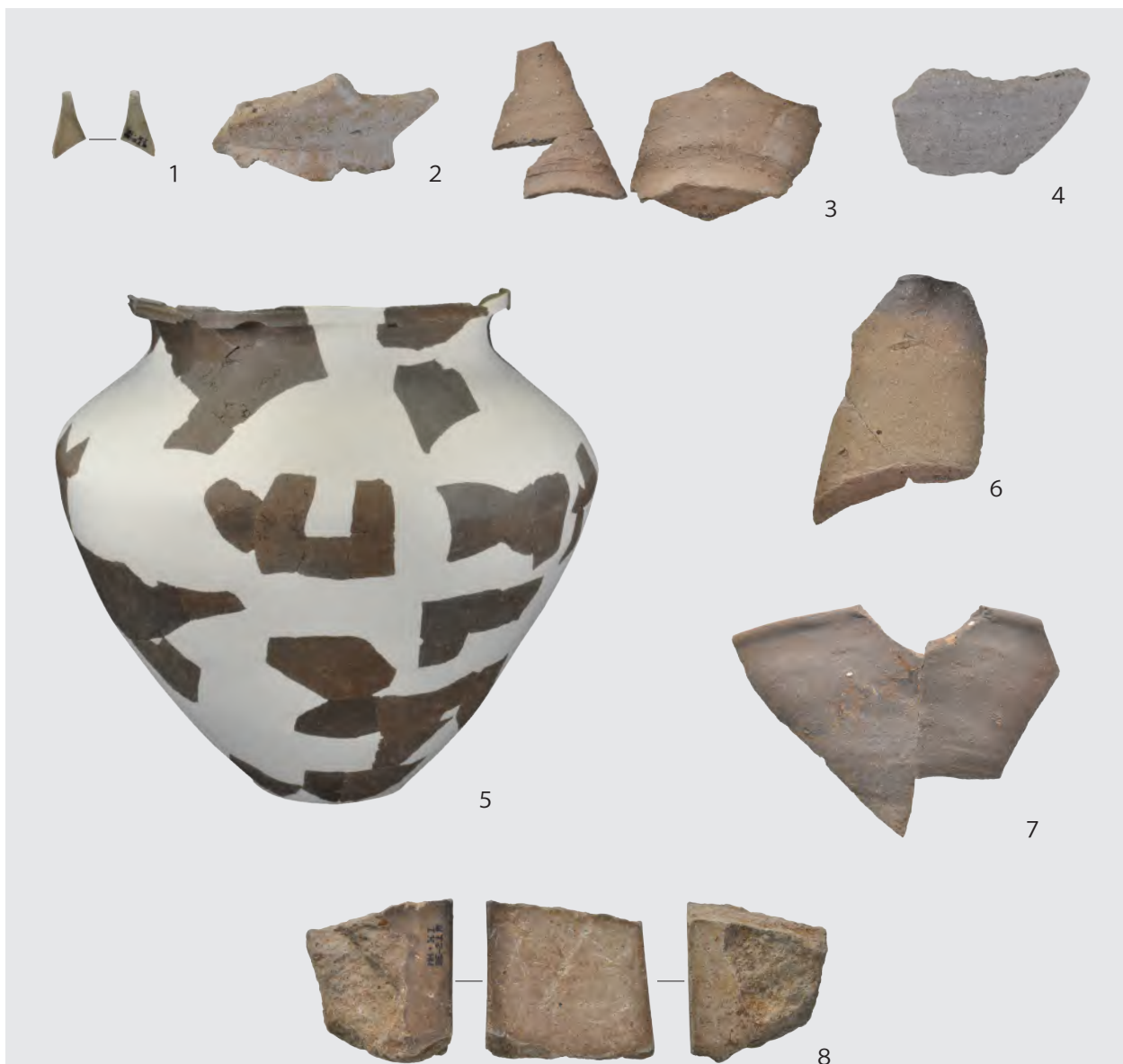


第3号周溝状遺構出土遺物



弥生時代後期～古墳時代初頭遺構外出土遺物

第1号井戸跡出土遺物



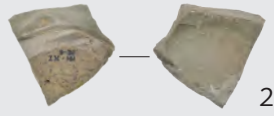
第2号井戸跡出土遺物



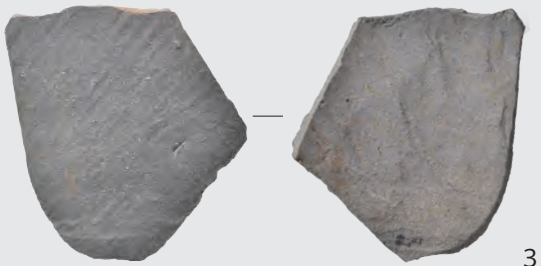
第3号井戸跡出土遺物



1
第4号井戸跡出土遺物



2
第6号井戸跡出土遺物



3
第3号溝跡出土遺物



4
第6号溝跡出土遺物



5
P320 出土遺物



6

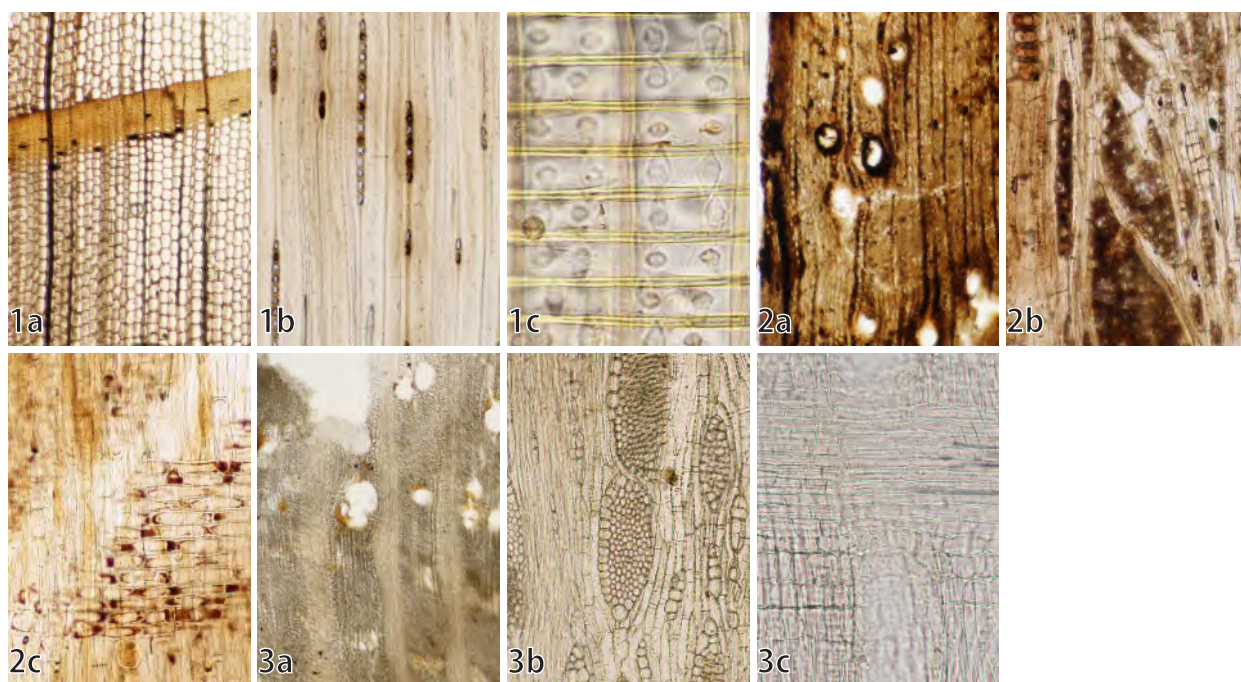


7



8

平安時代～中世遺構外出土遺物



1 : スギ (MH11 - 2) , 2 : アカガシ亜属 (MH11 - 3) , 3 : エノキ属 (MH11 - 1) .
a : 横断面 × 32, b : 接線断面 × 80, c : 放射断面 × 160 (1 c : × 320)

南原遺跡第 11 次調査地点から出土した木製品の顕微鏡写真

報告書抄録

ふりがな	みなみはらいせきじゅういち まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ
書名	南原遺跡XI 埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
シリーズ名	戸田市文化財調査報告
シリーズ番号	18
編著者名	岩井聖吾 坂上直嗣 山崎裕子
編集機関	戸田市教育委員会
所在地	〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1 TEL 048(441)1800
発行年月日	2013(平成25)年12月25日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
みなみはらいせき 南原遺跡	とだしみなみちよう 戸田市南町2369-1	11224	06-002	35° 48' 12"	139° 40' 30"	12.9.3 ~ 12.10.31	1,956.11	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南原遺跡	集落跡	弥生時代後期 ~ 古墳時代初頭	周溝状遺構 3基 溝跡 1条	弥生土器・土製品	・荒川流域の微高地上でよく検出される周溝状遺構を3基検出。
	古墳 円墳 城館跡	平安時代 ~ 中世	掘立柱建物跡 6棟 柵列跡 4列 井戸跡 8基 溝跡 6条 土坑 31基 ピット 273基	須恵器・磁器・陶器・土器・木製品・金属製品	・中世段階では居住域であった可能性を示す遺構を検出。
		近世以降	溝跡 2条	土器	

要約	<p>本調査地点は、周知の遺跡である南原遺跡の範囲に属し、JR埼京線戸田公園駅から南西約500mの埼玉県戸田市南町2369-1に位置する。</p> <p>南原遺跡は、荒川によって形成された平坦な沖積地（荒川低地）に、氾濫や流路変更によって左岸に発達した微高地（自然堤防）上に立地している。</p> <p>調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭では周溝状遺構3基、溝跡1条が検出され、弥生土器や土製品が出土した。平安時代から中世では掘立柱建物跡6棟、柵列跡4列、井戸跡8基、溝跡6条、土坑31基、ピット273基が検出され、須恵器、磁器、陶器、土器、木製品、金属製品などが出土した。その他の時期としては、縄文時代中期と考えられる土器や、近世以降の溝跡が2条検出され、カワラケなどが出土している。</p> <p>弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構や遺物は、南原遺跡に形成された大規模な集落の一端を構成するもので、遺構密度から調査地点周辺は集落の縁辺部である可能性が高い。平安時代から中世では、生活の痕跡を示す遺構が検出されていることから、本調査地点周辺は居住域であったと推測される。</p>
----	---

戸田市文化財調査報告 XVIII

南原遺跡 XI

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行・編集 埼玉県戸田市教育委員会
〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1
TEL 048(441)1800

印刷 前田印刷株式会社 東京支店
〒162-0811 東京都新宿区水道町2-13
江戸川橋HOビル3F

発行日 平成25年12月25日